



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	司祭長アヴァクム自伝（訳及び註）
Author(s)	松井, 茂雄; Matsui, Shigeo
Citation	スラヴ研究, 10, 85-144
Issue Date	1966
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/4982">https://hdl.handle.net/2115/4982</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000112879.pdf



# 司祭長アヴァクム自伝

松井茂雄訳

## まえがき

ここにかけらる「司祭長アヴァクム自伝」《Житие протопопа Аввакума, им самим написанное》の試訳は、A. H. Робинсонが1963年にАН СССРから出した校訂本のテキストによったもので、「丁付け」もこの本によりました、ただし和露両文の構造上の相違から厳密を期しがたいので、欄外（偶数頁は左、奇数頁は右）に大体のところを示しました。本の表題は次のとおりです：Жизнеописания Аввакума и Епифания, исследование и тексты（テキストの部分は、стр. 139-178）。なお次のテキストも参照しました、—— Н. К. Гудзий (ред.) и др., Житие протопопа Аввакума, им самим написанное и другие его сочинения, ГИХЛ, М. 1960, стр. 53-122; Н. К. Гудзий (ред.), Хрестоматия по древней русской литературе XI-XVII веков, УЧПЕДГИЗ, М. 1955, стр. 490-502; Ad. Stender-Petersen (edit.), Anthology of old Russian literature, Columbia university press, New York and London, 1962（初版は1954）、p. 405-421。後の二つはいずれも1927年に出た Памятники истории старообрядчества XVII в., книга первая, вып. 1-й, Л. からの抜萃です。これらの間にはかなりの異同がありますので、そういう場合には最も出版年代の新しい Робинсон の校訂本にもっぱら従いました。

アヴァクムの自伝には多くの異本があり、それらはおおむね三つの系統本に分けられています。上記のテキストはいずれもアヴァクムの自筆本によっており、これによって代表される一群が一般に A 系統本と呼ばれ、1672—1673年に成立したと考えられています。B 系統に属するものは遅くとも1676年までに成立し、B 系統本は A と B との中間の過程に成ったものと思われます。B, B 系統の諸本には A 系統本にないアヴァクムの書き加えが見られます、ГИХЛ の版にはそれらの中で《文学的興味》のあると思われるものを欄外に所収しております。この試訳では自筆本の結構を乱さないように留意しつつその中の若干を訳出し、本文中に〔B: . . . 〕または〔B: . . . 〕と明示しました。

翻訳にあたっては、英訳 The life of the Archpriest Avvakum by Himself. Translated from the Seventeenth Century Russian by Jane Harrison and Hope Mirrlees, with a Preface by Prince D. S. Mirsky. London, 1924. 及び The Life of Archpriest Avvakum by Himself. — в изд. « A Treasury of Russian Spirituality ». Compiled and edited by G. P. Fedotov, London, 1950, стр. 137-181 (перевод Елены Извольской). 仏訳 La vie de l'archiprêtre Avvakum, écrite par lui-même. Traduite du vieux russe avec une introduction et des notes par Pierre Pascal. Paris, 1938. を参照しました。また多くの疑点について木村彰一先生からいろいろ御教示をいただきました、感謝の意を表したいと思います。

なお註は、訳者自身の研究がまだ足りませんので、前記の校訂者、翻訳者たちの註釈から妥当と考えられるものを取捨選択し、本文の理解に必要なと思われる程度に止め、研究者間の意見の相違をあげようようなことは故意に避けました。

× × ×

188ウ

司祭長  
 アヴァクム  
 は、修道僧エピ  
 ファーニイ<sup>1)</sup>から、神  
 の御わざが忘れられませ  
 ぬよう、自伝を書けと申しつ  
 けられました、——その故は、こ  
 の修道僧が彼のざんげ聴問僧だからで  
 ございます。われらが主キリスト  
 を讃<sup>ほ</sup>めまつるために、彼がざ  
 んげ聴問僧から申しつけ  
 られましたのは、こ  
 のためでございます  
 ます。アー  
 メン<sup>2)</sup>。

- 189オ 神聖きわまりない三位一体の神よ、全世界の創り主よ！ とるにもたらぬわたくしがこれから語ろうと思っておりますことを、分別をもって書きはじめ、りっぱな仕事で終わることが出来ますよう、わたくしを助け、わたくしの心をお導きください。わたくしは自分の無知をよく心得ておりますゆえ、ひれ伏して、あなたにお願い申しあげ、あなたの御加護におすがりいたします、——よい仕事によってわたくしの愚かな目が開かれ、裁きの庭であなたがお選びなされたすべての人々と共にあなたの右の席に加わることが出来ますよう、このよい仕事を成しとげます心構えのために、わたくしの分別を正し、わたくしの心を堅固にしてください。さて今こそ、主よ、祝福をお与えください、わたくしは心から息をつき、ディオニシウス・アレオパギータ<sup>3)</sup>の《神の御名について》<sup>4)</sup>の言葉<sup>か</sup>を藉りて、語り始めることにいたします。神には初めもなく終わりもない真実の御名、すなわち本質をあらわすものと神にふさわしい御名、すなわち称讃をあらわすものがございます。本質をあらわす御名は、実在、光明、真実、生命でして、この四つだけが本来の御名であります。称讃の御名は数多くございます、すなわち、主、全能のお方、理解を絶したお方、畏れおおいお方、輝きに満ちあふれたお方、三位一体を形づくられるお方、栄光の王、いかなる所にもいらせられるお方、炎、霊、神などであり

1) エピファーニイの生地・生年は共に不詳。アヴァクムのざんげ聴問僧(プストゼールスク流刑中)となつたところから見て、アヴァクムよりいくらか年長であつたことが知れる。1645年、白海湖上のソロヴェーツキイ島のソロヴェーツキイ僧院に入った。7年間、新発意として修練を積み、1652年に修道士となり、5年間をここで過ごした。その後白海沿岸地方の反ニーコン派の諸処の僧庵で暮らし、1666年頃、旧教復帰をツァーリに説くためにモスクワに出た。1667年7月17日、初志をひるがえさなかつたために、破門の宣告を受け、舌を切られ、アヴァクムたちと一緒にプストゼールスクに流された。1682年4月14日、アヴァクム、ラザーリ、フォードルと共に火刑に処された。

2) この序文はエピファーニイによって三人称で書かれている。

3) 使徒パウロの弟子であつたと伝えられている(CM, 使徒行伝, XVII, 34)。中世の西欧及び東欧の教会で非常に権威を持っていた四つの神学上の論説と10通の書簡の作者とされていた。しかし、現在では、これらの著作は、新プラトン学派の影響を受けた5世紀末—6世紀始めのシリヤの不明の作者によって書かれたことが明らかにされている。ロシアでは、1371年に既にギリシャ語から教会スラヴ語に翻訳されている。

4) デイオニシウスの第二の著作。

## 司祭長アヴァクム自伝

ます、その他の御名につきましてはこれにならって考えなさるがよい。

このディオニシウスは真理についてこう語っております、——自己自身の否定は真理からの離脱である、なぜと申すに、真理は実在であるから。もし真理が実在であるならば、真理からの離脱は実在の否定である。神は実在から離脱できない、神には存在しないということはありません。 190オ

わたくしたちはこう申します、——改革派のやからは、まことの主、神聖で生命をはぐくまれる霊からの離脱によって、神の実在を失ってしまったと。ディオニシウスによりますなら、ひとたび彼らが真理から離脱したからには、それはとりもなおさず実在をも否定したのであります。神はその実在から離脱できません、存在しないということは神にはありません。なぜと申しますに、わたくしたちのまことの神は永遠にあらせられるからでございます。真実という言葉は削除するくらいなら、彼らはふさわしい御名であります主という言葉は信仰簡条の中で唱えない方がよいのです<sup>1)</sup>。なぜと申しますに、この真実という言葉の中に神の本質があるのですから。わたくしたち、まことの信者は、これらの御名を二つながら崇めまつります、——父と子と共に敬いまつるわたくしたちの光、 190ウ  
聖霊を、真実にして生命をはぐくまれます主を信じております、わたくしたちは、神の御加護によりまして、その方のために苦しみ、死んでゆくのでございます。ディオニシウス・アレオパギータは、わたくしたちを慰め、その書の中でこう書いておられます、——次のような人こそまことに真実のキリスト教徒と申せましょう、その故は、真実によってキリストを理解し、こうして神の認識に至り、自らに打ち克ち、現世の欲望と誘惑にあずかることなく、節度をわきまえ、ありとあるまどわしの不信仰をはなれ、かつはまた、真実のために死に至るまで艱難辛苦するは申すに及ばず、俗世の汚れを知らずに生涯を終え、分別正しく世を送るからであります、その証しとなるのがキリスト教徒でございます。——さてこのディオニシウスは使徒パウロからキリストの信仰を教わったのですが、キリスト 191オ  
の信仰に帰依します前は、アテネにおりまして、星占いの道にたずさわっておりました。けれども、キリストを信じましてからは、こうしたことをすべて塵あくたのように見なした<sup>2)</sup>のでございます。彼は自分の書いた書物の中でテモテにこう申しております、《わが子よ、このようならわべだけの一切のまどわしが、ひとえに嘘偽と無常と滅びにすぎないのを知っておられるか？ 事実わたくしはその中を通してきましたが、嘘妄のほかには何ひとつとして得るところがありませんでした》。この書物をお読みの方はお分かりのことと存じます。星占いを愛する者は滅びの道に行くことになり、なぜと申しますに、救いを得るために真実の愛を受けられないからでございます。ですからこそ、彼らが 191ウ  
嘘偽を信ずるように、神はまどわしのわざをお送りになるのです、それは真実を信じないで不義を喜ぶ者が裁きを受けるためなのです。使徒書の275節をお読みになってください。

このディオニシウスがまだキリストの信仰に至らなかったころ、主のはりつけがございましたとき、一人の弟子とヘリオポリス<sup>4)</sup>におりまして、かようなことを目にしました、——日は暗く、月は血となり、星は昼の日なかに黒々と空に現われ<sup>5)</sup>たのです。彼は弟子にむかって、《この世の終わりがきたのか、それとも神の御子が病に苦しんでおられるのです》と申しました、それと言いますのも、万物がいつもとは違って一変したのを目にしたからで、彼が不思議に思いましたのはそのためでございます。このディオニシウスは、渡る日の光がかげりまるときにあらわれる太陽の微<sup>6)</sup>について書いております、——空には月と呼ばれる五つのさすらい星<sup>6)</sup>があります。神はこれらの星をほかの星のよう 192オ

1) アヴァクムは、従来の信仰簡条中にあった《真実の》という言葉がニーコンの改訂によって削除されたことを非難している。

2) ビリピ人への書、III, 8。

3) テサロニケ後書、II, 10-12。

4) 古代エジプトの都市（カイロの北31キロ）。

5) ヨエル書、II, 10, 31。

6) 迷星（現在の惑星）は、古代の占星術では5個とされていた。

に定った場所に置かれなかった、しかし、それらはあるいは怒りの徴をあらわしながら、あるいは正常な軌道をたどりつつ慈愛の徴をあらわしながら、全天をめぐるっております。あるさすらい星、すなわち一つの月が、もし西から太陽に近づき、その光をかくすならば、この日食は人間にたいする神の怒りをあらわします。もし月が東から近づくなれば、それは正常な軌道をたどりながら、太陽をかくします。

192ウ わがロシアにもその徴がございました、162年<sup>1)</sup>のこと、ペスト騒ぎの一と月前か一と月たらず前に、太陽が光を失いました。聖ペテロ祭の二週間ほど前<sup>3)</sup>、シベリヤの大主教シメオン<sup>4)</sup>がヴォルガ河を旅していましたが、昼のさなかに真の闇となりました、人々は泣く泣く三時間ほど岸べに立っており、太陽はかげり、月が西から近づきました。ディオニシウスによりますならば、神が人々にその怒りをあらわされたのです。そのころ、背教者ニーコンが信仰と教会の掟をゆがめました、そのため<sup>5)</sup>に神が烈火の怒りの盃をロシアの地に注がれたのです。ペストの勢いはそれこそたいへんなもので、<sup>6)</sup>今でも忘れることができません、わたくしたちは誰もがよく憶えております。その後、十四年ほどたちましてから、ふたたび日食がございました、聖ペテロの齋戒期中のことでした、金曜日の六時に、<sup>7)</sup>193オ 日が暗くなりました、太陽はかげり、月が西から近づいて、神の怒りをあらわしました、——このとき、高僧どもが、ほかの人たちともども、あわれにも不幸な人、司祭長アヴァクムの髪を大聖堂で切り落とし、破門の呪咀をあびせ、ウグレシヤの牢にほうりこんだのでございます。<sup>9)</sup>まことの信者は、教会の混乱のためにわが国でどんなことが起こっているかを承知しております。こんな話をするのもうたくさん、最後の審判の日にすべての人々にわかることです、そのときまでじっと耐え忍びましょう。

このディオニシウスは、イスラエルでヌンの子ヨシュアの前に示された太陽の徴について書いております。ヨシュアが異国の民を撃ちましたとき、太陽はギベオン空の上、すなわち真南にありました、ヨシュアは十字架をかたどり、つまり両手を広げて立ちました、彼が敵を撃ち滅ぼすまで太陽はその歩みを止めました。太陽は東に引き返し、つまりいったん後ずさりしまして、それからいつもの歩みにかえりました、さて太陽が十時に戻りましたので、この日とその夜のうちに三十四時間かかりました、<sup>10)</sup>かようなわけで一昼夜が十時間延びたのでございます。ヒゼキヤ王のときにも徴がございました、——太陽は昼の十二時にもとにもどり、この日とその夜のうちに三十六時間かかりました。<sup>11)</sup>ディオニシウスの書物をお読みなさい、くわしいことはそれでおわかりになりましょう。

またこのディオニシウスは、天使のことも書いております。彼は天使の九つの位階を三つの組に分けて数えあげ、彼らがどのように神を讃めまつるかを示しております。座天使とケルビムと熾天使は

1) 1654年8月2日(新暦12日)水曜。162年はいわゆる天地開びやく紀元7162年を略した書き方(西暦に直すには5508年を引けばよい)。

2) 事実と異なる。ペスト騒ぎは既に1654年の7月にモスクワで始っていた。

3) これも事実と相違する。聖ペテロ祭は6月29日、従って聖母昇天祭(8月15日)と取違えたものと思われる。

4) CM. 208オの註。

5) 総主教ニーコン(1605—1681)は1653年の春に教会の改革に着手した。

6) 黙示録、XVI, 1。

7) 1654年の7月から12月まで、ペストはモスクワその他の都市で猛威を振るった。モスクワでの死亡者は、全人口の半ば以上、15万人にのぼった。

8) アヴァクムの思い違い。14年後ではなくて、12年後の1666年6月22日(新暦7月2日)。

9) アヴァクムは、1666年5月13日、クレムリンのウスペンスキイ寺院で位階剥奪の上、破門の宣告を受け、5月15日ツァーリの命でモスクワ近郊ウグレシヤのニコラ修道院の牢に入れられた。

10) CM. ヨシュア記、X, 12-13。

11) CM. 烈王紀略下、XX, 8-11。

## 司祭長アヴァクム自伝

神の浄めをうけ、高らかに叫びます、——主の栄光<sup>1)</sup>のそのところより出づるものは讃むべきかな！——さて、彼らを通して、この浄めは、二番目の組、すなわち主天使と権天使と能天使に及びます、この組は神を讃めたたえながら、高らかに叫びます、——ハレルヤ、ハレルヤ、ハレルヤ！——《伊呂波<sup>2)</sup>事典集》によりますと、ハルは父を、エルは子を、イヤは聖霊を意味します。ニッサのグレゴリウス<sup>3)</sup>は、ハレルヤは神の讚美であると説き、大バシリウスは、ハレルヤは天使の言葉で、人間の言葉で申せば、神よ、あなたに栄光あれ！に当たると書いておられます。バシリウスの前までは、教会では《ハレルヤ、ハレルヤ、ハレルヤ！》と天使の言葉で歌っておりました。しかし、バシリウスのときになりましてから、彼は、天使の言葉を二回、三番目を人間の言葉で、《ハレルヤ、ハレルヤ、神よ、あなたに栄光あれ！》と歌うように命じられました。ディオニシウスにおきましても、バシリウスにおきましても、聖者たちの意見は一つでございませぬ、わたくしたちは讚美を三たびくりかえして、天使たちと共に神を讃めたたえ、ローマの異端にならって四たびくりかえしはいたしません。《ハレルヤ、ハレルヤ、ハレルヤ、神よ、あなたに栄光あれ！》と四たび歌いますのは、神の忌み嫌われるところ<sup>4)</sup>でございませぬ。このように歌う者に呪いあれ。さて話をもとにもどしましょう。三番目の組、すなわち力天使と大天使と天使は、二番目の組を通して浄めをうけ、《聖なるかな、聖なるかな、万軍の主エホバ、その栄光は天地に満つ！》と歌います。ごらんなさい、——この讚美の呼びかけも三回でございませぬ。いとも浄らかな聖母は、ブスコフのエフロシンの<sup>5)</sup>弟子でヴァシーリイ<sup>6)</sup>と申す者に現われなすって、ハレルヤについてくわしくお説きになりました。ハレルヤにこめられております神の讚美は大きうございませぬ、しかし、さかしらぶるやからによる侮辱も大きうございませぬ、——彼らは、ローマの流儀にならって、聖三位一体を四たび唱え、聖霊が御子からも発すると申しております。このようなへりくつは邪悪であり、神と聖者たちに呪われております。神よ、われらが主イエス・キリストの御名によりまして、このよこしまなたくらみからまことの信者たちをお守りください、このお方に、今のときも、絶えることなく、とこしえに栄光がありますように。アーメン。

大アタナシウスは申しておられます、——救いを得ようと願う者は、何よりもまず正教教会の信仰を保たなければなりません、これを完全に正しく守らない者は、疑いもなく永遠に滅びるであります。正教教会の信仰は次の通りでございませぬ、わたくしどもは、三位一体におわす一つの神を、単一におわす三位一体をあがめまつり、三つの位格を融合したり、唯一の本性を分割したりいたしません。一つは父の位格、一つは子の位格、いま一つは聖霊の位格であります、しかし、父と子と聖霊の神性は一つであり、その栄光は相同じく、その荘厳は等しく永遠でございませぬ。父のましますごとく、子もその通りにましまし、聖霊もその通りにいらせられます。父は無始無終であり、子は無始無終で

1) エゼキエル書、III, 12。

2) 《Алфавит》——百科辞典的性格を持った古代ロシアの書物。

3) ニッサの主教(335—394)、バシリウスの弟。

4) グレゴリウスの兄で、カイザリヤの主教(329—378)。

5) アヴァクムは、ニューコンの改革により《ハレルヤ》が従来より一回余分につけ加えられることになったのを非難している。

6) イザヤ書、VI, 3。

7) ブスコフ近郊の修道院の創立者(1481死)。《ハレルヤ》は三回ではなく、二回唱えるべきことを主張した。

8) 修道僧としての名はヴァルラーム。エフロシンの《伝記》は、1505—1510年の間に不明の作者によって書かれたが、1547年にヴァシーリイが更に手を加えた。

9) カトリックの信仰簡条では、《聖霊》は《父なる神》と《子なる神》より発するとされているが、ギリシャ正教では前者のみに限られていた。アヴァクムは、ニューコンの改革にあらわれたカトリックの影響を非難している。

10) アレクサンドリヤの主教(293—373)。アリウス説(父と子の一致を否定する)と闘った。

- 195ウ あり、聖霊も無始無終であります。父は創造されずに初めからいらせられ、子は創造されずに初めからいらせられ、聖霊も創造されずに初めからいらせられます。父なる神、子なる神、聖霊なる神は、三つの神ではなく、一つの神でございます。それは、三つの創造されずに初めからいらせられるものではなく、一つの創造されずに初めからいらせられるもの、一つの無始無終でございます。同様に、父は全能のお方であり、子は全能のお方であり、聖霊も全能のお方であります。また同様に、父は理解を絶したお方であり、子は理解を絶したお方であり、聖霊も理解を絶したお方であります。しかし、三つの全能の方々ではなく、唯一の全能のお方であり、三つの理解を絶した方々ではなく、唯一の理解を絶したお方、唯一の一切を超越なされているお方であります。この神聖な三位一体には、前後の別もなく、大小の別もありません、しかし、この三つの位格は、共に等しく永遠であり、相同じものでございます。特別な点は、父には出生がなく、子は生まれたまい、聖霊は発出せられたものであることです、もちろん神聖と王国はいずれにも共通でございます。(さてあなたがたの救いのために、神の御子が御託身なされたことについても、お話しておかなければなりません)。無量の大慈大悲ゆえに、神の御子は、父なる神のふところを出られ、浄らかな聖童女の中に宿らせたまい、時が至りましたとき、聖霊と聖母によりまして肉体を与えられ、人となりました。それからわたくしたちのために苦難にあわれ、三日目によみがえりたもうて、天に昇られ、上天の神の右手にお坐りなさいました、そして、万人をそれぞれの所業に応じて裁き且つ応報を与えられんがために、再臨なさろうと思っておられます。この王国には終りはございませ<sup>1)</sup>ん。この御企ては、神におかれましては、アダムが創られます前から、彼がかたどられる前から、おありでございました。(父の御はからい)。父は、「われらにかたどり、われらのかたちに似せて、人を創ろう」と子に申されました。子は、「父よ、創りましょう、でも人は罪をおかすであります」と答えました。父はまた申されました、「おお、わたくしひとり子よ！ おお、わが光よ！ おお、子なるキリストよ！ おお、わが栄光の輝きよ！ 自らの創ったものを気づかうのであれば、おまえは老少不定の人間の姿をかりねばならぬ、して、地上をめぐり、使徒たちをうけいれ、苦しみをなめ、すべてを成しとげねばならぬ」と。そこで<sup>2)</sup>子は、「父よ、あなたの御意が行われますように！」と答えました。そのあとで、アダムが創られました。くわしく知りたい方は、「真珠母集<sup>2)</sup>」の「御託身の話」を読みなさい、そこにちゃんと書いてございます。わたくしは、神の御意を知っていただくために、ざっとこれに触れておきました。このように神を信ずる者は、誰一人として恥じることがないでしょう、また信じない者は、前に述べたアタナシウスの言われる通り、罪せられて、永遠に滅びるであります。わたくし、司祭長アヴァクムは、このように信じ、このように信仰を告白します、この信仰を抱いて、わたくしは生き、そして死んでまいります。
- 196オ わたくしの生国は、ニジェゴ<sup>3)</sup>ーロド地方、クドマ河の<sup>4)</sup>かなた、グリゴロヴォ村でございます。わたくしの父はピョートルと申して司祭でございました、母は——マリヤ、修道女の名をマルファと申しました。父は酒にうきみをやつておりましたが、母は精進と祈禱にはげみ、つねひごろ神の恐れとおおいことをわたくしに教えてくださいました。いつぞやわたくしは近所の家畜が死んだのを目にしま

1) 従来は、「нет конца」(終わりはない)と書かれていたのが、改革後「не будет конца」(終わりはないであろう)と改訂された。アヴァクムたちは、この改訂の中に、宗教合同派の異端的見解(キリストの王国がかって中断され、キリストの再臨によって再開されるとする)を認め、神の王国に中断がないことを主張した。

2) «Маргарит»——コンスタンチノーブルの総主教で、ズラトウスト《黄金の弁舌》と呼ばれた聖ヨハネ・クリソストムス(347—407)の説教集。ロシアでは、「マルガリート」は14世紀にブルガリヤ訳で知られるようになった。モスクワでは1641年に出版されている。

3) ヴォルガ右岸の支流。

4) 現在のゴリキイ州、ポリシェ・ムラーシキノ区。

## 司祭長アヴァクム自伝

した。その夜、起きあがって、死に思いをめぐらしながら、聖像の前で自分の魂のためにいたく泣きました、わたくしもまた死ななければならぬのですから。このときから夜ごとの祈りがわたくしのならわしになりました。その後、わたくしの母がやもめになり、わたくしが幼くしてみなし子になりましてから、親類縁者に追いだされました。母はわたくしの結婚を望みました。わたくしは救いの道の友となる妻を授けたまえと聖母にお祈りしました。同じ村に、やはりみなし子の娘が一人おりました、つねひごろ教会に通いつけておりました、——娘の名はアナスターシャと申しました。彼女の父はマルコと申す鍛冶屋で、たいそう裕福でございました。しかし、彼が死んでしまいますと、後に残された財産はすっかりなくなってしまいました。彼女は貧しい暮らしをしておりました、そして、わたくしと結婚させてくださいと神に祈っておりました。さて、神の思召しによって、その通りになり 197ウ<sup>1)</sup> ました。その後、精進に精進<sup>2)</sup>を重ねておりました母が、神の御もとにみまかりました。わたくしは逐われて別の土地に移りました。二十一の年に補祭に任ぜられ、二年後に司祭<sup>3)</sup>の位を授けられました。司祭を八年勤めましてから、正教の主教たちによって司祭長に任ぜられました、——それから二十年の月日が流れました、従って、僧職についてから合わせて三十年になるわけでございます。

僧職にありましたとき、わたくしにはたくさんの教子がございました、——今までに五百人か六百人になるでございましょう。罪人なるわたくしは、教会で、家邸で、辻で、町で、村で、さてはまたツァーリの都で、シベリヤの地で、神の御言葉を説き且つ教えながら、たゆまず励んでまいりました——それ以来二十五年ほどになりましょう。<sup>4)</sup>

わたくしがまだひらの司祭でありました時分、たくさんの罪を負い、ありとある乱行放蕩の悪事を 198ウ おかした若い女が、わたくしのところにざんげをしに来たことがございます。彼女は、教会で、福音書を前にして、涙ながらにくわしく話しはじめました。ところがわたくしは、まことに罪深い医者でして、自分の方が病にかかり、みだらな情念の火に身内を燃えたたせたのでございます、そのときわたくしは辛い思いでいっぱいでした。わたくしはろうそくを三本ともし、読経台の上に据え、右の手を炎にかざして、欲情の火が消え失せるまでそのまましておりました。それから、若い女をひきとらせ、法衣を脱ぎ、お祈りをしましてから、悲嘆にくれて家路につきました。それは真夜中のことでした、わが家につくと、聖像の前で両の目が腫れあがるほど泣きました、そして、わたくしを教子たちから引きはなしてくださいまし、わたくしには荷がかちすぎ、肩にたえがとうございますから、と一心に神にお祈りいたしました。わたくしは地面にうつ伏せに倒れ、いつそう痛ましく泣きました、そして伏せのまま、忘我の境におちました。どれほど泣いていたのかわかりませんが、わたくしの心眼にヴォルガのほとりが浮かびでました。見ると、二つの金のふねが整然と進んできます。ふねの権 198ウ も金、帆柱も金、何もかも金づくめです。ふねにはそれぞれ舵取りが一人ずつ乗っています。わたくしは、「誰のふねかね？」とたずねました。すると彼らは、「ルカーとラヴレンチのふねですよ」と答えました。この二人はわたくしの教子でして、わたくしとわたくしの一家を救いの道に導き、神の御旨にかなってみまかった人たちでございます。それから三番目のふねが目にとまりました、それは金ではなくて、色さまざままだら模様——赤や白や青や黒や灰色——で彩られておりました、その美しさ、素晴らしさは、人間の智慧ではとてもはかることができません。晴れやかな若者が、とも

1) 結婚した時、アヴァクムは17歳、アナスターシャは14歳であった。

2) アヴァクムは、グリゴロヴォの村人と折合いが悪く(原因はよく分からない)、ニジェゴード地方のロバチーツイ村に移り、ここで聖職に入った。

3) 従って、アヴァクムは、1642年に補祭、1644年に司祭、1652年に司祭長に任ぜられた。ロバチーツイ在住はこの1642年から1652年まで。司祭長の任地は、ユーリエヴェツ(現在のイワノフ州)。

4) アヴァクムは、自分の伝導期間を25年としているが、前に書かれているように、実際の僧職期間は30年である。彼は、その地位と若年のために教子を持ち得なかった補祭時代の2年間と司祭の始めの期間をここでは除外している。

に坐って、ふねをあやつっています。このふねがわたくしを呑みこまんばかりの勢いで、ヴォルガからわたくしめがけて進んできます。「それは誰のふねだ？」——とわたくしは大声で叫びました。ふねの乗手は、「あなたのふねです！ さあ、たつての望みなんですから、奥さんや子供さんたちと一緒に乗ってゆきなさい！」と答えました。わたくしはびっくりして起きあがり、「この夢は何なのだろう？ ああ船旅はどうなるのだろうか？」と考えました。

その後まもなく、死の縄われをまとい、<sup>1)</sup>陰府の<sup>よみ</sup>苦しみわれにのぞめり、われは<sup>なやみ</sup>患難とうれえとにあえり、と聖書に書かれておりますような事態が、わたくしの身にふりかかりました。ひとりの村おさがさるやもめから娘を取り上げました、わたくしはこのみなし子を母親に返しなさいと彼に頼みました。ところが彼は、わたくしたちの懇願に耳もかさず、わたくしに怒りを爆発させ、おおぜいして教会に押しかけて、死ぬほどわたくしをぶちのめしました。わたくしは半時間あまり死んだように横たわっていましたが、神の思召しでふたび息をふきかえました。彼は、おそれをなして、娘をわたくしに引き渡しました。その後、彼は悪魔にそそのかされて、教会に押しかけ、わたくしを打ち、法衣をまとったまま両足を掴んで引きずりまわしました、そうされている間わたくしはお祈りを唱えておりました。

その後、別の村おさが、あるときわたくしにひどく腹をたてました、——わたくしの家へ乗りつけて、わたくしを打ち、犬のようにわたくしの指に歯をたてました。喉が血でいっぱいになりましてから、彼はわたくしの手から歯を離し、わたくしをうっちゃって、自分の家に引きあげました。わたくしは、神に御礼を申しあげ、手に小ぎれを巻いて、晩禱に出かけました。道を歩いておりますと、二丁の小さなピストルを手に、彼がまたもやわたくしに襲いかかりました。彼はわたくしのそば近くに来て、ピストルを発射しました、神の思召しで火薬は火皿の中で燃えつき、ピストルは不発におわりました。彼はそれを地面に叩きつけ、もう一つのピストルを発射しました、しかし神の思召しはかわりませず、——このピストルも不発におわりました。わたくしは歩きながら、一心に神にお祈りをささげました、それから片手で十字を切つて彼を祝福し、彼に低く頭を下げました。彼はわたくしに悪態をつきましたが、わたくしは「イワン・ロジオーノヴィチ、あなたの口に神のお恵みがありますように！」と彼に申しました。〔B: 彼は教会の勤行のことでわたくしに腹をたてていたのです。彼は早く切りあげてほしかったのですが、わたくしは掟どおりに急がずにお勤めをしておりました。それが彼にはいまいまいしかったのです。(11ウ)] その後、彼はわたくしから家を取り上げ、あらいざらい奪い取って、わたくしを叩きだし、道中のパンさえくれませんでした。

今わたくしの息子のプロコーピイは母親と一緒に土牢に入れられておりますが、この子が生まれまされたのは、ちょうどこのころのことです。わたくしは杖を手にし、母親は洗礼のすまぬ赤児をかかえ、神のお導きにまかせてさすらいでました〔B: わたくしたちは、出発し、聖歌や福音書の唱句を大きな声で歌いはじめました。わたくしたちは、「御昇天のありし後、山のぼりゆく弟子たちに、主の御姿を現わせば、皆その前にひれ伏しぬ」という歌を、おしまいまですっかり歌いました。わたくしたちの先頭には聖像がかかげられておりました。わたくしの家にはたくさん歌い手がございました。わたくしたちは涙ながらに歌い、天を仰いでおりました。この地方の見送りの人々、男、女、子供たち、おおぜいの人々が声をあげて泣き悲しみ、わたくしは断腸の思いがいたしました、彼らは野べ遠くわたくしたちを見送りに来たのです。わたくしはお祈りのためにもうけられた席につき、神を讃めたたえ、彼らに神の教えを説き、祝福を与えて、やっと彼らを家に帰し、家人らと共に先へ進みました。(12ウ——13オ)] わたくしたちは、道すがら、その昔ピリポが宦官を洗礼したよう

1) 詩篇、CXIV, 3-4.

2) アヴァクムの次男(1648生)。母、兄イワンと共にメゼーンの土牢に入れられたことについては、この自伝の後半に詳しく書かれている。

## 司祭長アヴァクム自伝

1) に、赤児に洗礼をほどこしました。わたくしはモスクワにたどりつきますと、ツァーリのざんげ聴問僧である司祭長スチュファン<sup>3)</sup>と司祭長イワン・ネローノフ<sup>4)</sup>のところにまいりました。彼らはツァーリにわたくしのことを話しました。ツァーリがわたくしを知るようになりましたのは、このときからでございます。神父たちは、公の書状を持たせてわたくしをもとの任地に送りかえました。やっとたどりついてみますと、——わが家の壁は崩れおちておりました。わたくしはあらためて家の整備にとりかかりました、ところが悪魔はまたもわたくしに騒ぎを引きおこしました。鈴のついた手太鼓やロシヤ・ギターをたずさえた熊使いの一座が、わたくしの村にやってきました。わたくしは、罪人ながら、ひたすらキリストを思うあまりに、彼らを追いはらいました。わたくしは一人で多勢の前に立ち、野べて道化の仮面や手太鼓を打ち砕き、二頭の大熊を取り上げました、——一頭はぶちのめしましたが、また息をふきかえました、もう一頭は野原に放してやりました<sup>5)</sup>。さて、知事就任のためカザンに向かつてヴォルガを下っていたワシーリイ・ペトローヴィチ・シェレメーチェフ<sup>6)</sup>が、このことでわたくしを船に引き立て、さんざん罵倒したあげく、髯をきれいに剃りあげた自分の息子マトフェイに祝福を与えよと命じました。わたくしは、彼のみだりがましい顔を見て、祝福を与えず、聖書を引いて彼を罵りました<sup>7)</sup>。この貴族はかんかんになって、わたくしをヴォルガにほうりこめと命じ、さんざん苦しめたあげく、外に突き出しました。しかし、後になって彼らはわたくしにやさしくするようになりました。彼らはツァーリの控えの間でわたくしに宥しを乞い、夫人のワシーリエヴナはわたくしの舎弟の教子になりました。神は御自分のしもべたちをこのように導きたもうのでございます！ 200ウ

話をもとにもどしましょう。その後、別の村おさがわたくしにひどく腹をたてました。彼は手下の者どもを引き連れてわたくしの家に乗っ取り、矢を放ち、ピストルを発射して、襲いかかりました。そのとき、わたくしは一室に閉じこもり、「神よ、あなたのおはからいによって、彼の心を和らげ鎮めたまえ！」と泣きながら神にお祈りしました。彼は聖霊に逐われて、わたくしの家から退散しました。さて、その夜、彼のところから人々がかけつけ、おいおい泣きながら、わたくしを呼びたてました、——「やさしい神父様！ エフフィーミー・スチュファナーノヴィチが死にそうでございます、あの方は烈しく叫びたて、われとわが身を打ち、吐息をついて、——アヴァクム神父に会わせてくれ！ あの方のために神様の罰が当たったのだ！ とおっしゃっています」。——わたくしは、自分をわなにかけてようとしているのだなと思うと、身内が寒くなりました。そこでわたくしは、神にこうお祈りしました、——「母の胎内からわたくしを導きたまい、無から生あるものにわたくしをお創りくださいました神 201ウ

1) см. 使徒行伝、VIII, 27-38.

2) アヴァクムがロパチーツイから最初にモスクワに逃れたのは、息子プロコーピイの誕生直後、1648年のことである。

3) スチュファン・ヴォニファーチェフ(1656死)。1645年または1646年からモスクワのヴラゴヴェシチェーンスク寺院の司祭長をつとめ、ツァーリのざんげ聴問僧でもあった、いわゆる《敬神会》の指導者。

4) イワン・ネローノフ(1591—1670)。1646年または1647年からモスクワのカザン寺院の司祭長をつとめた。アヴァクムのざんげ聴問僧。改革に反対し、ニコノの迫害にあつて、後に節を屈した。

5) 遊興の楽土、芸人、道化などは、当時政府と教会によってきびしく取締られていた。

6) シェレメーチェフ(1659死)。彼がモスクワからカザンに赴いたのは1648年7月末または8月初めである。従って、1648年の前半にモスクワに逃れたアヴァクムは、夏にはロパチーツイに戻っていたことがわかる。

7) 髯そりの風習は、16世紀に西欧からロシヤに入ってきた。当時の僧侶たち、特に府主教ダニールは、風俗を紊すとの理由で(当時かなり広まっていた男色とも関連して)、この新しい風習を非難した。《敬神会》の僧侶たち、特にアヴァクムは同じ理由で激しくこれに反対していた。

8) モスクワ・ロシヤでは、側近者たちは殆ど毎日ツァーリの控えの間に集まるならわしであった。

9) アヴァクムの弟エフフィーミー・ペトロフ。

よ！もしわたくしが絞め殺されましたなら、わたくしをモスクワの府主教フィリップ<sup>1)</sup>の聖列にお加えください、もしわたくしが斬り殺されましたなら、わたくしを予言者ゼカリヤ<sup>2)</sup>の聖列にお加えください、もしわたくしが水に沈められましたなら、あなたがペルムのスチェファン<sup>3)</sup>になされたように、わたくしをいま一度お救いくださいまし！。——そして、お祈りを唱えながら、エフフィーミイの家に向かいました。屋敷に連れてゆかれますと、彼の妻ネオニーラがかけ出してきて、わたくしの腕をとり、「ようこそ、やさしい神父様、さあお入りくださいまし、心の糧<sup>かて</sup>をお与えくださる尊いお方！」と申します。そこで、わたくしは、「これは異なることを！さきほどはちくしょうで、今は神父様だなんて！どうやらキリスト様の鞭がびりっときいたようですな、あなたの御主人がすぐ後悔なさったんですから！」と答えました。彼女は、わたくしを室に通しました。エフフィーミイは羽ぶとんから跳びおきて、わたくしの足下に身を投げ、えも言われぬ様子で慟哭し、「神父様、お許しください、神に対し、またあなたの前に罪を犯しました<sup>4)</sup>！」と申しました。そして自分は全身をわなわなと震わせているのです。そこでわたくしは、「あなたはこれから達者でいたいかね？」と申しました。彼は横たわったまま、「はい、その通りでございます、神父様！」と答えました。わたくしは、「立ちなさい！神はあなたをお許しなされますぞ！」と申しました。彼はきつく懲らしめられましたので、一人で立ちあがることができません。わたくしは彼をかかえ起こし、ベッドにつかせてやりました、それからざんげを聴き、聖油を注いでやりますと、彼は元気になりました。キリストはこうなるように思召されたのです。明るる朝、彼は丁重にわたくしを家に送り帰しました、それから妻と共にわたくしの教子となり、りっぱなキリストの僕<sup>しもべ</sup>になりました。このように神は高ぶる者<sup>ふせ</sup>を拒<sup>か</sup>げ、へりくだる者<sup>かど</sup>に恵<sup>あ</sup>れを与え給<sup>たま</sup>うのでございます。

その後まもなく、ほかの人たちがまたわたくしをこの土地から逐い出しました。わたくしは足を引<sup>ひ</sup>きずってモスクワにたどりつきました。神の御旨によりまして、ツァーリはヴォルガのほとりのユーリエヴェツの司祭長にわたくしを任命されました。そこでも僅かの間——ほんの八週間暮らしたただけでございます。悪魔が僧侶や百姓や女たちをそそのかしたのです、——彼らはわたくしが聖務を執っていた総主教事務所<sup>7)</sup>に押しかけ、おおぜいでわたくしを事務所から引きずり出しました、——その数はおよそ千人か千五百人ほどでした、——彼らは道のまん中でわたくしに棒<sup>かど</sup>をくわせ、踏みつけました、女たちは火掻き棒<sup>8)</sup>を手にしていました。何の因果か、死ぬほどぶちのめされて、役所の角にほうり出されました。知事が砲手たちを率いてかけつけました、彼らはわたくしを抱えあげ、馬に乗せてわたくしの家へ飛ばしました。知事は砲手たちをわたくしの家<sup>8)</sup>のまわりに配置しました。群集がわたくし<sup>8)</sup>の家<sup>8)</sup>に押しかけ、町中が大騒ぎになりました。わたくしのために淫らな所業を押さえられていた僧侶と女たちは、「あの泥棒野郎、ちくしょうめをぶち殺せ、死骸を溝にほうりこんで犬どもにくれてしまえ！」と人一倍わめきたてました。わたくしちょっと休養をとり、三日目の晩、妻子を残し

1) フィリップ (1507—1569)。イワン雷帝の命で、マリュータ・スクラートフに絞殺された。

2) 12人のいわゆる《小》予言者の一人。旧約のゼカリヤ書の作者。伝説によれば、痛烈な暴露的予言をしたために、紀元前 520 年頃、斬殺されたと伝えられている。

3) スチェファン (1396 死)。エピファーニイ・プレムードルイが 5 世紀の初めに書いたスチェファンの伝記によれば、彼は真の信仰について魔法使と論争し、水と火の試練によって結着をつけることになった、しかし魔法使は最後の瞬間に恐怖におそわれて屈伏した。

4) cm. ルカ伝、XV, 18 (放蕩息子の話)。

5) ヤコブ書、IV, 6。

6) アヴァクムの 2 度目のモスクワ逃亡は、1652 年の少くとも 5 月の初めより前と考えられる。

7) ニージニイ・ノーヴゴロド (現ゴーリキイ市) の上流 146 キロにある商業都市 (現イヴァノヴォ州、ユーリエヴェツ市)。

8) 民衆がアヴァクムに制裁を加えたのは、彼の厳格さのほか、彼が総主教領の税金をきびしく取立てたことにも原因がある。

## 司祭長アヴァクム自伝

て、二人の仲間と一緒にヴォルガを上ってモスクワに逃れました。コストロマーについてみますと、——ここでも司祭長ダニールが逐い出されていました。<sup>1)</sup> ああ、何と悲しいことでしょう！ どこにいても悪魔のために辛い思いをしなければなりません！ モスクワにたどりつきますと、ツァーリのざんげ聴問僧ステファンのもとにまいりました。彼は、「どうして教会を捨ててきたのか？」と悲しげな顔をしました。かさねて辛い思いをしようとは！ さて夜になりましてから、ツァーリが祝福を受けにざんげ聴問僧のところに行ってきました、そこにわたくしがいるのを目にとめられて、「どうして町を捨てて来たのか？」と申されましたので、またまた辛い思いをしました。——妻や子供、それに召使いたち、二十人ほどの者がユーリエヴェツに残っていました、彼らが——生きてるものやら、殺されてるものやら——とんと分かりません！ そこでまた悲しい気持ちになりました。

その後、わたくしたちの友であるニーコンが、ソロヴェーツキイ僧院から府主教フィリップの聖遺骨<sup>2)</sup>を運んできました。彼の到着する前、ツァーリのざんげ聴問僧ステファンは、教団の仲間たちと一緒に、一週間、我々の魂を救う牧者を与えたまえと、総主教のことで神に祈り、精進いたしました、——わたくしもその中に加わっておりました。わたくしは、カザンの府主教コルネーリイと共に、ざんげ聴問僧ステファンを総主教にしてくださるようとの請願をしたため、自らの手で署名して、ツァーリと王妃に差し出しました。<sup>4)</sup> しかし、ステファンその人はこれを望まず、府主教ニーコンを推しました。ツァーリは彼の言葉に従いました、そして、モスクワへの途上にあったニーコンに宛てて、ノーヴゴロドとヴェリーキエ・ルーキ、ならびに全ロシアの至聖なる府主教ニーコン師に御挨拶申し上げます云々と、手紙を書き送りました。<sup>5)</sup> 彼は、到着すると、わたくしたちに対して狐のようにふるまい、腰を低くして御機嫌をとりました。彼は、自分が総主教にされるに違いないと心得ていたもので、どこからか悪魔が入りはしないかと心配していたのです。彼のこうしするいやりくちについては、たくさん話すことができます。〔B: ツァーリが彼を総主教に招きましたが、彼はなりたくないような顔をして、<sup>6)</sup> ツァーリと人々を心配させました、しかし、毎晩アンナと向策に努め、悪魔と共に懸命の努力をして、狡猾な奸策と誓いによってツァーリを籠絡し、神の思召しによって総主教の位についたのでございます。〔15ウ〕<sup>7)</sup> いったん総主教の座につきますと、彼は友人たちを邸内の礼拝堂にさえ通そうとしなくなりました。そしてすぐさま毒気を吐きはじめたのでございます。復活祭前の大齋期にカザン聖母寺のイワン・ネローノフに通達を送ってきました。彼はわたくしのざんげ聴問僧でございました。わたくしはずっと彼の教会に住んでおりまして、彼がどこかへ出て留守のときには、わたくしが教会をあずかっておりました。わたくしには、故人となったシーラ司祭長の後任として、クレムリン内の救世主寺院に任命されるという話がございましたが、神はこれをお望みになりません

- 1) 1652年の出来事。原因は、アヴァクムの場合と同じく、ダニールが教区民を厳格に扱ったことによる。
- 2) ニーコンがフィリップの聖遺骨をソローフキからモスクワに移したのは、イワン雷帝の時世にフィリップの絞殺によって失墜させられた教会の権威を高める目的であった。ニーコンはツァーリの命を受け、1652年3月11日に遺骨を取りに出発し、7月6日に戻った。
- 3) 総主教ヨシフは、1652年4月15日に死亡し、後任が決まっていなかった。
- 4) この請願書は現存しない。
- 5) アレクセイ帝がノーヴゴロドの府主教ニーコンに宛てて、総主教ヨシフの死（1652年4月15日）を知らせた手紙は、1652年の5月に出された。
- 6) 頑として総主教就任を拒んでいたニーコンを説き伏せるために、ツァーリは跪いて彼に同意を乞うた。ニーコンはツァーリと大貴族たちに絶対服従を誓わせた上で承諾した。
- 7) アンナ・ミハーイロヴナ・ルティーンシチェワ——フォードル・ルティーンシチェフの姉妹で、ニーコンの改革の熱烈な支持者であった。
- 8) ニーコンの総主教就任は、1652年7月25日。
- 9) 総主教邸内の接見及び会議室。

でした。それにわたくしも気乗りがしませんでした。わたくしはカザン聖母寺が気に入っており、そこに止まって、民衆に聖書の話聞かせておりました。たくさんの人々がやってきました。——さて、ニーコンは、その通達の中に、「某年某日。聖なる使徒ならびに聖なる教父たちの伝統にのっとり、教会において跪拝すべからず、腰まで叩頭すれば足る、さらにまた三本の指にて十字を切るべし<sup>1)</sup>」と書いてきました。わたくしたちは額を集めて、考えこみました。苦難の冬が迫っていることが分かりました、心臓は凍り、足は震えはじめました。ネローノフは、教会をわたくしに託し、ただ一人チュードフ僧院<sup>2)</sup>にこもり、——七日のあいだ僧房でお祈りをいたしました。彼がそこでお祈りをしていたとき、聖像から彼にお声がかかりました、——「苦難の時は至れり、汝らひるむことなく苦しむべし！」と。彼は涙ながらにこれをわたくしに話しました。それから、ニーコンによって後にノヴゴロドの地方で火刑に処されたコロムナの主教パーヴェルに話しました。その後で、コストロマーの司祭長ダニールに話し、さらにまた教団の僧全員にも話しました。わたくしとダニールは、十字を切るときの指の組み方と礼拝の仕方について教父たちの書物から抜萃をとり、ツァーリに差し出しました。この抜萃はたくさんございました。ツァーリがこれをどこに隠してしまわれたのか、わたくしにはわかりません。どうもニーコンに渡したのではないかと思われま

205オ その後まもなく、ニーコンは、トヴェーリ門のかたわらの僧院<sup>5)</sup>でダニールを捕え、ツァーリの御前で髪を切り落として破門しました。奴らは、彼の僧衣を剥ぎ取り、罵声をあびせ、チュードフ僧院のパン焼場に引きたてました、そして、さんざん苦しめたあげく、アーストラハンに流しました。そこで彼はいばらの冠をかぶせられ、土牢の中で殺されました。ダニールが破門された後、チェムニコフ<sup>6)</sup>の司祭長をしていた別のダニールが捕えられ、ノヴォスペースイ僧院<sup>7)</sup>に閉じこめられました。それからニーコンは、司祭長イワン・ネローノフを捕え、——教会で彼の僧帽を剥ぎ取り、シーモノフ僧院<sup>8)</sup>に閉じこめ、その後ヴォーログダのスペースイ・カーメンヌイ僧院<sup>9)</sup>に追放し、更にその後コーラの砦に流しました<sup>10)</sup>。そして最後には、あまたの苦難をなめた後に、この不幸な人は力尽きてしまいま

205ウ した、——三本の指で十字を切ることを認めたのです、そしてぽっくり死んでしまったのでございませ

<sup>11)</sup>。ああ、何と悲しいことでしょう！ 自ら立てりと思ふ者は、倒れぬように必せよ<sup>12)</sup>。主の御言葉に

1) 1653年のこの通達で、エフレム・シーリンのさんげの祈禱の際の跪拝の数を17回から4回に減らすこと、十字を切る際の2本の指を3本の指に改めることが指令された。

2) クレムリン内の僧院。

3) パーヴェル(1656死)。ネローノフの友人で、ニーコンの改革に反対した。1654年の宗教会議の後、僧職を解かれて追放された。一説によれば、長く迫害を受けた後、ニーコンの命により、ノヴゴロド地方のフトゥインスキイ僧院で殺されたと伝えられ、又一説によれば、ノヴゴロドで火あぶりにされたと伝えられている。

4) この抜萃は現存しない。

5) モスクワのストラスナヤ広場(現プーシュキン広場)にあるストラスヌイ僧院。

9) 現在のモルドヴァ自治共和国内。

7) モスクワにある僧院。

8) モスクワ南東の郊外にある僧院。

9) ヴォーログダの北45キロ、クベンスコエ湖上の小島にあった。

10) ネローノフとニーコンの最初の衝突は、ネローノフがムーロムの司祭長ローギンの肩を持ったことから起こった。ネローノフは、1553年7月にスペースイ・カーメンヌイ僧院に流され、次いでコーラ半島の城砦コーラに流された。

11) ネローノフは、1667年になって、ツァーリ、総主教、全体宗教会議(1666—1667)に書を送り、節を屈して許しを乞うた。彼は、1670年1月2日、僧院長の位で世を去り、モスクワのダニール僧院に葬られた。アヴァクムは、ネローノフが変節したにもかかわらず、彼に暖い態度でのぞんでいる。これは、ネローノフがアヴァクムに対して常に同情的立場をとってきたことによる。

12) コリント前書、X, 12。

司祭長アヴァクム自伝

ありますように、もしなし得べくんば、<sup>1)</sup>悪魔の選民をも感わさんとする恐ろしい時代になったのです。わたくしたちは、どうかわたくしどもに救いと恩寵をお与えくださいますと、一心不乱に神にお祈りしなければなりません、なぜと申しますに、神は慈悲深くあらせられ、人々を心から愛しておられますから。

さて、わたくしも晩禱の場でポリース・ネレジンスキイとその銃兵たちに捕えられました。<sup>2)</sup>わたくしと一緒に六十人ほどの人が捕えられ、牢屋に連れ去られました。その夜、わたくしは鎖をかけられて総主教の館に閉じこめられました。日曜日の夜が白みかけるころ、奴らはわたくしを荷馬車にのせ、<sup>3)</sup>両手を広げさせて、総主教の館からアンドローニエフ僧院に連れてゆきました。そこで鎖をかけられ 206 オ  
たまたま暗い地下室にほうりこまれ、三日のあいだ、飲まず食わずで過ごしました。わたくしは暗闇の中におりまして、鎖をかけられたまま礼拝を行なっておりましたが、どちらが東でどちらが西か——とんとわかりませんでした。誰一人わたくしのところにやって来ません、いるものといえば、ただ鼠と油虫だけ、それにこおろぎが鳴いており、蚤がふんだんにおりました。三日目に、わたくしはとてもしもひもじくなりました、——つまり腹がぺこぺこになったのです、——さて、晩禱を終えましたところ、誰やらわたくしの前に立っております、それが天使なのやら人間なのやら——わたくしにはかいもくわかりません、今だって合点がゆかないのですが、彼は暗闇の中でお祈りを唱えましてから、わたくしの肩に手をかけ、鎖ごとわたくしをベンチのところに連れて行って、坐らせました、そして、小さな匙をわたくしの手へのせ、パンとスープを少しばかりわたくしに食べさせてくれました、——何とまあおいしく、素敵だったことでしょう！——そこで彼は、《結構、これで十分元気がつくよ！》とわたくしに申しました。そしてぱっと姿を消しました。扉はあいていなかったのに、いなくなったのです！ 人間だったとしたら——不思議な話です、でも天使だったとしたら、何もあやしむにあたりません、——いかな場所でも天使の通れない所はございませんから。明るる朝、僧院長と修道僧たちが 206 ウ  
やって来て、わたくしを引き出しました。彼らは、《どうして総主教の言われることを聞かないのだ？》と文句をならべました。そこでわたくしは、聖書を引いてさんざん彼を非難し、罵ってやりました。彼らは大きな鎖をはずし、小さな鎖をかけました。彼らはわたくしを一人の修道僧に監督させ、教会に引きたてるよう命じました。教会のそばで、彼らはわたくしの髪を引っぱり、脇腹を突つき、鎖を掴んで揺すぶり、眼に唾を吐きかけました。神は現世でも来世でも彼らをお赦しなさるでしょう、それというのも、これは彼らの仕業ではなく、狡猾な悪魔のなせる業でございますから。わたくしは四週間ここで過ごしました。

そのころ、わたくしに続いて、ムーロムの司祭長ローギンが捕えられました。<sup>5)</sup>大聖堂で、礼拝式のと  
ときに、ツァーリの御前で、彼は破門されました。<sup>6)</sup>聖さん奉獻の際に、総主教は、助祭長が頭上に捧  
げた聖盆を取り、キリストの聖体をのせたその聖盆を祭壇の上に置きました、一方チェードフ僧院長  
のフェラポントは、内陣の外、祭壇中央の扉のそばに、聖杯を手にして立っていました。ああ、キリ 207 オ  
ストの聖体と聖杯を離しておくなんて、ユダヤ人の所業にも劣るではないか！ 彼らはローギンを破  
門し、彼の僧衣とカフタンを剥ぎ取りました。ローギンは燃えさかる信仰の情熱にかられて、ニー  
コンを罵りながら、内陣のしきい越しにニーコンの日に唾を吐きかけました、それから帯を解いてル  
バーシカを脱ぎ、ニーコン目がけて内陣の中に投げつけました。あら不思議！——彼のルバーシカはさ

1) マタイ伝、XXIV, 24。

2) アヴァクムは、1653年8月21日、日曜日の夜に捕えられた。

3) モスクワ郊外の僧院。

4) 古いギリシャ正教の習慣では、東方に向かって礼拝することになっていた。

5) クレムリン内のウスベンスキイ寺院。

6) ローギンの破門は1653年9月1日に行われた。

7) 聖さん用のパン。

つと広がり、まるで聖さん覆いであるかのように、祭壇上の聖盆を覆ったのです。このとき王妃も教会の中におられました。ローギンは鎖をかけられ、教会から引き出されました。そしてボゴヤヴレーンスキイ僧院につくまで、箒と鞭で打たれ、裸のまま一室にほうりこまれました。銃兵たちが厳重な見張りに立たされました。その夜、神が新しい外套と帽子を彼にお与えになりました。明るる朝、このことがニーコンに伝えられますと、彼は大笑いして、「わしはそういうまやかし聖者どものことは先刻承知だ！」と言いました、——そして彼から帽子を取りあげましたが、外套は彼に残しておきました。

それから再びわたくしを僧院から引き出し、前のように両手を広げさせ、徒歩で総主教の館に引き立てました、そして、さんざんわたくしと議論を戦わせてから、また連れ戻しました。その後、聖ニキータ祭の日に十字架行進がございました<sup>1)</sup>。わたくしはまた荷馬車に乗せられて、行列の来る方に向かって連れてゆかれました。彼らは、わたくしを破門しに大聖堂に連れだし、礼拝式の間しきいのところに長いことわたくしを立たせておきました。ツァーリは玉座を下りられて、総主教のそばに行かれ、懇願のすえ破門を思い止まらせました。わたくしは破門をまぬがれて、シベリヤ庁に連れてゆかれ、書記のトレチャーク・バシマコフにあずけられました<sup>2)</sup>。彼は、今はサヴァーチイという名の修道僧で、キリストの御為に苦しみをうけ、ノヴォスペースキイ僧院の地下牢に閉じこめられております。神よ、彼をお救いください！ 彼はあのころわたくしに親切にしてくれたのです。

その後、わたくしは妻子ともどもシベリヤに送られました<sup>3)</sup>。わたくしたちが道々どれほど難儀をしましたか、残らず話すとなれば、それは長い話になりますので、少しだけに止めるとしましょう。司祭長夫人は赤ん坊を生んだばかりでした、——この病人が荷馬車に乗せられて、トボーリスクまで連れてゆかれたのです。わたくしたちは、三千露里を十三週間ほどかかって、荷馬車、河舟、それに道の半ばは櫓に乗って、どうにかこうにか進んでゆきました<sup>4)</sup>。

トボーリスクの大主教は、わたくしをさる教会に任命してくれました<sup>5)</sup>。そこの教会で、わたくしは大きな災難にあいました。わたくしは一年半の間に五回も国事犯として密告されました。ある男、大主教の役所の書記でイワン・ストゥルナーと申す者でしたが、この男がわたくしをさんざん苦しめました。大主教がモスクワに出かけられました<sup>6)</sup>。その留守に、彼は悪魔にそそのかされて、わたくしに襲いかかりました。彼は何のいわれもなく、わたくしの教会の書記アントーニイを苛めようとし、  
208ウ た。アントンは彼の手を逃れて、わたくしの教会に駆けつけました。イワン・ストゥルナーは人々を寄せ集め、日をあらためてわたくしの教会に押しかけてきました、——わたくしは晩禱のおつとめをしておりまして、——彼は教会におどりこみ、聖歌隊席でアントンの髯を引っ掴みました。わたくしはすぐ教会の扉を閉ざし、錠をおろして、誰も中に入らせないようにしました、——ストゥルナーだ

1) 聖ニキータ祭(9月15日)に、ウスペンスキイ寺院からニキータ僧院まで十字架行進が行なわれた。

2) シベリヤ庁の下級書記。この後間もなく聖書改訂反対の請願書を出し、修道僧となった。

3) アヴァクムの事件は急速に処理され、1653年9月17日頃、モスクワからシベリヤに送られた。9月15日のシベリヤ庁の取調べでわかるように、当時アヴァクムには4人の子供がいた。三人の息子——イワン(9歳)、プロコーピイ(5歳)、コルニーイ(8日)、娘が一人——アグリッピーナ(8歳)。

4) 一家6人の護送径路——モスクワ、ペレヤスラーヴリ・ゼレースキイ、ヤロスラーヴリ、ヴォーログダ(荷馬車)、トチマ、ウースチュグ・ヴェリーキイ、ソーリ・ヴィチェゴーツカヤ(水路)、カイゴロド、ソーリ・カムスカヤ、ヴェルホトゥーリエ、トゥリンスキイ砦、チュメーン、トボーリスク(櫓)。トボーリスク到着は12月の末。

5) 大主教シメオン(アヴァクムの同郷人)は、アヴァクムをトボーリスクのヴォズネセンスキイ教会の司祭長に任じた。

6) シメオンは、ニーコンが旧教徒弾圧のため招集した宗教会議に出るために、1654年1月22日に出発し、年末までシベリヤを留守にした。

## 司祭長アヴァクム自伝

けが、悪魔のように教会の中をかけずりまわっておりまして。わたくしは晩禱を止め、アントンと一緒に、彼を教会のまん中の床の上に坐らせ、教会を騒がせたかどで、革紐でしたたかに彼を打ちすえました。ほかの連中は、二十人ほどおりましたが、聖霊に逐われてことごとく逃げ去りました。わたくしは、ストゥルナーからざんげのあかしを取り、彼を家に放免してやりました。ストゥルナーの身内の僧侶や修道僧たちは、何とかわたくしを破滅させようものと、町中の人を煽動しました。彼らは 209 オ真夜中に橋でわたくしの家へ乗りつけ、家の中に押し入ろうとしました、——わたくしを掴まえて、水の中に投げこむ算段なのです。しかし、彼らは神の威嚇に恐れをなして、退散しました。わたくしは彼らからこっそり身を隠し、一と月ばかり難儀いたしました。あるときは教会で一夜を明かし、あるときは知事<sup>1)</sup>のところ<sup>2)</sup>に逃がれました、〔B: 公爵夫人は、わたくしを櫃の中に入れて送り出すことにしました、そして、《神父さん、あなたを見つけに人が来たら、わたくしはあなたの上に坐りますからね》と申しました。知事もあの乱暴者たちを恐れていました、そして、わたくしを見て涙にくれておりました。(19ウ)〕またあるときは牢に入れてほしいと頼みました、——しかし、通してもらえませんでした。マトフェイ・ロムコフが何かとわたくしに付き添って守ってくれました。彼は、修道僧となってミトロファンと名乗り、——後にモスクワでパーヴェル<sup>3)</sup>府主教の下で聖器室係りとなり、補祭アフナーシイと共に、大聖堂でわたくしの髪を切り落としました<sup>3)</sup>。当時は善良な男でしたが、今は悪魔の走狗になり下がっています。さて、大主教がモスクワからお帰りになりました<sup>4)</sup>、そして、掟を犯した罪により、ストゥルナーを鎖につなぎました、そのわけは、ある男が自分の娘に不倫の所業をしたのに、ストゥルナーが彼から半ルーブル銀貨を取って、この百姓を放免したからでございます。大 209 オ主教は、彼に枷をはめるように命じ、わたくしのことも引き合いに出されました。ところが、彼ストゥルナーは、知事たちの役所に逃亡し、わたくしを《国事犯》として密告しました。知事たちは、彼を上級大貴族の息子ピョートル・ベケートフの監督にゆだねました。悲しいかな、ピョートルの屋敷に死が訪れました。そのときのわたくしの心も悲しゅうございました。大主教は、わたくしと一緒に思案しまして、近親相姦の罪に関する規定により、四旬祭の第一日曜日に大会堂でストゥルナーを破門しました。教会に来ていたピョートル・ベケートフは、大主教とわたくしを罵り、すぐに教会を出てゆきました、屋敷へ向かう途中、彼は気がふれて、痛ましい非業の最後をとげました。さて、わたくしと大主教は、町の人々が彼の罪業を嘆き悲しむように、死骸を道のまん中に置き、犬どもにくれ 210 オてやれと命じました。一方、わたくしたちは、最後の審判の日に彼にお赦しがありますようにと、三日のあいだ一心に神にお願いいたしました。ストゥルナーに同情したために、彼はこのような不幸を招いたのです。大主教とわたくしは、三日後に、彼の死骸を自分たちでちゃんと葬ってやりました。こんなしめっばい話はもう止めにしましょう。

さて、それから一つの指令が届きました。わたくしが聖書を引いてニーコンの異端を罵り、その非を鳴らしているというかどで、わたくしをトボーリスクからレナへ流せというのです<sup>5)</sup>。そのころ、わたくし宛てにモスクワから一通の手紙が届きました。わたくしの二人の弟は、宮中で王妃に仕えておりましたが、二人とも妻子ともどもペストで死んでしまいました<sup>6)</sup>、また友人や身内の多くの人たちが

1) 公爵ヴァシーリイ・イワーノヴィチ・ヒルコフ(1614—1677)。1652年5月31日から1656年2月17日まで、トボーリスクの知事を勤めた。

2) 同上知事夫人。

3) アヴァクムの破門は、1666年5月13日。

4) シメオンの帰着は、1654年12月25日。

5) アヴァクムのトボーリスク滞在は、一年半余りであった。

6) アヴァクム自身が名前をあげている自分の弟は、エフフィーミイ、ゲラーシム、コジマーの三人である。このうちペストで死んだのは、エフフィーミイだけで、残りの二人はこの後も生存している。従って、アヴァクムには、エフフィーミイと一緒にペストで死んだ弟がもう一人いたものと考えられる。

死んだということです。神がその怒りの杯をこの国にお注ぎになられたのです！ それなのに、哀れなやからは悔い改めようともせず、教会を混乱させているのです。当時ネローフは、教会の分離のために三つの災厄、すなわち、ペスト、戦争、分裂が生ずるであろうと、しばしばツァーリに申しあげておりました。<sup>1)</sup>それが今、現実となってあらわれたのです。しかし、主は慈悲深くあらせられます、わたくしたちをお罰しなされても、悔い改め故にわたくしどもをお赦しになり、心と体の病をいやして、平安を与えてくだされます。わたくしはキリストを深く心に頼み、そのお慈悲を待ち、死者の復活を期待しております。

それから、前にお話ししましたあの夢の中で、わたくしに示された自分の船に再び乗りました、一一そして、レナに向かって出発しました。<sup>3)</sup>エニセイスクに着きますと、次の指令が届いており、モスクワから二万露里以上もあるダウーリヤへ送られることになりました。わたくしはアフナーシイ・パシコーフの部隊に引き渡されました、——彼には六百人の部下がおりました。何の因果か、彼は気性の荒い男で、人々を火責めにし、苦しめ、鞭打っておりました。わたくしはしばしば彼に説き聞かせておりましたが、とうとう自分の方が彼の手にかかってしまいました。彼は、モスクワのニコンから、わたくしを迫害せよと命じられていたのです。

エニセイスクを後にして、<sup>6)</sup>大トゥングースカ河にさしかかろうとしましたとき、わたくしの船は嵐で沈没しそうになりました、河の中ほどで水がいっぱい流れこみ、帆はずたずたに裂け、——甲板だけが水の上に頭を出し、残りはすっかり水につかかってしまいました。わたくしの妻は、かぶり物もせず<sup>8)</sup>に駆け回り、やっとのことで子供たちを水中から甲板に引っぱり上げました。わたくしは天を仰いで、「神よ、救いたまえ！ 神よ、助けたまえ！」と呼びました。神の御はからいによりまして、わたくしたちは岸边に吹き寄せられました。この話を続けたらきりがなほございます！ ほかの船では、二人も波にさらわれて、溺れてしまいました。それから岸边で仕度を整え直し、再び先へ進んでゆきました。

わたくしたちがシャーマンの早瀬に着きましたとき、上流から船でやって来た人たちと出あいました。彼らの中に二人のやもめがおりました、——一人は年のころ六十ばかり、もう一人はもっと年寄りでした。二人は尼になるために修道院へ行くところ<sup>9)</sup>でした。ところが、パシコーフは、二人をもと来た方に連れ戻し、結婚させようと思いたちました。そこで、わたくしは、「教会の掟によって、このような人を結婚させるのはよろしくない」と彼に申しました。彼は、わたくしの言葉に耳をかして、やもめたちを放してやるどころか、かえってわたくしに腹をたて、わたくしを苦しめようと思いたちました。次のドールギイの早瀬で、彼は船からわたくしを追いたてようとし、「舟足がおそいのはお前のせいだ！ この外道め！ 山の中を歩いてゆけ、コサックたちと一緒に行くことはならん！」と言いました。ああ、何と悲しいことでしょう！ 山は高く、森は深い、きりたった岩は壁のようにそそりたち、見上げるには——首の骨を折らなければならないほどです！ この山々には、大きな蛇が住んでいます。そこには、雁や赤い羽の鴨、黒い大鴉や灰色の小鳥がいます。この山々には、鷲、鷹、隼、

1) 1653年11月6日付け、ネローフのアレクセイ帝にあてた手紙。

2) CM. 198オ—199オ。

3) 出発の日は、1655年6月29日。

4) バイカル湖以東一帯の古い呼称。二万露里は誇張、実際は5500露里弱。

5) アフナーシイ・フィリップヴィチ・パシコーフ(1664死)。アヴァクムがエニセイスクに着いた時の当地の知事。1655年8月、ツァーリの命により、数百の銃兵、コサックを率いて、ダウーリヤに向かった。目的はアムール流域地方の平定にあった。

6) 1656年の春。

7) エニセイ河の支流、バイカル湖に発す(別名アンガラー河)。

8) 古いロシアの信仰では、婦人がかぶり物をせずに人前に出ることは、罪とされていた。

9) 当時シベリヤには、女性(特にロシア人の)が非常に少数であったという事情による。

司祭長アヴァクム自伝

雉子、ペリカン、白鳥、その他の野鳥など、さまざまな鳥が数限りなくいます。またこの山々には、212オ  
たくさんの野生の獣——山羊、鹿、シベリヤ鹿、大鹿、猪、狼、野生の山羊——が彷徨し、——わたくし  
たちの目の前に姿を見せても、捕えることはできません！ パシコーフは、こうした山の中に、獣  
や蛇や鳥の中に、わたくしを住まわせんものと、わたくしを追い出そうとしました。そこで、わたく  
しは彼に短い手紙をしたためました、その書き出しに、「人の子よ！ 天使たちの上にましまし、はる  
かなる下界を見そなわし給う神を恐れよ、天の軍勢と人間や生きとし生けるものが、その御前に恐れ  
畏んでいるのに、汝ただ一人が神をないがしろにし、不遜のふるまいに及んでいる」云々としたため、  
そのほかいろいろと書き継いで、彼に送りました。<sup>1)</sup>すると、五十人ほどの兵士が駆けつけて、わたくし  
の船を取り押さへ、三露里ほど離れた彼のもとへ、大急ぎで船を曳きはじめました。わたくしはコサ  
ックたちのために粥をたいて、彼らにふるまってやりました。かわいそうに、彼らは食べながら震え 212ウ  
ていました。彼らの中のある者は、わたくしを見て目に涙を浮かべ、わたくしをふびんがりました。  
船が着きました、刑吏どもがわたくしを掴まえて、彼の前に引き立てました。彼は剣を手にし、身を  
震わせて立っていました。彼はまず、「お前は僧侶か、それとも破門僧か？」と口をきりました。こ  
ちらは、「わたくしは司祭長アヴァクムです、わたくしに何の用があるのか、言いなさい」と答えまし  
た。彼は、野獣のように吠えたけり、わたくしの頬を打ちすえ、次いでもう一方の頬を打ち、さらに  
頭をなぐりつけて、打ち倒しました、そして、斧を引く掴むと、倒れたわたくしの背中を三回なぐり  
ました、それから着物を剥ぎとり、その同じ背中に七十二の鞭をくわせました。わたくしは、「主  
イエス・キリストよ、神の御子よ、わたしくを助けたまえ！」と唱えていました。何度も何度も、わ  
たくしはこの同じ言葉をたえずくりかえしておりました。わたくしが「許してくれ！」と音<sup>な</sup>をあげな 213オ  
いのが、彼にはひどくこたえたのです。鞭が打ち下ろされる度ごとに、わたくしは同じ祈りを唱えま  
した。この鞭打ちの最中に、わたくしは、「もう打つのは止める！」と彼に叫びました。彼は打つ  
のを中止させました。わたくしは、「なぜわたくしを鞭打ったのか？ そのわけを知っているのか？」と  
彼に申しました。彼はさらにわたくしのわき腹を鞭打つように命じました、その後でわたくしは放免  
されました。わたくしは体に震えがきて、ぼったり倒れました。彼は御用船<sup>2)</sup>にわたくしを引き立てる  
ように命じました。わたくしは手足に枷をかけられ、船の横桁の上にほうり出されました。それは秋  
のことでした、雨がわたくしの上に降りそそぎ、一晩中その雫にうたれて横たわっておりまして。鞭  
打たれたときは、お祈りをしていて、ちっとも痛くありませんでした。しかし、こうして横たわっ  
ておりましたとき、一つの想念がふとわたくしの頭に浮かびました、——「神の御子よ、なぜあんなひ  
どい鞭打ちを彼にお許しになったのでございますか？ わたくしは、あなたのやもめたちをかばって  
やったではありませんか？ わたくしとあなたの間を誰が裁いてくれるのでしょうか？ わたくしがよ  
からぬふるまいをしたときに、あなたはこれほどわたくしを懲らしめになりませんでした、けれども 213ウ  
今は、わたくしがどんな罪を犯したのか、合点がまいません！」——善人ぶりやがって！——信心  
深い偽善者<sup>3)</sup>面をした別のわたくしが——神と正邪を争うなんて！ ヨブがあのように申しましたとし  
ても、彼は正しくて罪なき者<sup>4)</sup>でした、しかも彼は、野蛮人の国で、神の掟の外におり、聖書のことを  
知りませんでした、彼は被創造物を通して神を識ったのです。ところが、このわたくしめは、まず第  
一に——罪深い人間でございませぬ、第二には——神の掟に支えられ、何かにつけて聖書によって守ら  
れております、我らは多くの艱難を歴て神の国に入るべきなのに、こんな馬鹿な考えを起こすとは！  
ああ、情ない！ あの船がわたくしを乗せたまま、どうして水の中に沈んでしまわなかったのでしょ

1) この手紙は現存しない。

2) 火薬、弾薬類の運送船。

3) CM. ヨブ記。

4) 使徒行伝、XIV、22。

う？そのとき、わたくしの骨は痛みだし、筋が引きつりはじめ、心臓は止まりかけ、今にも死にそう  
214オ になりました、水がわたくしの口にはねかかりました、わたくしは深い溜息をついて、神にぎんげい  
たしました。やさしい神は慈悲深くあらせられます、——わたくしどもの以前の罪をぎんげい故にお忘  
れになってくださいます。わたくしは、また少しも痛みを感じなくなりました。

明るる朝、わたくしは小舟にほうりこまれ、さらに先へ曳いてゆかれました。わたくしたちは一番  
大きいパドゥーンの早瀬に着きました、——ここでは河幅は一露里ほどで、河をよぎる三つの暗礁は  
非常に峻しく、もし船が水路をあやまったら、こっぴみじんになってしまいます、——この早瀬にわ  
たくしは連れてこられました。雨が降り、雪が降っておりました。わたくしの肩には粗末なカフタン  
が引っ掛かっているだけでした、水が腹や背を伝って流れます、——その辛さはたいへんなもので  
した。わたくしは小舟から引き出され、鎖をかけられたまま、早瀬を迂回して岩づたいに曳かれてゆ  
きました。とても辛うございましたが、心は晴れやかでした、それと申しますのは、今度はもう神に  
214ウ 愚痴を申さなかったからです。わたくしの心に、予言者で使徒であられたお方のおっしゃった言葉—  
—《我が子よ、主のこらしめを軽んずるなかれ、主に戒めらるるとも力を落とすなかれ、主はその愛  
する者をこらしめ、凡てその受け給う子を鞭うち給う。もし汝こらしめを忍ばば、神は汝らの子の如  
くあしらい給わん。もし汝らにこらしめなくば、そは私生児<sup>かくしご</sup>にして、まことの子にあらず<sup>1)</sup>》——とい  
う言葉が思い浮かびました。この言葉で、わたくしは心<sup>2)</sup>をなぐさめました。

それから、わたくしはブラーツクの砦<sup>3)</sup>に連れてゆかれ、牢にほうりこまれて、少しばかりのわらを  
あてがわれました。わたくしはひどく寒い塔の中で、フィリップの齋戒期まで過ごしました。ここでは  
そのころ冬でございましたが、神は下着だけのわたくしを暖めてくださいました。わたくしは、犬こ  
ろのようにわらの中に横たわっていました、食物はくれることもありましたが、くれないこともあり  
ました。〔B:あの鞭打ちの後、わたくしは腹をすかせておりましたが、食べたいと思っても全くま  
まになりません、それと申しますのも、彼らは気が向いたときしか食物をくれませんでしたから。あの  
礼儀知らずのやからはわたくしを愚弄しました、——あるときはパン切れだけを、あるときは煮えて  
もないハムだけを、またあるときはパン抜きでバターだけよこしました。それでも、わたくしは犬の  
ようにががつ食べました。わたくしは顔も洗っていませんので、礼拝を行なうことができません。  
ただキリストの十字架を見つめ、お祈りを唱えていただけです。いつも五人ずつ番兵が少し離れたと  
ころに立っていました。壁に小さな穴があいていました、——一匹の小犬が毎日わたくしのところに  
やって来て、わたくしを眺めておりました。富者<sup>かど</sup>の門<sup>4)</sup>への膿みただれたラザロのもとに、犬どもがや  
って来ては、その膿をなめ、彼に慰めを与えたように、わたくしも自分のこの犬と語り合いました。  
人々は遠くの方を回り道し、牢の中をのぞこうとしませんでした。(24ウ)〕そこには鼠がたくさん  
215オ いました、わたくしは僧帽で鼠どもを打ちました、——あの馬鹿者たちときたら、わたくしに棒きれさ  
えくれません！——わたくしはたえず腹ばいになっていました、背中がただれていたからです。蚤や  
虱もたくさんいました。わたくし、《許してくれ！》とパシコフに叫びかけたくりました。しか  
し、神はこれを差し止められ、耐え忍ぶように命ぜられました。その後で暖い小屋に移されました、そ  
こで枷<sup>5)</sup>をかけられたまま、人質<sup>5)</sup>や犬たちと一緒に一と冬ずっと過ごしました。妻と子供たちは、わた

1) ヘブル書、XII, 5-8。

2) ブラーツクの砦は、1631年に、アンガラー河のほとり、パドゥーンの早瀬のそばに築かれ、1654  
年に、オカ河とアンガラー河の合流点に移された。ここに二つの塔があり、アヴァムが閉じこめ  
られたと伝えられるその中の一つは、現在モスクワ近郊のコローメンスコエ村に移されている。

3) フィリップの齋戒期は、クリスマスの40日前、すなわち11月15日に始まる。

4) см. ルカ伝、XVI, 19-31。

5) シベリヤの諸種族から《ясак》(一種の貢租、主に毛皮)を徴収する手段として、各種族の主  
に名門に属する家柄の者を、人質として砦の中に置いていた。

司祭長アヴァクム自伝

くしのいるところから二十露里ほど離れた場所に追いやられていました。召使いのクセーニヤは、悪態をついたり咎めだてしたりして、一と冬じゅう彼女を苦しめました。息子のイワン——そのころはまだ幼うございました——が、クリスマス後、ほんのしばらく泊まるつもりで、わたくしをたずねて来ました。ところが、パシコーフは、わたくしが前にほうりこまれたあのひどく寒い牢の中に、彼を入れさせました。いとしいこの子は、ここで一夜を明かし、凍え死にするところでした。明るる朝、彼は母親のもとに追い返されました。わたくしは彼の姿さえ見ませんでした。彼は母親のもとにたどりつきましたが、——手足はすっかり凍えておりました。

春になると、わたくしたちは再び先へ出発しました<sup>2)</sup>。たくわえは残り少なになっていました。何もかもすっかり剥ぎ取られました、——本や着物は取られたものもありましたが、残ったものもございました。バイカルの湖<sup>3)</sup>で、わたくしはまた溺れそうな目にありました。わたくしは、ヒーロク河で船の曳綱を曳かされました、その行程でとても難儀をいたしました、——食べるひまも、寝るひまもないほどなのです。わたくしたちは一と夏ずっと苦しみぬきました。辛い水中作業のために人々は死んでゆきました、わたくしの足や腹は青く腫れ上がりました。二た夏水の中をさまよひ、冬は連水陸路をやったの思いで進んでゆきました。これで三度目になりますが、このヒーロク河で、わたくしはまた溺れかけました。荷船が水勢に押されて岸から離れてしまいました、——ほかの人たちの船は岸に留まっていたましたが、わたくしの船は波にさらわれ、どっと押し流されました。妻と子供たちは岸に残っていましたが、わたくしと舵取りの二人は凄惨な勢いで流されてゆきました。水の流れは速く、荷船は横転したり、引っくり返ったりします。わたくしは船の上を這いまわり、「聖母様、お助けください！希望の光であられるお方は、溺れさせないでください！」と叫びました。あるときは両足が水につかり、そうかと思うとまた上に這いずり出ます。一露里か一露里余りも流されてから、人々が船を押し止めてくれました。全身ぬれ鼠です！しかし、これがキリストと聖母の思召しならば、何とも致し方ございません。わたくしは笑いながら水から上がりました。人々は、わたくしの着物を木の茂みに懸け広げながら、溜息をついておりました。縞子と琥珀織りの外套、それに何やかやつまらぬ物が、トランクと袋の中にまだたくさん入っていました、それがみんなこのときから腐ってしまい、——わたくしたちは着るものがなくなりました。さて、パシコーフは、またわたくしを鞭打とうと思いたちました、「道化たまねをしていやがる！」というのです。わたくしは今度も、「聖母様、あの馬鹿者をおとなしくさせてください！」とやさしい聖母にお願いしました。希望の光であられるお方は、その通り彼をおとなしくしてくださいました、——彼はわたくしをふびんがるようになりました。

それから、わたくしたちはイグレン湖<sup>6)</sup>に着きました。そこからは連水陸路で、——わたくしたちは冬に旅立ちをしました。パシコーフは、わたくしから使用人たちを取り上げ、わたくしに雇われることはならぬと、ほかの人々に命じました。子供たちは幼く、食い手はおおぜいで、働き手はいません。哀れ不幸なこの司祭長は、一人で櫓を作りました、そして、一と冬ずっと連水陸路をのろろ進んでゆきました。〔B: ほかの人たちは櫓を曳かせる犬を持っていましたが、わたくしは一匹も持っていません。わずかに二人の息子——そのころはまだ小さかったイワンとプロコーピイ——が、雄の小犬よろしく、連水陸路をわたくしと一緒に櫓を曳っぱってゆきました。この連水陸路は、百露里ほどありました。哀れなわたくしたちは、やっと向こうに渡りつきました。司祭長夫人は、麦粉の袋と赤ん坊を背に

1) アヴァクムの長男、1656—1657年の冬には12歳であった。

2) 1657年5月上旬。

3) セレンガー河（バイカル湖に注ぐ）の右岸の支流。

4) 1657—1658年に、一行はヒーロク河を廻り、インゴータ河を下った。

5) ヒーロク河上流のイグレン湖からインゴータ河へ抜ける陸路。

6) バイカル湖東方、ヒーロク河の上流地方にある。

して歩いてゆきました。<sup>1)</sup>娘のアグラフェーナは、足を引き引き歩いていましたが、ぼったり櫛の上に倒れてしまいました。二人の兄弟は、わたくしと一緒にどうやらこうやら櫛を曳っぱってゆきます。あのころのことを思い出すと、おかしいやら、悲しいやら！——子供たちがへとへとになって雪の上にぼったり倒れます、すると母親が糖蜜菓子を一きれずつ彼らにくれてやります、二人はそれを食べ終わると、また曳綱を引っぱるのです。わたくしたちは、どうにかこうにか連水陸路を渡りきりました、そして、アブラムがマムレの櫛の木のとりに住んだように、松の木かげで暮らしはじめました。パシコーフは、初めのうち、存分に気がすむまでは、わたくしたちを鹿砦に入れてくれませんでした。わたくしたちは、一・二週間人かげもない林の中で、親子水入らずで、松の木かげに凍えていました。その後、彼はわたくしたちを鹿砦に入れ、落ち着き場所を指定しました。わたくしは子供たちと囲いを作り、掘って立て小屋をたて、火を焚きました、こうして河の水がとけるまでひどい難儀をいたしました。(26オ——26ウ) その春、わたくしたちは筏に乗ってインゴダ河を下りました。わたくしのこの船旅は、トボリスクを発ってから四年目に当たります。<sup>4)</sup>わたくしたちは、住居や砦を造るために材木を流送しました。<sup>5)</sup>食べるものがなくなりました、人々は飢えと水中作業の過労で死にはじめました。河は浅いし、筏は重い、監督たちは情を知らず、杖は太く、棍棒は節くれだち、鞭は鋭く、苛責は峻烈、——まるで吊刑台の火責めのようなのです。しかも人々は飢えきっています、——この上ちょっとでも苛責が加えられたら、すぐにも死んでしまったでしょう！(B: 彼らは、鞭打たれなくてさえ、やっと息をしているありさまでした。春から、一と夏分の食いぶちとして、麦芽が十人当たり一袋ずつ支給されておりました、それだけで汗水流して働き、よそへ食物を探しに行くのはまかりならぬのです。あるかわいそうな男が、粥に入れる柳の花を取りに行きました、——そのために彼は額に鞭をくわされ、《うろつきまわるな、どん百姓めが、くたばるまで働くんだ！》とどやされました。六百人からの人がいたのですが、パシコーフはみんなをこのように取り締まっていた(26ウ) ああ、何というひどい時代でしたらう！ どうして彼が正気をなくしてしまったのか、わたくしにはわかりません。わが司祭長夫人はモスクワ仕立ての外套を一着持っておりまして、これはまだいたんでおりませんでした、——モスクワで二十五ルーブルほどしましたから、こちらではもっと値打ちがありました、——彼はそれと引きかえに、裸麦を四袋わたくしたちにくれました。わたくしたちは、一・二年のあいだ、ネールチャ河の<sup>7)</sup>ほとりで暮らしながら、野草で何とかやりくりをつけては、この裸麦で食いつないでゆきました。彼はたえず人々を餓死に追いやり、よそへ食糧あさりに行かせませんでした、——たくわえは乏しくなりました。人々は草原や野原をさまよひ、草や根を掘り返しました、わたくしたちとて、——彼らと同じでした。冬には——松の皮を食べました、時には神が馬肉を与えてくだ

1) この時、イワンは13歳、プロコーピイは9歳、コルニーリイは4歳、アグラフェーナは12歳である。従って、ここに書かれている赤ん坊はシベリヤで新たに生まれた子供と思われる。

2) см. 創世記、XIII, 18。

3) アムール水系の河。オノーン河と共にシールカ河を形成する。

4) 1655—1658年のアヴァクムの行程をまとめると次のようになる。1) 1655年の夏——トボリスクからエニセーイスク(ここで越冬)。2) 1656年の夏と秋——エニセーイスクからブラーツクの砦(ここで越冬)。3) 1657年の春から秋——ブラーツクの砦からバイカル湖を渡ってイグレン湖まで、冬——イグレン湖から連水陸路でインゴダ河へ。4) 1658年の春——インゴダ河の筏流送。5) 二つの砦と附属の住居を建設する目的で、越冬中にインゴダ河畔で伐採が行なわれた、これは下流のネールチャ河一帯に材木が乏しかったためである。この時は2・3人乗りの筏が全部で170造られた。

6) 25ルーブルは当時としては大金であった(馬一頭が1.5ルーブル)、従って、アヴァクムはモスクワでかなり豊かに暮らしていたものと思われる。

7) シールカ河左岸の支流。パシコーフは、1658年6月初めにネールチャ河の河口に到着し、シールカ河左岸のネールチャ河口にネルチンスク砦を築いた。

## 司祭長アヴァクム自伝

さいました、また狼に殺された獣の骨を見つけたこともあります、——狼の食い残しさえ余さず食べました。ある人たちは、凍死した狼や狐を、それに手に入ったものであれば、——ありとあらゆるどんな汚いものでも食べました。一匹の牝馬が仔を生みました、飢えた人々は、仔馬を羊膜ごとこっそり食べてしまいました。パンコーフは、これをかぎつけ、彼らを息の根が止まるほどぶちのめしました。この牝馬も、ひどい目にあって死にました、それと申しますのも、人々が自然の理にさからって、仔馬を胎内から引き出したからです、——外に頭が出るか出ないかに、彼らは仔馬を引っぱり出し、汚い血を飲みはじめたのです。ああ、何というひどい時代でしたらう！ こうした難儀をなめていました 218オころ、わたくしの小さい息子が二人死にました<sup>1)</sup>、この二人は、ほかの子供たちと一緒に、山をつたい、とがった岩の上を、裸に素足でさまよい歩き、草や根で露命をつなぎ、さまざまな苦しみをなめました。罪深い人間でありますわたくしも、よんどころなく馬肉や死んだ鳥獣の肉を食べました。ああ罪深いわたくしの魂よ！ 現世の快樂のためにひどくそこなわれました哀れなる我が魂を嘆き悲しまんがために、我が<sup>こらべ</sup>頭に水を注ぎ、我が目を涙の泉となさん人<sup>2)</sup>やある？<sup>3)</sup> しかし、知事の息子の嫁エヴドキーヤ・キリーロヴナと彼アフナーシイの妻フォークラ・セミョーノヴナは、キリストの御為にわたくしたちを助けてくれました。この二人は、わたくしたちが餓死せぬように、彼に内緒で、こっそり嬉しい贈物をしてくれました、——あるときは一きれの肉を、あるときは丸パンを、あるときは 218ウできるだけの麦粉と燕麦を四分の一プードと一・フント<sup>4)</sup>、またあるときは半プード溜めて渡してくれましたし、またあるときは雞の餌を餌箱から掻き集めてくれたこともありました。わたくしの娘、あわれに不幸なアグラフェーナは、彼女の窓べにこっそり出かけたものでした。まったくもって、おかしいやら、悲しいやら！——あるときは奥様の知らない間に窓の下から追いはらわれ、またあるときはたくさん頂戴して戻って来ました。そのころはまだ子供でしたが、今ではもう二十七になっています、——可哀そうなこの子は、まだ娘のままメゼーンにおりまして、妹たちと一緒に何とか糊口をしのぎながら、悲しみの中に日を送っております。また彼女の母と兄弟たちは地下牢に閉じこめられて 219オおります。しかし、致し方ございません。あの不幸な者たちは、皆キリストの御為に苦しむがよい！ 神の御加護によって、どうぞそうなりますように。キリストの信仰のために苦しむのは、まったく当然のことでございます。かく申す司祭長はかつては高貴の方々と喜んで交わりを結んでおりました、しかし、今度は、不幸な人間よ、喜んで最後まで耐え忍ぶがよい。聖書にも、始めし者に<sup>7)</sup>あらずして、終えし者こそ、さいわいなれと書かれております。この話はもうたくさんです、話をもとに戻しましょう。

ダウーリヤの土地で、六・七年<sup>8)</sup>、ひどい難儀をしました、その間には時には楽しいこともございました。ところで、彼アフナーシイは、わたくしに根も葉もない言いがかりをつけて、たえずわたくしを殺そうとねらっていました。こうした憂き目をみていましたころ、彼はわたくしのもとに二人

1) 前に述べたように、アヴァクムがシベリヤに出発した時には、3人の息子（イワン、プロコーピイ、コルニーリイ）があった。上の二人はこの後にも出てくるから、死んだのはコルニーリイともう一人シベリヤで生れた子供である。

2) エレミヤ記、IX, 1。

3) エレメイ・アフナーシェヴィチ・パンコーフ。——アフナーシイ・パンコーフの息子。後に物語られているように、アヴァクムに対して同情的な立場をとり、献身的に彼に尽くした。

4) 共にロシアの旧重量単位。《プード》——約16.4キロ、《フント》——約410グラム。

5) アグラフェーナの妹たちの誕生については、クセーニヤ（CM. 233オ）以外は、この伝記では何も語られていない。

6) これについては、後に詳しく語られている（261オ）。

7) マタイ伝、XXIV, 13。

8) アヴァクムのダウーリヤ滞在は、実際には1658年から1662年までである。彼はトボーリスク出発（1655年）から計算していると思われる。

- 219ウ のやもめをよこしました。この二人は、彼のお気に入りの小間使いで、マーリヤとソーフィヤと申し、悪鬼にとり憑かれておりました。彼らにおまじないや妖術をいろいろ試みてみましたが、まったくききめがないばかりか、かえって騒ぎがひどく<sup>1)</sup>な<sup>1)</sup>ってゆくことが分かりました、——悪鬼がひどく二人を苦しめましたので、彼らはのたうちまわり、わめきたてておりました。彼はわたくしを呼びよせ、おじぎをしまして、「お願いします、彼らを引き取っていただきたい、神にお祈りをして、二人の面倒をみてほしい、神はあなたのお祈りなら聞いてくださるだろうから」と言いました。そこで、わたくしは、「あなた！ その願いはわたくしの力に及ばぬことです、しかし、聖者様たちの祈禱をおかりすれば、神はいかなことでも叶えてくださいます」と答えました。わたくしは二人の不幸な女を引き取りました。わたくしをお咎めにならないでください！ これにつきましては、ロシアで経験ずみなのでございます、——悪鬼に憑かれた人が三・四人、わたくしの家に連れてこられたことがあります、わたくしが聖者様たちの祈禱を唱えますと、生ける神、我らの主イエス・キリスト、やさしい神の御
- 220オ 子の御力と御命令によって、悪鬼どもは彼らの中から退散いたしました。わたくしは、彼らに涙と聖水を注ぎ、聖油を塗り、キリストの御名において祈禱を唱えました、すると神の御力がこれらの人から悪鬼どもを追いはらい、彼らはすこやかになりました。これはわたくしの手柄ではなく、——決してそんなことはありません、——やって来た人々の信仰によるものです。その昔、バラムにあってはろ馬に<sup>2)</sup>、殉教者ユリアヌスにあっては山猫に、シシニウスにあっては鹿に、神の恩寵があらわされました、——これらの動物が人間の声でものを申したのです。神がお望みなされるところでは、自然の法則も変えられるのでございます。エデッサのテオドルスの伝記をひもどかれて、娼婦が死者をよみがえらせた話をお読みください。寺法類篇には、聖霊はすべての人を聖職に上げ給うにはあらざれど、異端者ならざるすべての人に御力を及ぼし給う、と書かれています。さて、悪鬼に憑かれた女たちが、わたくしのところに連れてこられました。わたくしは、いつものように、自ら食を断ち、彼らにも断
- 220ウ 食させました。それからお祈りを唱え、聖油を注ぎ、知っている通りに試みました。女たちは、キリストのおかげで、正気に返り、元気になりました。わたくしはざんげを聴きとり、聖さんを授けてやりました。二人はわたくしの家に住み、神に祈っておりました。彼らはわたくしを慕って、家に帰らないでいたのです。彼は二人がわたくしの教子になったことを知り、またしても前にもましてわたくしに腹をたて、わたくしを火で焼き殺してくれようと考えました、——《お前は二人から俺の秘密を聞き出してるんだな！》というのです。いったいざんげを聴かずに、聖さんを授けるなんてことができましょうか？ また悪鬼に憑かれた者に聖さんを授けなければ、悪鬼を完全に追い出すわけにはまいりません。悪鬼という奴は、百姓とはわけがちがいます、鞭など奴は恐れませんが、奴の怖がるのはキリストの十字架と聖水と聖油<sup>3)</sup>です、それがキリストの聖体<sup>4)</sup>ですと文句なしに退散してしまいます。わたくしは、こうした機密<sup>5)</sup>を授けずには、癒すすべを知りません。わたくしたち正教の信仰では、ざん
- 221オ げを聴かずに聖さんを授けることはありません、しかし、ローマの信仰ではそうしたことをやらかして、ざんげをないがしろにしております。このようなことは、正教を奉じますわたくしたちにはふさわしいことではなく、いかなる場合にもざんげを求めなければなりません。もし止むを得ぬ事情で、僧侶が見つからなければ、自分の罪を心得のある仲間<sup>5)</sup>に告白なさるがよい、神はあなたのざんげ

1) マタイ伝、XXVII, 24。

2) cm. 民数紀略、XXII。

3) 聖さん用のパン (cm. 206ウ)。

4) カトリックの《秘蹟》に相当する。アヴァクムは、ここではいわゆる《聖さんの機密》(キリストの肉と血の象徴であるパンと葡萄酒を授けること)を念頭に置いているが、それと同時に、十字を切り、聖水を注ぐという行為も、当然これに含めている。

5) 旧教信者は、改革派の僧侶を忌避した。それでアヴァクムは、旧教の僧が見つからない場合の心得を、以下に説いている。

## 司祭長アヴァクム自伝

を御覧になって、あなたを赦してくださいませ、それからお祈りを唱えて、聖さんを受けなさい。常に予備の聖餅を携えておりなさい。道中であつたり、漁や狩に出ていたり、あるいはとにかく教会のない所に居合わせたようなときには、神の御前に深く息をつき、先に申しました通り、仲間に告白をし、清らかな心で聖さんを受けられるがよい。それで結構なのです！ 齋戒し、お祈りを唱えてから、キリストの御像の前に、布きれを箱の上に広げ、燈明をともしなさい、それから、うつわに水を少し入れ、それを匙にすくい、お祈りを唱えながら、キリストの聖体の一部を匙の水にひたしなさい、そして、たえず香を焚き、涙を流して、こう申されるがよい、《主よ、信じます、あなたが罪人をお救いになるために、中でもわたくしが一番の罪人でございますが、この世に御降臨なされた生ける神の御子キリストでありますことを、心から信じております。このパンが清浄きわまりないあなたの肉であり、この水が清純きわまりないあなたの血でありますことを、心から信じております。そのためにあなたにお祈りいたします、わたくしを憐れみ、わたくしをお赦しください、言葉の上で、行ないの上で、知っていることや知らないことで、判断や思考の面で、意識的・無意識的に行ないましたわたくしの罪を軽くしてください、そして、罪汚れをはらい、永遠の生命にあずかれますように、お咎めなしに聖さんを受けさせてくださいませ、それと申しますのも、あなたが永遠に祝福されていますお方ですから。アーメン》。それがすみましたら、聖像の御前に、大地にひれ伏して、赦しを乞いなさい、それから立って聖像に接吻し、十字を切り、お祈りを唱えながら聖さんを受け、聖水をいただいてから、もう一度神にお祈りしなさい。ああ、キリストに栄光がありますように！ たとえその後で死んだとしても、心配はいりません。もうこの話は十分です。あなたたちも、これが善いことであることぐらい、ちゃんと知っておられます。例の女たちの話にもどることにいたしましょう。

バシコーフは、衰れなやもめたちをわたくしから取り上げ、お礼を言う代わりにわたくしを罵りました。彼は、キリストがこのへんでおしまいにしてくれるだろうと思っていましたが、ところが、二人は前よりいっそうひどく狂いだしました。彼は二人をあき小屋に閉じこめ、誰も近よせないようにしました、それから一人の修道僧をつかわしましたが——二人が彼に薪を投げつけましたので、彼は退散してしまいました。わたくしは家で泣いておりました、どうしてよいやらわからなかったのです。彼の屋敷に近づく気にはなれません、彼がひどくわたくしに腹をたてていましたから。わたくしは、こっそり聖水を二人に届け、それで身を淨め、それを飲むように命じました、この不幸な女たちはよくなってきました。彼女たちはこっそりわたくしのところにやってきました。わたくしは、キリストの御名によって、二人に聖油を注いでやりました。今度もまた、神の助けによって、二人は治って家に戻りました、そして、神に祈るために、毎晩こっそりわたくしのところに駆けつけてまいりました。二人はりっぱな教子になり、遊びごとをやめて、勤行に励むようになりました。後ほど、二人は、奥様と一緒にモスクワのヴォズネセンスキイ僧院に身を落ちつけました。彼女たちのために神に栄光がありますように！

その後、ネールチャ河から再びロシアに向かって引き返しました。<sup>2)</sup> 五週間、櫓で氷の上を進んでゆきました。子供たちと古着やがらくたをのせるために、やくざ馬が二頭わたくしにあてがわれました。わたくしと司祭長夫人は、氷につまづきながら、とぼとぼ歩いてゆきました。そこは未開人の土地で、<sup>223</sup> だけだけしい土着の民がおりました。わたくしたちは、馬におくれるのはこわいし、かといっておくれずについてゆくこともできません、——みんな飢えに苦しみ、疲れきっていたのです。あわれな司祭長夫人は、とぼとぼ足を引きずりながら、よくころんだものでした、——とてもつるつる滑るので

1) バシコーフの妻フォークラ・セミョーノヴナ(1685死)。夫の死後(1664年)、二人のやもめと共にクレムリン内のヴォズネセンスキイ女子修道院に入り、尼僧となった。1673年から死に至るまで修道院長の職にあった。

2) 1660—1661年の冬の終り。

す！ あるとき、歩きながら彼女は転倒しました、一人の疲れきった男が彼女につまずき、その場にばったり倒れました。二人とも大声をあげました、でも立ち上がることができません。その百姓は、「奥さん、ごめんよ！」と叫びました。司祭長夫人は、「まあ、おとつつあんてば、潰れっちゃうじゃないの？」と叫びました。わたくしがそばにゆきますと、——可哀想な妻はわたくしを責めて、「司祭長よ、この苦しみはまだまだ続くのですか？」と申しました。そこでわたくしは、「マルコーヴナ、  
223ウ 死ぬ最後の時までだよ！」と申しました。彼女は深く息をついて、「いいですとも、ペトローヴィチ、ではまた先へまいりましょう」と答えました。

わたくしたちは黒い雌雞を一羽持っておりまして。この雌雞は、神の御指図によって、子供たちに食べさせるために毎日卵を二つずつ生み、わたくしたちの窮状を救ってくれました。神がこのようにはからってくださったのです。櫛に乗せてゆく途中、不幸なことに、この雌雞は押し潰されてしまいました。この雌雞のことを思い出すたびに、今でも可哀想でなりません。これは単なる雌雞ではなくて、まったく奇蹟の鳥でした、一年中毎日二つずつ卵を生んでくれたのです。たとえ百ルーブルだって、これにくらべたら、二束三文のあたいありません、屑鉄みたいなものです！ 神がお創りになられたこの鳥は、生命を与えられ、わたくしたちを養ってくれました、そして、わたくしたちと一緒に松の皮でつくった粥を鍋の中から啄んだり、また魚が手に入ったときは、その魚も啄んだものでした。  
224オ そのお返しに毎日一つずつわたくしたちに卵を生んでくれました。すべてをよいようにおはからいください神に栄光がありますように！ さて、この雌雞がわたくしたちの手に入りましたについては、特別なわけがございます。奥様の<sup>1)</sup>雌雞が、どれも目が見えなくなって、次ぎ次ぎに死んでゆきました。彼女は、雞たちを箱に入れ、——神父様、どうか雌雞のためにお祈りしてくださいと、わたくしのところに届けてきました。思うに、彼女はわたくしたちに食料を分けてくださっており、しかも御自分とて幼いお子さんたちを抱えておられたので、これらの雌雞は彼女にはなくてはならぬものでした。わたくしは祈禱を唱え、水を浄めて、雞にふりかけ、香を焚いてやりました。それから森に出かけ、<sup>こころ</sup>餌を入れる飼槽を作り、聖水をふりかけて、そっくり彼女に送り返しました。雌雞たちは、神の御意により、彼女の信仰のおかげで、病が癒え、元気になりました。わたくしたちの雌雞は、その中の一羽でした。でもこの話はもう十分です！ キリストにありましては、こうしたことは別に今日はじまったことではありません。その昔、クジマーとデミヤーンは、キリストの御名において、人や獣のた  
224ウ めに尽くし、病を癒やしてくれました。神にはすべてが御入用です、獣も鳥も清浄きわまりない主を讃めまつるためにあるのです、それはまた人間のためでもあるのです。

さて、わたくしたちはやっといグレン湖にたどりつきました。奥様は、わたくしたちのことを心配されて、——小麦を鍋に一杯とどけてくれました、わたくしたちは蜜飯を作って腹いっぱい食べました。エヴドキーヤ・キリーロヴナはわたくしたちの養い手でした、ところが、悪魔が彼女とわたくしを仲違いさせました。そのわけをお話しいたしましょう。彼女にはシメオンという息子がおりまして、——この子はあちらで生まれ、わたくしが産後の感謝式を執り行い、洗礼を施してやったのです。彼女は、祝福を受けさせるために、わたくしのところに毎日この子をよこしていました。わたくしは、十字架で祝福し、聖水をふりかけ、彼に接吻して、家に帰しておりました。この子はすこやかで元気でした。ある日、わたくしが家を留守にしましたとき、この子が病気になりました。彼女はがっくりしてしまい、わたくしに腹をたて、この子を百姓の呪い師のもとへやりました。これを耳にして、わたくしも彼女に腹をたてました、こうしてわたくしたちの間にひどいいさかいが始まったのです。  
225オ 子供は前よりいっそう容態が悪化し、右の手と一方の足が棒のように干からびてしまいました。彼女は自責の念にかられました、でもどうしてよいかわかりません、しかも神はいっそう激しくお苦しみになります。子供は死にそうになりました。この子のお守り役たちが、わたくしのところに来ては、

1) パシヨーフの息子エレメイの妻、エヴドキーヤ・キリーロヴナ。

## 司祭長アヴァクム自伝

泣きました、わたくしは、「あれは、性悪女だから、一人で勝手にさせとくがいい！」と申しておりました。そうして彼女の悔い改めを待っていたのです。わたくしは、悪魔が彼女の心をかたくなにしたことを知っていました。ですから、どうか彼女の目を開いてくださいと、神に祈りました。われらが主、限りなく慈悲深い神は、彼女のかたくなな心を柔らかくしてくださいました。明るく朝、彼女は次男のイワンをわたくしのところによこしました、——彼はベチカのそばを歩きつ戻りつ、頭を下げては、泣く泣く母のために赦しを乞いました。わたくしは、白樺の皮をひっかぶってベチカの上に裸で横になっていました。司祭長夫人はベチカにもぐりこみ、子供たちはそこそこに散らばっておりました。ちょうど雨が降っていました、着るものはなくなっていましたし、この仮小屋は雨漏りがしていました、—— 225ウ  
わたくしたちは、何とかやりくりをつけてしのいでいたのです。さて、わたくしは、彼女をこらしめてやるために、<sup>まじな</sup>《呪い師のアレーファに赦しを乞えと母に言いなさい》<sup>1)</sup>と彼に命じました。それから、病人が運びこまれました、——彼女は、子供をわたくしの前に寝かせました。わたくしは起き上がり、埃の中から祭服の肩帯を取り出し、聖油を探しました。神に祈りをささげ、香を焚きながら子供に聖油をそそぎ、十字架で祝福してやりました。神の助けによって、子供は手足がなおり、再び元気になりました。わたくしは彼に聖水を飲ませ、母親のもとに返しました。さあ、わたくしのお聞きのみなさん、母親の悔い改めにどれほど大きなききめがあったか、とくと心に留めなざるがよい、彼女は自分の魂を癒やし、息子の病気をなおしたのです！ 当然のことではないですか？——神が悔い改める人たちのためにいられるのは、何も今日に限ったことではございません！ 明るく朝、彼女は魚とピログをわたくしたちに届けてくれました、これは腹へこのわたくしたちには何よりの贈 226オ  
物でした。それ以来わたくしたちは仲直りいたしました。この優しい夫人は、ダウーリヤを引き揚げてから、モスクワで亡くなりました、わたくしはヴォズネセンスキイ僧院に彼女を葬ってやりました。パシコーフは子供の一件を耳にしました、——彼女が彼に話したのです。その後で、わたくしは彼のところに行きました。彼は低く頭を下げ、「ありがとう！ あなたは父親のようにふるまわれ、——わたくしたちの悪行を忘れてくれました」と言いました。〔B：この子は彼のお気に入りの孫でした、彼は自分でこの子に洗礼をしてやり、この子のことをとても心配しておりました。(35オ)〕そのとき彼はたくさん食物を届けてくれました。

さて、その後まもなく、彼はわたくしを拷問にかけようとなりました。そのわけをお聞きください。彼は、息子のエレメイに七十二名のコサックと二十名の土民をつけて、モンゴールの国に遠征させることにしました、そして、一人の土民に、遠征隊が成功するかどうか、勝って戻ってくるかどうか 226ウ  
について呪術、すなわち占いをさせました。この百姓の呪術師は、夕方ごろ、わたくしの仮小屋のそばに一匹の生きた羊を連れてきて、呪術にとりかかりました、——羊の体を何度もくるくる回してから、首をねじ切り、頭をぼんと投げずてました。それから、飛んだり跳ねたりして、悪魔どもの呼び出しにかかりました、そして、さかんにわめきちらしてから、大地にぼったり倒れ、口から泡を吹きはじめました。悪魔どもが彼をしっかりと押さえつけました、彼は、「この遠征は成功するか？」と彼らに聞きました。悪魔どもは、「大勝利をおさめ、たくさんのお宝を分捕って帰るだろう」と言いました。司令官<sup>3)</sup>たちは喜び、みんなは嬉しがって、「俺たちは金持になって帰るんだ！」と言いました。ああ、そ 227オ

1) この「赦し」という言葉は一種の懸言葉と見られる。ロシア語の《 прощение 》には、「赦し」の意味のほか、古くは《 奇蹟的治癒 》の意味があった。ここではむしろ後者の意味で訳するのが至当かと思われる。いずれにせよ、すぐ前にイワンが《 母のために赦しを乞う 》( просит прощение )とあり、更にここで《 прощение просить 》と繰り返しているのは、アヴァクムの言葉の上の洒落と考えられる。

2) この遠征は、1661年の8—9月に行なわれ、完全な失敗に終わった。原因は、17名のエニセイスクのコサックが、エレメイを裏切り、夜半に武器、弾薬を奪い、インゴード河を後で逃げ下ったためである。

3) パシコーフとエレメイを指す。

- のときのわたくしの胸のせつなかつたこと、今でもやりきれない思いがします！ わたくしは良からぬ牧人でした、自分の羊たちをだめにしてしまったのです。悲しみのあまり、わたくしは福音書の次の話を忘れてしまいました、——ゼベダイの子らが薄情な村人たちを主にうったえました、「主よ、我々が天上より火を呼び下して、ヨエルがなせる如く、彼らを滅すことを欲し給うか」。イエスカへり見て彼らに言う、「汝らは、自らがいかなる精神<sup>こころ</sup>にてあるやを知らず、人の子の来たれるは、魂を滅さんがためにあらずして、救わんがためなり」。かくして相共に他の村に往き給う。——と福音書には書かれております。ところが、呪われたわたくしめは、そうしなかつたのです。わたくしは羊小屋の中で慟哭し、大声で主に呼びかけました、「神よ、わたくしの言葉を聞いてください！ わたくしの言うことを聞いてください、やさしい天なる神よ！ わたくしの言葉を聞きとどけてください！
- 227ウ 彼らが一人も戻りませんよう、みんなの墓をあちらにつくってください！ 彼らにわざわざいをお下しください、主よ、お下しになってください、悪魔の予言があたりませんよう、彼らを破滅させてください！」わたくしはこうしたことをまだいろいろ申しあげました。またひそかにこのことをひたすら神にお願いしていました。わたくしがこうして祈っていることが、彼の耳に入りました、でも彼はわたくしを罵倒しただけでした。さて、彼は、自分の息子を部隊と共に送り出しました。彼らは夜空の星の下を出発しました。そのとき、わたくしは彼らがかawaiiそうでした、わたくしの心は彼らが皆殺しのめにあうことを予見していたのです、それでもわたくしは彼らの死を祈っていました。数人の者がわたくしに別れを告げにきました、わたくしは、「お前たちはあちらで死んでしまうぞ！」と彼らに言いました。いざ出発というときに、彼らの乗っていた馬がとつぜん嘶きはじめ、そこにいた牛どもが急に啼きだし、羊や山羊どもが不意に鳴きはじめ、犬どもが吠えだし、土民たちまでが犬のように唸りはじめました。すべての人が恐怖にとらわれました。エレメイは、神父様、わたくしのために祈ってくださいと、涙ながらの言づてをよこしました。わたくしは彼がかawaiiそうになりました。彼はわたくしの秘密の友で、わたくしのために苦しみをなめました。彼の父がわたくしを鞭打ちましたとき、彼は父を止めようとした、それで父は剣を手にして彼を追いかけてきました。またわたくしたちが二番目の早瀬パドゥーンに着きましたとき、四十隻の船がことごとく水路を通りぬけました。ところが、彼アファナーシイの船は、——装備がりっぱで、六百人のコサックが総がかりで骨折りましたのに、河上に曳きあげることができません、——水の流れの方が優勢でした、——より正しく言え
- 228ウ ば、これは神がこらしめになっておられたのです！ 人々はみんな水の中に引きずりこまれ、船は暗礁に投げ上げられました、水は船の上をのりこえてほとぼしるのですが、中には流れこみません。愚か者どもに対する神の懲らしめられようは、不思議と申すほかはありません！ 彼自身は岸にいましたが、奥様は船の中におられました。エレメイは、「父上、神があなたの罪をお咎めになっておられるのです！ あなたはいわれもなく司祭長を鞭打たれました、父上、悔い改めるべきときです！」と申しました。彼は息子に向かって野獣のように吼えたたてました。エレメイは、一本の松の木に身を寄せ、両手を合わせて立ちました、そして、立ったまま、「後生です、やめてください！」と申しました。パシコーフは、車輪式引金のついたピストルを従卒の手から引ったくり、——一度だって仕損じたことのない代物でした、——息子に狙いをつけて、引金をおろしました。神の御加護によって、ピストルは不発におわりました。彼は火薬をつめなおし、再び撃鉄をおろしました、しかし、今度も
- 229ウ ピストルは不発におわりました。彼は三たび試みましたが、しかし、三回目もやはり不発におわりました。彼はピストルを地面に投げつけました。従僕がそれを拾い上げ、脇の方に発射しますと、——みごとに弾が飛び出しました！ ところで、船の方は依然として水底の岩礁に乗り上げたままでした。パシコーフは、床几に腰をおろし、剣にもたれて、物思いに沈んでおりましたが、急に泣きだして、「呪

1) ルカ伝、IX、54-56。

## 司祭長アヴァクム自伝

わたたくしは、罪を犯しました、いわれもなく司祭長を鞭打ち、罪のない血を流しました。そのため神がわたたくしを懲らしめておられるのです！<sup>1)</sup>と申しました。すると、何と不思議なことでしょう！ 神は怒ることを遅くし、聴くことを速かにし給うと聖書に書かれています<sup>2)</sup>が、——その通り、彼のこのごんげによって、船はひとりてに暗礁を離れ、上流にへさきを向けたのです。そこでみんなが曳っぱりますと、——船はたちまち波の静かな水面に走り出しました。そのとき、パシコーフは息子をそばに呼びよせ、「エレメイ、どうか赦してくれ、お前の言った通りだよ！」と申しました。229ウ彼は駆けよって、父の足下に身を投げ、頭を下げて申しました、「父上、あなたをお赦しなさるのは神様です！ 神に対し、またあなたの前に罪があるのは、このわたたくしです！」そして、父の腕をとって、連れてゆきました。エレメイはとても分別のある善良な人でした、もう髯の白い年でしたが、非常に父を敬い、おそれ<sup>かしこ</sup>んでおりました。神は親を敬う子らを愛すと聖書にありますように、そうでなくてはなりません。さあ、わたたくしのお聞きのみなさん、エレメイは、わたたくしたちのために、そしてまた何よりもキリストとその真理のために苦しんだのではないのでしょうか？ アファナーシの船の舵取りで、その場に居合わせたグリゴリー・チェリノイが、わたたくしによくこの話をしてくれました。本題にもどるとしましょう。

さて、彼らは出発し、戦におもむきました。わたたくしはエレメイを憐れに思い、彼に慈悲をおかけくださいと、一心に神にお願いしました。人々は、戦すんで彼らが帰ってくるのを待っていました、——しかし、予定の期限がきても帰ってきません。その間、パシコーフはわたたくしをよせつけようと 230オもしませんでした。そうしたある日のこと、彼は拷問部屋をしつらえ、さかんに火をおこしました、——わたたくしを拷問にかけようという腹なのです。わたたくしは臨終の祈禱を唱えました、と申しますのは、わたたくしは彼の料理の仕方をよく承知していたからです、——彼のこうした火に焙られて、生き残った者はまずないのです。わたたくしは、人が自分を引っ捕えに来るのを待っていました、そして、腰をおちつけ、泣いている妻と子供たちに、「神の御意<sup>こころ</sup>の行なわれん事を！ 我ら生きるも主のために生き、死ぬるも主のために死ぬ<sup>4)</sup>」と申しました。見ると、わたたくしを捕えに二人の刑吏が走ってきます。まことに驚嘆すべきは主の御業、測りがたきは神の思召しでございます！ このとき、手傷を負ったエレメイが、いま一騎と連れだつて、わたたくしの家と庭のかたわらを小道づたいに通りがかりました。彼は大声で刑吏たちを呼び止め、一緒に連れ帰りました。彼パシコーフは、拷問部屋をうっちゃって、息子を迎えに出ました、その様子は、悲しみに酔いしれた人間のようなのでした。さて、エレメイは父にあいさつをすませ、一部始終をくわしく話しました、——彼の軍勢が残らず皆殺しのめにあ 230ウったこと、一人のモンゴル人が人の住まぬ土地を通過して彼を案内してくれたこと、岩山や森の中を、何も食わずに——食べたものといえば栗鼠一匹だけでした——七日もさまよい歩いたこと、わたたくしの姿をした人が彼の夢枕にあらわれ、彼を祝福し、行くべき道を教えてくれたこと、彼がこおどりして跳ね起き、正しい道にたどり出たこと、——を父に話しました。彼が父に話をしておりましたとき、わたたくしは二人に挨拶に行きました。パシコーフはわたたくしに目をあげて、——まるで白熊のように、わたたくしを生きたまま呑みこまんばかりの形相でした、しかし、神がわたたくしを彼の手に渡したりするのですか！——彼は溜息をついて、「こいつはてっきりお前の仕業だな？ あんなにたくさんの人間を破滅させやがって！」と言いました。しかし、エレメイは、「神父様、お願いです、お家にお帰りになってください！ キリストのために何もおっしゃらないでください！」とわたたくしに申しました。

1) CM. マタイ伝、XXVII. 4.

2) CM. ヤコブ書、I, 19.

3) 申命記、V. 16. 出エジプト記、XX, 12

4) ロマ書、XIV, 8.

- 231オ 十年の間、<sup>1)</sup>彼がわたくしを苦しめたのか、それともわたくしが彼を苦しめたのか、——それはわたくしにはわかりません。それは、最後の審判の日に神がきめてくださいます。彼は新任者と交代し、<sup>2)</sup>わたくしはロシア帰還の指令を受け取りました。彼は出発し、<sup>3)</sup>わたくしを置き去りにしてゆきました。彼は腹の中で、「奴が一人で出かけでもしたら、土民たちに殺されるさ」と考えていました。彼は船に武器を積み、人々を乗せて旅立ちましたが、後でわたくしが帰るときに聞いたところによりますと、——彼らは土民たちを恐れて、震えていたということです。さて、わたくしは、彼が出発してから一か月後に、あちらでは何の役にもたない年寄り、病人、負傷者を十人ほど集め、それにわたくしの妻子を加え、総勢十七人で船に乗りこみました、そして、キリストを信頼し、へさきに十字架を立て、<sup>4)</sup>運を天にまかせて、何ひとつ怖れず船出いたしました。〔B:しかし、時には怖れもしました、何分わたくしたちは人間でございます、いったいどこに隠れる所がございましょう、所詮は死を免れません！ このことは使徒パウロの身にもあったことです、使徒自身、「内には恐れ、外には不安ありき<sup>5)</sup>」と自分について証しされています、また別の箇所では、「我もはや生きてあらん望みを失いぬ、されど主は我を救い給えり、また救い給わん」と証しされています。わたくしたちの不幸もまさにその通りです。もし主がお救いくださいなれば、やがてわたくしの魂は地獄に落ちるでありましょう。ダビテも、「主もし我らのかたに在さざりしならんには、人々の我らに向かいて立ちし時、我らを生けるまゝに呑みしならん」<sup>7)</sup>と申しています。しかし、主は何かにつけてわたくしを守ってくださいましたし、今も守ってくださっております。わたくしは、小麦の中の雑草のように、善良な人々の中であくせくし、またある時は、狼の中の羊のように、犬の中の兎のように、イエス・キリストの御為に何とか命をつないでおります。異端者どもは犬のように歯を鳴らしておりますが、神のお許しがなければ、わたくしを呑みこむことはできません。主の御意<sup>6)</sup>は絶対です、——何ごとも神の思召し通りになるのです。わたくしたちは死をまぬがれません。何か善い行ないをし、何かを携えて、主の御前に出なければなりません、わたくしたちはいずれは死ぬ身なのですから。この話はもう十分です。(34オ——34ウ)〕わたくしは領地管理人に<sup>8)</sup>寺法類篇<sup>9)</sup>をやり、彼はわたくしに水先案内人をつけてくれました。またわたくしは、身の代金を払って友のワシーリイを自由の身にしてやりました。彼は、パシコーフの下で人々を告発し、その血を流し、わたくしの首を狙った男です。あるときなどは、わたくしを鞭打った上で、串刺しの刑にしようとした、しかし、そのときも神は守ってくださいました！ パシコーフが発った後、コサックたちはどうしても彼を打ち殺そうと思っていました。わたくしは、キリストの御為にコサックたちに頼んで彼をもらい受け、領地管理人に身の代金を払って、彼をロシアに連れ帰り、命を助けてやりました、——この哀れな男が自分の罪を悔い改めますように！ またわたくしは、もう一人これと同様のろくでなしを連れ帰りました。人々は、この男をわたくしに渡そうとせませんでした。彼は死の手を免れようと森の中に逃げこみ、途中でわたくしを待ち受けて、泣きながらわたくしの船に飛びこんできました。すぐに追っ手が追ってきます！ 匿まる場所はありません。わたくしは、——どうかお赦してください！——よからぬふるまいをしてしまいました、ちょうどエリコ<sup>あそびめ</sup>の妓婦ラハ
- 232オ

1) 実際は7年間。アヴァクムは、パシコーフが当時知事をしていたエニセーイスクに1655年に着いた。又パシコーフがシベリヤからモスクワに発ったのは1662年である。ここで10年と書いているのは、11年にわたるシベリヤ流刑を念頭において、概算したものと思われる。

2) パシコーフの後任イラリオン・トルブジンは、1662年5月12日、イグレン湖に到着した。

3) パシコーフのイグレン湖出発は、1662年5月25日。

4) アヴァクムのイグレン湖出発は、1662年の6月末。

5) コリント後書、VII, 5。

6) コリント後書、I, 8, 10。

7) 詩篇、CXXIII, 2。

司祭長アヴァクム自伝

ブがスンの子ヨシュア<sup>1)</sup>の部下たちを匿まったように、彼を船底に寝かせて、夜具をひっかぶせ、司祭長夫人と娘にその上に横になれと言いつけました。追っ手たちはくまなく探しまわりましたが、わたくしの妻を立たせようとはせず、ただ「かあさんや、やすんでいなさい、あんたはずいぶん苦労しましたねえ、奥さん！」と言っただけです。——ところで、わたくしは、——どうかお赦してください、——そのとき嘘をついて、「あの男はここにはいないよ！」と申しました、——わたくしは彼を死の手<sup>2)</sup>に渡したくなかったのです。追っ手たちは、しばらく探してから、空手で戻ってゆきました、わたくしは彼をロシヤに連れてゆきました。神父ならびにキリストの僕<sup>3)</sup>よ、わたくしをお赦してください。わたくしはあ<sup>4)</sup>のとき嘘を言いました。あなた方はどう思われますか？ わたくしの罪は大きいでしょ 232ウ  
うか？ 妓婦<sup>あそびめ</sup>ラハブにありましても、彼女は同様にふるまったのだと思います、でも聖書はこのことで彼女を讃めております。あなた方も、どうか裁いてください、もしわたくしが罪を犯したのであれば、わたくしを赦してください、教会のならわしに反しないのであれば、まことに結構なことです。ここにあなたのために余白を残しておきます。あなたの手で、わたくしと妻と娘のために、赦しまたは懲罰の言葉を書き入れてください、わたくしたちは一緒になってよからぬことをしたのです、——あの男が神にざんげすることを望んで、死の手からかばってやったのです。最後の審判の席でキリストがこのことをお取り上げにならないように、お裁きください。神父よ、ここに何なりとお書き入れになってください。

<神は、あなたとあなたの妻アナスターシャ、あなたの娘、それにあなたの一家を、現世でも来世 233オでも、ことごとく赦し給い、祝福を与えられましよう。あなた方は、りっぱに、そして正しくふるまわれました。アーメン。><sup>4)</sup>

ありがとうございます、神父様、御親切を感謝します！ 話の続きに入りましよう。

領地管理人は、麦粉を三十フントほど、牝牛を一頭、山羊を五・六匹、それになにがしかの乾し肉<sup>は</sup>をくれました。わたくしたちはそれを食べて、一と夏船旅を続けました。この管理人はりっぱな人で、わたくしの娘クセーニヤ<sup>5)</sup>の教父になってくれました。この娘は、まだパンコーフと一緒に時分に生まれたのですが、彼が香油や聖油をわたくしにくれなかつたので、長いこと洗礼を受けておりませんでした、——わたくしが洗礼を施しましたのは、彼が発発してからのごとでございます。わたくしが妻のために自ら産後の感謝式を執り行ない、管理人を教父とし、わたくしの長女を教母とし、わたくしが僧侶の役を受け持って、子供たちを洗礼いたしました。息子のアフナーシイ<sup>6)</sup>にも、まったく同じ 233ウやり方で洗礼を施しました、メゼーンで聖礼の式を執り行ない、彼に聖さんを与えてやりました。わたくしは、自分で自分の子供たちのざんげを聴き、聖さんを授けておりました、しかし、妻にはそうしたことをしたことはありません、——これについては教会の掟に定められておまして、それに従わなければなりません。あの背教者どもの禁令<sup>7)</sup>などはキリストの御名において足で踏んづけ、奴らの呪咀で、——口にすると胸糞が悪い！——尻を<sup>4)</sup>ふいてやる。わたくしは、モスクワの聖者でいらっしやるピョートル、アレクセイ、ヨナ、フィリップから祝福を授かっています、——わたくしはこの

1) CM. ヨシュア記、II。

2) アヴァクムのざんげ聴問僧エピファーニイを指す。

3) アフナーシイ某なる旧教信者を指すと思われる。エピファーニイは、このアフナーシイに自分の《自伝》の第一部を贈った。なおこの《キリストの僕》は241ウ、277ウ、285オにも出てくる。

4) < >の中は、エピファーニイの書き入れ。

5) シベリヤで生まれた二人目の子供。

6) 1665年頃、メゼーンで生まれた末の息子。

7) 1667年の宗教会議の決定で、僧侶が自分の子に洗礼を施し、ざんげを聴き、聖さんを授けることが禁止された。

8) ピョートル(1326死)、アレクセイ(1300—1373)、ヨナ(1461死)、フィリップ(1507—1569)——いずれも教会によって聖者と認められたモスクワの府主教。

方々の書き遺された言葉通りに、真心から神を信じ、神に仕えております。わたくしは背教者どもを否認し、呪っております、——奴らは神の敵です、わたくしはキリストと共にありますから、奴らな  
 234オ んか恐れていません！ たとえ我が身の上に石が積まれようと、教父たちの伝統を守って、石の下でも耐え忍びます、ましてやあの道化・盗人のニーコンのやからの呪咀を耐え忍ぶぐらい何でもありません。何で長々と話す必要がありましょう？ 奴らの儀式や礼拝、それに奴らが手を入れた新版の聖書に、唾をひっかけてやろう、——それでいいのさ！ キリストと聖母に喜んでいただくにはどうしたらよいか、それについて話しましょう、奴らのたわけた話なんかもうたくさんです。ニーコンのやからよ、さんざん罵倒したが、悪く思わんでくれ、お前たちは好きなように生きるがよい。わたくしは、自分の苦難について、わたくしに対するお前たちの御親切なもてなしぶりを、語りつづけることに  
 234ウ しよう。あれからもう二十年になります。お前たち故のわたくしの受難を、どれほど神がお望みになられようと、おお、主なる神よ、我らが救い主イエス・キリストよ、それはわたくしからすれば何でもありません！ ですから、キリストがお望みになれる間は、ちゃんと生きてゆくつもりです。もう止めましょう、——とんだ横道にそれてしまいました。前の話にもどりましょう。

わたくしたちはダウーリヤの地を後にしました。食糧が乏しくなりましたので、仲間たちと神にお祈りしました。キリストは一頭の大鹿を授けてくださいました、それは大きな獣でした、——これを食料にして、わたくしたちはバイカルの湖<sup>うみ</sup>にたどりつきました。湖<sup>うみ</sup>のほとりでロシア人の一団に出会いました、彼らは黒貂を捕りに来ていたのですが、そのときは魚をとっておりました、心のやさしい人たち、チェレンチイとその仲間、喜んでわたくしたちを迎え、わたくしたちを船に乗せたまま湖から曳き上げ、遠くの岩の上まで運んでくれました。この愛すべき人たちは、わたくしたちを見て涙を流し、わたくしたちは彼らを見て泣きました。彼らは、要るだけの食物をわたくしたちにくれました、——  
 235オ とりたてのちょうざめを四十尾ほどわたくしの前に持ってきて、「神父様、これはあなたの分として神がわたくしたちの筈<sup>やな</sup>に入れてくださったものです、——そっくり取ってください！」と申しました。わたくしは彼らにおじぎをして、魚を祝福し、「こんなにたくさんどうしましょう？」と言って、彼らに持ち帰ってくれと頼みました。しばらく彼らの世話になりましてから、必要な食糧を彼らから貰い、船を修理し、どうにか帆をつくらせて、湖<sup>うみ</sup>の向こう岸へ船出しました。湖<sup>うみ</sup>の上で天候がくずれ、わたくしたちは力のかぎり漕ぎました。湖はこのあたりではそれほど広くはなく——百露里か八十露里ほどでした。向こう岸につきましたとき、激しい暴風におそわれました。わたくしたちは、波に安全な場所をやっと岸べに見つけました。そのあたりには、高い山々、岬々たる懸崖がそびえたち、その高いことは非常なもので、——わたくしも二萬露里ないしはそれ以上旅をしましたが、こんなに高いのはどこでも見たことがありません。そのいただきには、御殿や小塔、門や柱、石垣や庭があります、  
 235ウ ——これらはいずれも神の御手になるものです。この山々には、玉葱やんにくが生えており、ロマノヴォ<sup>1)</sup>産のものより大きく、とても甘味があります。そこには神がお植えになられた麻も生え、紅崩<sup>くれない</sup>える庭の花は、色美しく馥郁たる香気を放っています。鳥は非常にたくさんいて、鷺鳥や白鳥が雪のように白く湖の上を泳いでおります。そこには、——ちょうざめ、鱒、小ちょうざめ、鮭、白鱒、その他たくさんの魚がいます。水は真水ですが、大きなあざらしやおとせいがおります、メゼン<sup>2)</sup>に住んでいましたとき、あの大海でもこういうのは見たことがありません。魚ときたらうようよしています、ちょうざめや鱒はこってり脂のついていて、——フライパンで揚げることができません、脂で  
 236オ べとべとになってしまいます。やさしいキリストは、心安らかに神を讚美できますように、これらすべてを人間のためにお創りになられたのです。されど人なるもの、そは空<sup>くう</sup>にことならず、——その存<sup>なが</sup>

1) ロマノヴォ・ボリソグレブスク (現ヤロスラーヴリ州、トゥターエフ市)。

2) 白海に注ぐメゼン河の右岸にある町 (アルハーンゲリスク州)。1664年8月29日、アヴァクムはモスクワから更にここに流された。

## 司祭長アヴァクム自伝

らうる日は過ぎゆく影にひとし<sup>1)</sup>、人間は牡山羊のように跳ねまわり、風船玉のようにふくれ、山猫のように怒り、蛇のようにがつがつし、他人の美を見ては仔馬のように嘶き、悪魔のように狡猾にふるまい、たらふく食らっては祈りもせず眠り、神に祈らず、老いの日まで悔い改めを延ばし、そしてこの世から消えてゆきます。それからどこへ行くのでしょうか、光の中でしょうか、闇の中でしょうか、それはわたくしにはわかりません、——その行く先は、最後の審判の日に一人一人に示されましょ。わたくしをお赦してください、誰にもまして罪深いのはこのわたくしでございます。

さて、わたくしたちはロツヤ<sup>2)</sup>の町々につきましました、そして、教会が少しもよくなっていないばかりか、かえって混乱がひどくなっていることを知りました。わたくしは悲しくなり、坐りこんで思案に就いていました、——《どうしたらよいだろう？ 神の御言葉を説きつづけようか、それともどこか 236ウに身を隠してしまおうか？ 何ととっても妻子をかかえた身だからなあ》。——わたくしがふさぎこんでいるのを見て、わが司祭長夫人はうやうやしくわたくしに近寄り、《あなた、なぜふさいでいらっしゃるのですか？》と申しました。わたくしはつぶさにわけを話しました、《妻よ、どうしたらよいだろう？ 異端の冬が目の前に来ている、わたくしは語るべきだろうか、それとも沈黙すべきだろうか？ わたくしにはお前たちというものがあるんだよ！》すると、彼女は、《まあ、とんでもない！ 何をおっしゃるんです、ペトローヴィチ？ わたくしは、《汝妻につながる者なるか、<sup>3)</sup>積くことを求むるな、<sup>4)</sup>妻につながるぬ者なるか、妻を求むるな》という使徒の言葉を、——ほかならぬあなたが読んでいらしたのを、——聞きましたわ。わたくしは子供たちと一緒にあなたを祝福します、今まで通り憶えず神の御言葉を説きなさい、わたくしたちのことは心配めさるな、神のお許しがあるあいだは一緒に暮ら 237オしましょ、もし別れ別れにされたときは、お祈りの中でわたくしたちのことを忘れないでください、キリストはお強くいらせられます、わたくしたちを見捨てたりなさいません！ 行きなさい、教会へ行きなさい、ペトローヴィチ、異端者どもの欺瞞をあばいてやりなさい！》と申しました。この言葉を聞いて、わたくしは彼女に低く頭を下げ、歎かわしい浅はかな考えを振り落とししました。わたくしは、今まで通り、町から町へ、また到る所で、神の御言葉を説き且つ教えはじめました、そして、ニーコンのやからの異端ぶりを断乎としてあばきたてました。

さて、わたくしはエニセーイスクで冬を越し<sup>5)</sup>、夏のあいださらに船旅をつづけ、今度はトボーリスクで冬を過ごし<sup>6)</sup>ました。モスクワにつくまでのあいだ、町といわず、村といわず、教会でも市場でも、神の御言葉を説き且つ教え、異端の邪説をあばいては、声高らかに叫びました。それからモスクワにつきましました。ダウーリヤを発ってから三年がかりの旅でした。この前あちらにまいりましたときは、五年のあいだ河を遡<sup>8)</sup>り、遊牧民の宿营地や居住地の間を、東へ東へと連れてゆかれました。今度の旅に 237ウ ついても、話すことはどっさりあります！ 土民たちの掌中に落ちたことも何度かございます。大河オビのほとりでは、わたくしの前で二十人のキリスト教徒が殺されました、しかし、わたくしについては、彼らは相談の上で無罪放免にしてくれました。またイルティン河のほとりでは、彼らの一団

1) 詩篇、CXLIII, 4。

2) 公式には、ヴェルホトゥーリエ（中部ウラルのスヴェルドロフスク州）以西を指すが、アヴァクムはエニセーイスクやトボーリスクも含めてもっと広い意味で使っている。

3) マタイ伝、XXVII, 24。

4) コリント前書、VII, 27。

5) 1662—1663年の冬。

6) 1663—1664年の冬。

7) アヴァクムのモスクワ到着は1664年の春。イグレン湖出発（1662年6月末）から起算すれば2年であるが、ここではネールチンスク砦の出発（1660—1661年の冬の終り）から計算している。

8) アヴァクムのトボーリスクからネールチンスクまでの行程は、5年ではなく、4年（1655—1658）。河の遡行は、イルティン河とオビ河の合流点からイグレン湖まで。

が集結し、ベリョーゾヴォから来るわたくしたちを殺そうと、船の来るのを待ち受けていました。わたくしは、そうとは知らずに、彼らのいる方へ行き、着きましてから船を岸によせました。彼らはてんでに弓を持ち、たちまちわたくしたちを包囲しました。わたくしは進み出て、修道僧にでもするように、彼らを抱擁し、《キリストの我と共にあらんことを、しかしてまた御身とも共にあらんことを！》と申しました。すると、彼らはわたくしに好意をいただき、自分たちの妻をわたくしの妻のところに連れてきました。わたくしの妻も、世間でよくやる御機嫌取りをするときの要領で、彼女たちに心にもないお世辞をふりまきました、それで女たちも機嫌がよくなりました。周知の通り、キリストのおかげで、女よければすべてよしでございます。男たちは弓矢を引っこめ、わたくしと商売をはじめました、——わたくしは売れ残りのひどい品物を彼らからかなり買いました、——その後でわたくしを放免してくれました。トボーリスクにつきまして、これまでの話をいたしますと、人々はびっくりしました、と申しますのは、そのころシベリヤの到るところでバシキール人やタタール人が叛乱を起こしていたからでございます<sup>3)</sup>。ところが、わたくしは、そんなことも知らずに、キリストを信頼し、彼らの間を旅してきたのです。それから、ヴェルホトゥーリエ<sup>4)</sup>に着きました、わたくしの友イワン・ボグダーノヴィチ・カムイニンも、わたくしを見てびっくりし、《神父さん、あなたはどうやって通り抜けてきたんですか？》と申しました。わたくしは、《キリストがお連れください、聖母がお導きくださいました、わたくしは誰ひとり怖れません、ただキリストを怖れているだけです》と答えました。

それからモスクワに着きました。ツアーリと大貴族たちは、まるで神の御使いでもあるようにわたくしを迎えました、——すべての人がわたくしを歓迎してくれました。わたくしはフォードル・ルティーン<sup>6)</sup>の邸に行きました。彼は部屋からとび出して自らわたくしを迎え、わたくしの祝福を受けました。わたくしたちは尽きぬ話に花を咲かせました、——三日三晩のあいだ、彼はわたくしを家へ帰しませんでした、その後でツアーリにわたくしのことを言上しました。ツアーリは即刻参上して御手に接吻せよと沙汰されました、そして、やさしい言葉で、《お達者ですか、司祭長？ 神はまたわたくしたちを引き合わせてくださいましたね！》とおっしゃいました。それに答えて、わたくしはツアーリの手に接吻し、その手を握って、《国王陛下よ、主は生きておられ、わたくしの魂も生きております、これから先も神の思召し次第でございます！》と申しました。心のやさしいツアーリは溜息をおつきになり、それから用務のために出かけられました。そのほかにもいろいろお言葉がございましたが、長々と語るほどのことはありません、これはみな過ぎ去ったことなのです！ ツアーリは、クレムリン内のある修道院<sup>7)</sup>の僧坊にわたくしを住まわされました、そして、出御の折々、わたくしの宿所のそばをかちでお通りなされる時、よくわたくしに低くおじぎをされて、《わたくしを祝福し、わたくしのことを祈ってください！》と申されました。またあるときは、馬で通りかかれ、帽子をとろうとしてお落としなされたことがございます。また馬車から身を乗りだされて、よくわたくしに

1) オビ河右岸の支流北ソーシヴァ河を合流点から20キロ上った左岸にある（現ハンティ・マンシースク民族区内）。

2) 1663年6月の末。

3) 1662—1663年に、バシキール、タタール、ウィーグル、チュヴァシ、カルムイク、オスチャク、その他のシベリヤ諸種族が、デヴレート・キレイ（クチューム汗の孫で、《シベリヤ汗国》の再興をはかった）の指導の下に大規模の叛乱を起こした。

4) 中部ウラルのスヴェルドロフスク州内。公式にはここがロシアとシベリヤの境界とされていた。

5) 1682死。1659年1月22日から1662年9月16日までヴェルホトゥーリエの知事。ポローフスクのパフヌーチイ僧院の寄進者であった。カムイニンは、後にこの僧院に幽閉されたアヴァクムを訪れ、彼のためにいろいろ尽力している。

6) フォードル・ミハイロヴィチ（1626—1673）。教養の高い政治家で、アレクセイ帝の側近であった。

7) ノヴォヂェヴィーチイ僧院。

## 司祭長アヴァクム自伝

挨拶なされたものでございます。さて、大貴族の面々も、みなツアーリにならって、わたくしに平身低頭し、「司祭長様、わたくしたちを祝福し、わたくしたちのために祈ってください！」と申すのでした。このようなツアーリや大貴族たちを、どうして憐れまいにいられましょうか？ そうですとも、憐れんでやるべきです！ 何とまあ彼らは善良だったことでしょう！ それに今だって、彼らはわたくしを憎んでおりません、わたくしに悪意を抱いているのは悪魔でして、人々はみなわたくしに好意をよせているのです。彼らは、わたくしが彼らと信仰を共にさえすれば、わたくしに望みの地位を与え、ツアーリのざんげ聴問僧にさえしようとしていたのです<sup>1)</sup>。しかし、わたくしは、キリストを得んがために、死に思いをめぐらして、これらすべてを塵あくたのように見なしました、こうしたことは 239ウすべて過ぎゆくものでございますから。

ところで、トボーリスクにおりましたとき<sup>3)</sup>、まどろみの夢の中で神の怖ろしいお告げがございました。(我がために二つに裂かれぬよう心せよ)。わたくしは、ぎょっとして、跳び起き、聖像の御前にひれ伏して、「主よ、新しいやり方で勤行している所には、足をふみ入れたりいたしません、神様！」と申しました。皇女の名の日の祝いに、わたくしは大寺院へ朝拝に行き、彼らに劣らず軽卒なふるまいをしました、教会には知事たちも来ておりました。わたくしは、この町に到着以来、彼らの奉献式のやり方を、内陣の供物壇のかたわらで、二・三度観察し、彼らを非難しました<sup>6)</sup>。しかし、それも慣れっこになって、非難するのを止めてしまいました、——悪魔が針でわたくしを刺したのです。ですから、やさしいキリストは、わたくしを威され、「かほどの苦難をへし後に、汝は我が身を減ぼすことを欲するか？ 我がために二つに裂かれぬよう心せよ！」と仰せられたのです。わたくしは<sup>アベドニヤ</sup> 240オに行くのを止めて、公爵のところ<sup>アベグナ</sup>に食時<sup>7)</sup>に行き、つぶさに一部始終を物語りました。大貴族で心の優しいイワン・アンドレーヴィチ・ヒルコフ公爵は、泣きだしてしまいました。罪業深いわたくしはあれほどの神の御恩を忘れてよいものでしょうか？

まだダウーリヤにおりましたころ、冬のある日、わたくしは滑り止めのついた雪靴をはき、漁場の子供たちのところへ、湖の氷の上を急いでおりました。そのあたりは雪はありませんが、寒気はことこのほか厳しく、氷が厚く張っています、——その厚さは人の身の丈ほどもございました。わたくしは水が飲みたくなりました、堪えがたい喉のかわきにさいなまれて、歩くことができません、しかも湖の真ん中です。水を手に入れることはできません、湖は八露里ほどもあるのです。わたくしは天を仰ぎ、「渇いたイスラエルの民のために荒野で岩から水を湧き出させ給うた主よ、あなたはそのときと 240ウ同じく今このときもいらせられます！ あなたのおはからいによって、わたくしに水を飲ませてください、主よ、我が神よ！」と申しました。ああ、何と悲しいことでしょう！ どう申してよいやら、わたくしにはわかりません、どうかお救しく下さい！ いったいわたくしは何者でしょう？ くたば

1) 当時、ツアーリのざんげ聴問僧は、空席ではなく、スチュファン・ヴォニファーチエフの後任ルキヤン・キリーロフ司祭長であった。ツアーリは、アヴァクムが改革に同意するという条件つきで、ルキヤンの代りに彼を任命する意向を持っていたらしい。

2) ピリピ書、III, 8。

3) 以下に語られている出来事は、アヴァクムがシベリヤからモスクワに帰る途中、トボーリスクに滞在していたころ(1663年の秋と冬)のことである。

4) タチヤーナ・アレクセーエヴナか？ 名の日は1月12日。

5) トボーリスクはシベリヤの中心都市であったので、知事は特に二人置かれていた。当時の正知事はイワン・ヒルコフ、副知事はダニール・ヤーコヴレフ(1664死)。

6) アヴァクムの非難は、奉献式のやり方がニーコンの改革で大幅に変えられたことに向けられている(たとえば7個であった聖餅が5個に減らされた)。

7) 当時のトボーリスクの正知事。

8) シヤクシャ湖(イルゲン湖から約15キロ)。

9) CM. 出エジプト記、XVII, 1-7。

りぞこないの犬です！——ところが、わたくしの目の前で氷がばりばり割れ、湖を横切って左右に裂けました、その後で割れ目は再びふさがりました。大きな氷の堆積<sup>1)</sup>ができました。壇に代わるこの堆積がある間に、わたくしはこのしかるべき祈禱の席に立ちました、それから東の方を向いて、心の底からきざぎざに主の御名を呼びながら、二・三度礼拝いたしました。神は小さい氷穴をわたくしに残してくださいました、わたくしはがばと身を伏せ、心ゆくまで飲みました。わたくしは神に感謝をささげ、泣いて喜びました。その後でこの穴もふさがりました。わたくしは立ち上がり、主に礼拝をすませ、それからまた目指す子供たちのもとへ氷の上を走りだしました。そのほか何かと辛い目をみましたときにも、わたくしにはよくこうしたことがございました。わたくしは、歩いていても、櫓を曳いていても、魚捕りをしていても、森で薪を切っている、何かほかの仕事をしていても、——その時々に応じて、——晩禱、朝拝または定時祈禱のお祈りを唱えました。人中にいて工合の悪いこともございます、宿場にいても、気の合わない連中がいて、わたくしの祈禱をいやがることもございます、また旅の途中でお祈りができないこともございます。そういうときには、わたくしは山かげか森の中に人目を避け、簡単にお勤めをいたします、——大地に頭をつけて叩頭の礼拝をするのです、時には泣くこともございますが、それだけで食事にいたします。気の合った人たちと一緒にいるときは、携帯用の折畳み聖像を台の上に立て、お勤めをいたします、ある人々はわたくしと一緒に祈りをし、ある人々は粥を煮ます。櫓に乗っておりますときは、日曜日ですと修道院の宿坊に立ちより、正規のお勤めをいたしますが、平日ですと櫓の中でお祈りをすませます。日曜日でも、櫓に乗ったままお勤めをしたことがございます。まったく都合が悪いときにも、とにかくほんの少しでもお祈りをつぶやきました。神父エピファニーよ、飢えた肉体がパンを望み、渴いた肉体が水を望むように、魂もまた精神<sup>こころ</sup>の糧<sup>かて</sup>を望みます。人を滅ぼすものは、パンの飢えでもなく、水の渴わきでもありません、人を滅ぼすものは、人間にとっての大きな飢え——神に祈らずに生きること——なのです。

神父よ、わたくしがダウーリヤの地におりましたところ、——もしあなたとキリストの僕<sup>しもべ</sup>がこの話に退屈なさっておられなければ、罪人であるわたくしにもっと話を続けさせてください、——疲労困憊と激しい飢えのために、わたくしは勤行する気力を失い、ほとんど止めておりました。お勤めは、晩禱の聖歌と夜半祈禱、それに第一朝課<sup>3)</sup>だけで、そのほかは一切なくなりました。何のことはありません、家畜のようにあくせく日を過ごし、勤行のことを苦しめながら、お勤めにかかることができません、それほど弱っていたのです。あるとき、わたくしは森に薪を切りに行きました、その留守に、妻と子供たちは、火のそばの地べたに坐り、娘と妻は——二人して泣いておりました。アグラフェーナは、哀れなわたくしのふしあわせな娘は、その頃はまだ幼うございました。わたくしが森から戻ってみますと、——この子がひどく泣いております。舌が金縛りにかかって物が言えません、坐ったまま、母親に向ってわめいています。母親は彼女を見て泣いております。わたくしは一息いれました、

それから、お祈りを唱えながら子供のそばにより、「主の御名によってお前に命じます、わたくしに話さない！ 何でお前は泣いているのだね？」と申しました。彼女は跳びあがっておじぎをし、はっきりこう申しました、「おとうさん、誰だかわかりませんが、光り輝くお方がわたくしの中にいらして、わたくしの舌を押さえられ、おかあさんと話させてくださらなかったのです、それでわたくしは泣いていたのです。そのお方は、「父に今まで通り勤行を行なうように申し伝えなさい、そうすればお前たちはみんなでもたロシヤに行けるのです、しかし、彼が勤行を行なわなければ、これについては彼自身も考えていようが、ここでみんな死んでしまいます、彼もお前たちと一緒に死んでしまうのです」と申されました。そのほかにもまだいくつのお告げがこのとき彼女にありました、わたくしたち

1) CM. 206オの註。

2) CM. アモス書、VIII, 11。

3) 午前7—9時に行う勤行。

司祭長アヴァクム自伝

に帰還の命令がとどくであろうとか、ロシヤで大勢の昔の友人たちに会えるだろうなどいうことでしたが、——それがことごとく現実になりました。また、晩禱と朝拝を行なうようパンコーフに申し伝え 243オよのお告げもございました、そうすれば、神が好天を恵まれ、穀物が実るといのでございます、——そのころはひっきりなしに雨が降りつづいておりました。僅かな場所に大麦が播いておりました、聖ペテロ祭の<sup>1)</sup>一・二日前に——すぐ大きくなったものが、雨で腐りそうになりました。わたくしは晩禱と朝拝のことを彼に話しました、彼も言われた通りにしました。神は好天をお恵みになられ、穀物はすぐ実りました。何たる奇蹟でしょうか！ 遅く播いたのに、早く実ったのです。ところが、この哀れな男は、神の御業に裏切りをするようになりました。明くる年、たくさん大麦が播かれました。しかし、とほうもない大雨が降って、河が氾濫し、畑は水浸<sup>びた</sup>しになり、何もかも洗い流され、わたくし 243ウたちの住居も押し流されてしまいました。これほどの大水はここではかつてなかったことです、——土民たちも驚いておりました。おわかりでしょうか、彼が神の御業を侮り、邪道<sup>ストラノイ</sup>に足をふみ入れたので、神も異常な怒りを彼にあらわされたのです！ 彼は、——子供は腹がへったので、泣いていたのさ！——と言って、後から最初のお告げを嘲笑したのです。しかし、それ以来、わたくしは勤行に精をだし、今日までどうにか欠かさず続けております。この話はもう十分です、前の話にもどりましょう。わたくしたちは、これらすべてを胸に刻みつけ、忘れぬように努め、神の御業を軽んじたり、このはかない現世の誘惑に見変えたりしてはなりません。 244オ

さて、モスクワにおりましたときの話にもどりましょう。彼らは、わたくしが妥協しないことに気がつきました。ツアーリは、ロジオーン・ストレンニョーフ<sup>2)</sup>にわたくしの説得を命じ、わたくしを沈黙させようとした。わたくしはツアーリを満足させました、何といても、彼は神によって帝位につけられた方であり、わたくしに好意を持っておられました、——わたくしは彼が少しずつ良くなることを期待していました。聖シメオン祭の日<sup>3)</sup>に、聖書校訂のためわたくしを印刷局に任命するという約束<sup>4)</sup>がございました。わたくしはたいへん喜びました、——ツアーリのざんげ聴問僧になるよりも、この方がずっとわたくしの気に入りました。ツアーリはわたくしに十ルーブル届けてくださいました、王妃も十ルーブル、<sup>5)</sup>ざんげ聴問僧ルキヤンも十ルーブル、<sup>6)</sup>ロジオーン・ストレンニョーフも十ルーブルくれました。またわたくしたちの古い友人フォードル・ルティーンチェフは、自分の出納係り 244ウに命じて、わたくしの帽子の中に六十ルーブル入れさせました。ほかの人たちについては申すまでもございませぬ、みんながそれぞれいろいろな物を持ってくるのです！ わたくしは、愛すべきフェオドーシャ・プロコフイエヴナ・モローゾワの邸で日を送り、どこへも出ないでおりました、と申しますのは、彼女はわたくしの教子でしたし、彼女の妹で公爵夫人エヴドキーヤ・プロコフイエヴナもわたくしの教子でございましたから。わたくしの愛する者たち、キリストの殉教者よ！ またわたくしは、今は亡きアンナ・ペトローヴナ・ミロスラーフスカヤの邸にも常に出入りしておりました。<sup>7)</sup>

1) 6月29日。

2) ロジオーン・マトヴェーヴィチ(1667死)。当時のシベリヤ庁長官で宮内官。アヴァクムに好意を持っていた。

3) 9月1日。

4) このような約束がなされたかどうかは、すこぶる疑わしい。なぜなら、アヴァクムは聖書の改訂に公然と反対していたから。

5) アレクセイ帝の妃マリヤ・イリーニナ(1669.3.3死)。最後まで旧教徒たちに熱烈な同情を持ち続けた(см. 248ウ)。

6) 司祭長ルキヤン・キリーロフ。1657年から1666年までツアーリのざんげ聴問僧。

7) フェオドーシャ・モローゾワ——上級大貴族グレーブ・イワーノヴィチ・モローゾフの妻。この頃は寡婦になっていた。エヴドキーヤ・ウルソワ——アレクセイ帝の側近ピョートル・セミョーノヴィチ・ウルソフの妻。この姉妹はソコヴニン家の出で、ルティーンチェフの親戚、ツアーリの姻戚に当たる。熱烈な旧教信者で、アヴァクムの帰依者であった。いかなる説得、迫害、監禁にも屈しなかった。最後には、ボローフスク(現カルーガ州内)の土牢で死んだ(ウルソワは1675.9.11、モローゾワは同年11.2)。アンナ・ミロスラーフスカヤ——ミロスラーフスキ家の出である王妃マリヤ・イリーニナの親戚。ミロスラーフスキ家の人々は、熱心なアヴァクムの帰依者であった。

フォードル・ルティーンチェフの邸には、背教者どもをやりこめによく足を運びました。

こうして半年ばかり過ぎました、しかし、教会のことが少しもよくなりな<sup>1)</sup>いばかりか、かえって混乱がひどくな<sup>1)</sup>ってゆ<sup>1)</sup>くのがわかりました。わたくしは沈黙を破りました、ツアーリ宛ての長い手紙の中に、昔ながらの信仰を回復し、わたくしたちみんなの母である聖なる教会を異端から守り、悪党で異端者、狼で背教者であるニーコンの代わりに、<sup>2)</sup>正教の牧者を総主教の座につけてくださいと書きしるしました。<sup>3)</sup>しかし、この請願書ができあがり、<sup>4)</sup>わたくしはひどい病気にかかりました。わたくしは、教子の痴愚の行者フォードルをつかわして、通行途上のツアーリにこの請願を届けさせることにしました。このフォードルは、背教者どもによってその後メゼンで絞首刑にされました。さて、フォードルは、請願を手にして大胆にツアーリの車に近づきました。ツアーリは、請願をたずさえている彼を王宮正面の階段の下に閉じこめさせました、——彼はこの請願がわたくしからのものであることを御存じなかったのです。後で彼から請願書を取り上げられ、釈放をお命じになりました。<sup>5)</sup>今は亡きこのフォードルは、しばらくわたくしのところにおりましたが、教会で再びツアーリの前にあらわれ、痴愚の行をはじめました、ツアーリは立腹されて、彼をチュードフ僧院に押しこめるよう命ぜられました。僧院長のパーヴェルは、そこで彼に鎖をかけました。ところが、神の御意<sup>6)</sup>によって、この鎖はみんなの<sup>7)</sup>見ている前でばらばらと彼の足下にくずれ落ちました。故人となった愛すべきフォードルは、この僧院のパン焼場で、パンを取り出したばかりの熱い炉の中にもぐりこみ、裸の尻で炉床に坐り、パン屑を掻き集めて食べました。それで修道僧たちは震えあがり、僧院長パーヴェルに報告しました。彼は今は府主教になっています。<sup>8)</sup>パーヴェルはこのことをツアーリに言上しました。ツアーリは僧院に<sup>9)</sup>出向かれ、丁重に彼を釈放するようお命じになりました。フォードルはまたわたくしのところに戻ってきました。

このときから、ツアーリはわたくしによい顔をされなくなりました、わたくしが沈黙を破ったのがお気に召さなかったのです。黙っていれば彼のお気に召すのですが、わたくしはもうこれ以上がま<sup>10)</sup>んがなりません。高僧たちは牡山羊のようにわたくしに襲いかかり、再びわたくしをモスクワから追放しようとたくらみ、それと申しますのも、大勢のキリスト教徒が、わたくしのところに来て<sup>11)</sup>真実を知り、彼らのよこしまな礼拝式に行かなくなったからでございます。わたくしはツアーリに叱責されました、「あなたが教会をからっぽにしたので、高僧たちが苦情を申している、もう一度流刑地に行くがよい」というのです。大貴族ピョートル・ミハイロヴィチ・サルティコフが、これをわたくしに伝えました。こうしてわたくしはメゼンに送られました。<sup>12)</sup>大勢の善良な人々がキリストの御名において、いろいろな贈物をしてくれましたが、全部そこに置いてきました。連れてゆか

1) マタイ伝、XXVII, 24。

2) ニーコンは1658年に勝手に総主教の座を去った（ツアーリに対し教権の優位を主張して、不興をこうむったため）、しかし、種々の事情から、1667年ヨアサフが総主教になるまでは、公式にはこの位を剝奪されていなかった。

3) この請願書は現存しない。1664年8月22日以前に書かれたと思われる（CM、下記の註5）。

4) アヴァクムは、シベリヤからモスクワに帰る途中、ヴェリーキー・ウースチュグでフォードルに会った。以後フォードルはアヴァクムの教子となり、後に同志ルカーと共に、1670年3月メゼンで絞首刑にされた。

5) チュードフ僧院長パーヴェル（1675死）は、1664年8月22日、クルチーツキイの府主教に任ぜられた。従って、ここで述べられている事件は、それ以前に起きたものと推定される。

6) この頃アヴァクムは、ザモスクワレーチエのソーフィヤ教会に勤めていた。

7) 当時の小ロシア庁長官（1690死）。

8) モスクワ出発は1664年8月29日。最初の流刑予定地はブストゼールスクであったが、途中のホルモゴールイからツアーリに請願書を送り、その結果メゼンに変更された。メゼン着は同年12月29日。

## 司祭長アヴァクム自伝

れましたのは、妻と子供ら<sup>1)</sup>、それに召使いだちだけでした。わたくしは、通る町々で、またも神の僕<sup>しもべ</sup>たちに教えを説き、奴らを、あの<sup>まだ</sup>斑らぶちの獣どもを非難しました。こうしてメゼーンにつきました。

一年半とめおかれましてから、わたくしだけモスクワに呼び戻されました<sup>2)</sup>、しかし、二人の息子—— 246ウイワンとプロコーピイ——がわたくしと一緒にいくことになり、司祭長夫人とその他の者は全部メゼーンに残りました。モスクワに連れてこられましてから、監禁の目的でパフヌーチイ僧院<sup>3)</sup>に送られました。ここに書状が届けられました、——言うてくることは毎度同じで、「あなたはいつまでわたくしたちを苦しめる気ですか？ われわれの仲間になりなさい、アヴァクムさん！」というのです。わたくしは、悪魔を拒否するように奴らをはねつけました、それでも彼らはしつこくつきまといまいます！そこで、わたくしは罵倒の手紙を長々としたため<sup>4)</sup>、ヤロスラーヴリの補祭で総主教事務所の書記をしていたクジマーに持たせて、彼らのところに届けさせました。わたくしはこのクジマーがどういう人間か知りません、彼は人前ではわたくしを説得しておりましたが<sup>5)</sup>、かげではわたくしを支持し、「司祭長よ、昔ながらの信仰を捨てないでください、最後まで耐え忍ばれば、あなたはキリストのおそばで偉いお方になれるでしょう、わたくしたちが破滅しようとして、そんなことは気にしなさんな！」と申ししていました。わたくしは、それに答えて、キリストに帰りなさいと説いてやりました。彼は、「だめなのです、ニーコンにがんじがらめにされています！」と答えました。簡単に申せば、彼はニーコンのためにキリストを棄て、可哀想にもう立ち直ることができないのです。わたくしは泣いてこの不幸な男を祝福してやりました。わたくしが彼のためにしてやれることは、これだけでした。彼の身の上がどうなるかは、神にお任せするほかありません。

さて、鎖をかけられたまま十週間パフヌーチイ僧院に幽閉されましてから、わたくしは再びモスクワに連行されました。〔B: 彼らは疲れはてたわたくしを老いぼれ馬に乗せて連れてゆきました、護衛がうしろについて——びびり馬に鞭の雨を降らせます。あるときは、馬がぬかるみにころんでひっくりかえり、わたくしは馬の頭ごしにもんどりうって転落しました。一日に九十露里もぶっ飛ばし、半死半生ののいでモスクワにつきました。(39ウ)〕高僧たちは礼拝堂<sup>6)</sup>でわたくしと論争してから、わたくしを大聖堂<sup>7)</sup>に連れてゆき、奉献式の後で、わたくしと補祭<sup>8)</sup>フォードルの髪を切り落とし、次いでわたくしたちを呪咀<sup>9)</sup>しました。わたくしは反対に彼らを呪咀してやりました。この礼拝式のときの騒 247ウぎときたら、たいへんなものでした！その後、総主教の館にしばらく留置されましてから、夜中に

1) この頃アヴァクムには6人の子供がいた。3人の息子——イワン、プロコーピイ、アフアナーシイ。3人の娘——アグリツピナ（アグラフェーナ）、アキリーナ、クセーニヤ。

2) 1666年3月1日。

3) モスクワから約150キロ南のポロフスク市の近郊にある。アヴァクムは1666年3月9日から5月12日までここに閉じこめられた。

4) この手紙は現存しない。

5) クジマーが説得に当たったのは、1666年9月12日と1667年の1月30日。いずれも、アヴァクムの二度目のパフヌーチイ僧院幽閉中のこと。

6) **cm. 204** オの註。

7) ウスベンスキイ寺院。

8) フォードル・イワノフ——モスクワのヴラゴヴェンチエーンスキイ僧院の補祭。初期分離派の有力活動家の一人。1666年の宗教会議で、アヴァクムと共に破門された。その後ウグレジャのニコラ僧院に閉じこめられ、一時いつわりのざんげをして再審理を受け、ボクローフスキ僧院に移された。後にこの僧院から脱走し、再び捕えられた。1667年8月27日、舌を切られ、ブストゼールスクに流された。4月ストゼールスクに着き、アヴァクムと合流した。二人は教義の問題で意見が合わず、後に不和になった。

9) この破門は、1666年5月13日。

わたくしたちはウグレシャのニコラ僧院に連れてゆかれました<sup>1)</sup>。神の敵たちはわたくしの髯まで切り落としました。どうしてこうしないはずがありませんか？ 奴らは狼です、羊を憐れんだりするものですか！ 奴らは犬のようにわたくしの髪を引っこ抜き、ポーランド人みたいに前髪だけ額のところに残しました。彼らは、人目につかないように、わざと道路をさけ、——沼地や湿地を通して——わたくしを連れてゆきました。彼らは自分たちが愚かなことをしているのを承知しながら、悪から手を引こうとはしませんでした。悪魔が彼らの心を曇らせてしまったのです、——どうして彼らを買めることができますか！ もし彼らがやらなかったら、ほかの連中がやったでしょう。《つまづきは必ず来たらん<sup>2)</sup>》と福音書に書かれておりますが、その時が到来したのです。また福音書をお書きになった別のお方は、《つまづきは必ず来たらざるを得ず、されどつまづきを来たらする人はわざわいな<sup>3)</sup>るかな》と申されています。さあ、わたくしのお話を聞きなされる方よ、わたくしたちの不幸は避けがたく、それを逃れることはできません！ 神がつまづきを黙認なされるのは、選ばれた人々が現われ、火に焼かれ、灰にされ、その試練があなたたちの前に示されるためなのです。悪魔が聖なるロシアを神から願い受けたのは、この国を殉教の血で紅に染めるためなのです。悪魔よ、お前はいいことを思いついた、わたくしたちも——やさしいキリストのために喜んで苦しみを受けます！

わたくしはニコラ僧院の寒い一室に十七週間閉じこめられました<sup>4)</sup>。神はここにわたくしを訪ねてくださいました、これについてはツアーリに宛てたわたくしの手紙をお読みになればわかります。ツアーリも僧院においでになりました。彼はわたくしの牢のそばを歩きつ戻りつしておられましたが、溜息をなさってまた僧院を出てゆかれました。こうしてみると、彼はわたくしをふびんに思っていたらたようでございます、しかし、こうなるのが神の思召しだったので。わたくしが破門になりましたとき、宮中ではツアーリと今は亡き王妃との間に大衝突がありました。そのとき、やさしい王妃はわたくしたちの肩を持ってくださいました、また後には、わたくしのために懇願して、刑罰を免れさせてくださいました。これについては長々と話す必要はありません。どうかあの人たちに神のお赦しがありますように！ わたくしは自分の受難の責任を彼らのせいにしていません、来世でもそういたします。わたくしのしなければならないことは、彼らのために、生きておられる方と亡くなられた方のために祈ってあげることです。わたくしたちの仲をさいたのは悪魔です、あの人たちはいつもわたくしに好意を持っておりました。こんな話はもうたくさんです！ 可哀想なイワン・ヴォロティンスキイ公爵も、ツアーリのいないときにここへお祈りにやって来ました。彼は牢屋のわたくしに会わせてくれと頼みました、しかし、この不幸な人は通してもらえませんでした。わたくしはただ小窓ごしにその姿をながめ、彼のために泣きました。愛すべき公爵よ！ 彼はキリストのみなし子で、神を怖れております、キリストは彼を見捨てたりなさいません！ 彼は常にキリストの僕<sup>しもべ</sup>で、わたくしたちの味方です。また大貴族たちも、みなわたくしたちに同情しております、悪意を抱いているのは悪魔

1) 1666年5月15日。ニコラ僧院は、モスクワの東南15キロ、モスクワ河の左岸にあった。アヴァクムは1666年9月3日までここに幽閉された。

2) マタイ伝、XVIII, 7。

3) ルカ伝、XVII, 1。

4) 1666年5月15日——9月3日。その後再びパフヌーチイ僧院に移された（9月5日）。

5) 1669年にプストゼールスクからアレクセイ帝に出した第5の請願書。

6) マリヤ・イリーニシナ（1625—1669）。ミロスラーフスキイ家の出。アレクセイ帝の最初の妃。ミロスラーフスキイ家の人々は熱心なアヴァクムの支持者であった。

7) プストゼールスク流刑前、1667年8月27日、仲間のエピファニー、ラザーリ、フォードルの三人は舌切りの刑を受けたが、アヴァクムはこれを免れた。

8) アヴァクムが《自伝》の第一稿を書いた時期（1672—73）には、アレクセイ帝（1676死）はまだ存命中で、王妃（1669死）は既に故人となっていた。

9) イワン・アレクセーエヴィチ（1679死）。ツアーリの母方の従兄弟。

## 司祭長アヴァクム自伝

だけです。もしキリストがこれをお許しになられたのであれば、何ともいたしかたございません。愛すべきイワン・ホヴァンスキイ公爵<sup>1)</sup>は、イサイヤが火あぶりにされましたとき、鞭で打たれました。また背教者どもは、フェオドーシャ・モローゾフ夫人を零落させ、彼女の息子を殺し、そして今彼女を苦しめております<sup>3)</sup>。その妹のエヴドキーヤは、鞭で打たれ、子供たちとは引きはなされ、夫とも離別<sup>4)</sup>させられました。しかも夫のビョートル・ウルソフ公爵はほかの女と結婚させられました。まったくどうしたらよいのでしょうか？ しかし、この愛する者たちのことはほっておいてもかまいません！ 彼女たちは、苦しみをなめて、天上の花罌のもとにまいるのです。神は、ああなさったりこうなったりして、彼女たちにこのはかない人生を送らせなさいましょう、そして、正義の太陽であり、光であり、わたくしたちの希望であります天上の花罌は、彼らを御自分の御殿に入れてくださるでしょう！ では前の話にもどりましょう。

その後、彼らは再びわたくしをバフヌーチイ僧院へ連れてゆき、そこで暗い一室に閉じこめ、鎖をかけたまま一年ほど拘禁しました<sup>5)</sup>。ここの衣食住係りニコジームは、はじめのうちわたくしに親切にしてくれました。〔B:それも最初の年のことで、年が明けるとこの哀れな男は残酷になりました。彼はもう少しでわたくしを窒息させるところでした、窓や戸をふさいでしまったので、煙の行き場がないのです、——わたくしは牢にいるよりももっと息苦しい思いをしました、ずっと前からの大便や小便がそっくりそのままになっている所で、寝起きをしたり食事をするのです、その上たばこをのみにこられるので、<sup>6)</sup>又しても息がつまりそうになるのです。善良な人でこの僧院に寄進をしていましたわたくしの友人イワン・ボグダーノヴィチ・カムニニン<sup>7)</sup>が、わたくしを訪ねてきました。彼は衣食住係りをどなりつけ、窓枠にはめた樹の皮その他を独断で残らずぶちこわしました、こうしてそれ以来わたくしに窓と通風孔ができたのです。(41オ—41ウ)] さて後になって、ガザの府主教<sup>8)</sup>のところで六十 250オプードのたばこ、ロシヤ・ギター、僧院で遊興に供されたその他の禁制品が押収されましたが、この哀れな衣食住係りはそのたばこをのんでいたようです。罪なことを申しました、お赦してください、——これはわたくしの知ったことではありません、彼自身の問題です、立つのも倒れるのもその主人次第<sup>9)</sup>です。わたくしはただついでに申し上げたまでです。ああいう連中が彼らの間で人気のある神学者先生なのです。復活祭を祝うために、わたくしはこの衣食住係りニコジームに休息の許しを乞い、戸をあけてしきいの上に坐らせてくれと頼みました。彼はわたくしに悪態をつき、よい気晴らしとばかり無慈悲にはねつけました。それから、彼は僧房に戻って、どっと病みつきました。人々は彼に終油を注ぎ、聖さんを授けました、彼は息もたえだえのありさまでした。それは復活祭の月曜のことでした。

- 1) イワン・イワノヴィチ (1645—1701)。旧教信者。最後に牢死した。
- 2) 大貴族ビョートル・サルティコフの召使い。熱烈な旧教信者で火刑に処された。
- 3) イワン・グレーボヴィチ・モローゾフ——モローゾフの一人息子。母と別れ、悲しみの余り病気になる、1671年の末(または1672年の初め)に死んだ。彼の死後モローゾフ家の財産は没収された。モローゾフは、1671年11月16日に逮捕され、ペチェールスキ修道院に幽閉された。
- 4) エヴドキーヤも姉と同じ日に逮捕され、アレクセーエフスキ修道院に幽閉された。ウルソフは、妻の逮捕後、ダニール・ストローガノフの娘ステファアーニヤと再婚した。
- 5) アヴァクムは、1666年9月5日から1667年4月30日まで再度バフヌーチイ僧院に幽閉された。従って実際は7ヶ月足らず。ここで1年ほどと書いているのは、その前1666年3月9日に最初にここに入れられた時からの計算と思われる。
- 6) 当時喫煙は嚴重に禁止されていた。
- 7) CM. 238 オの註。
- 8) パイーシイ・リガリード (1610—1678)。ギリシヤ人。1662年2月12日にモスクワに至り、巧みに高い聖職の地位をかちとり、ツァーリの信任を得た。教養は高かったが、蓄財のためには手段を選ばなかった。
- 9) CM. ロマ書、XIV, 4.

250ウ 火曜日にかけての夜、わたくしの姿をした人が、香炉を手にし、輝かしい衣をまとい、彼の前にあらわれ、そして、彼のために香を焚き、その手を取って立たせました、彼はすっかり元気になりました。その夜、彼は従者をつれて牢のわたくしを訪れました、——彼は道すがら、《かかる獄こそあれ、——この僧院はさいわいなるかな！ 内にかかる受難者こそあれ、——この獄はさいわいなるかな！ このいましめの鎖もまたさいわいなるかな！》と申しました。彼はわたくしの前に倒れ伏し、鎖を掴んで申しました、《お赦してください、どうか赦してください！ わたくしは神に対し、あなたの前に罪を犯しました、あなたをはずかしめました、——そのために神がわたくしをお罰しになられたのです》。わたくしは、《なんですって？ ちゃんと説明してみなさい》と申しました。すると、彼は、

251オ 《あなた御自身が、ここにいらっしゃって香を焚かれ、わたくしを立たせてくださったじゃありませんか、——どうして知らないふりをなさるのですか！》と言いました。そばにおりました従者も、《神父様、わたくしがあなたの御手をとって牢からお連れ申し、あなたにお願いいたしました、それからあなたはここにお戻りになられたのですよ》と言いました。わたくしはこの秘密を人にもらすなど彼に命じました。彼は、今後キリストのためにどう生きたらよいか、わたくしに助言を求め、《一切を捨てて荒野におもむいたものでしょうか？》とたずねました。わたくしは彼をさとし、衣食住係りの職務を捨てなくともよい、ただし、内証でもよいから、教父たちの古い伝統を守れと言いつけました。彼はおじぎをして、自室に戻りました。明るる朝、食事のときに、彼は仲間の僧全部にこの話を

251ウ しました。人々はおおびらに堂々とわたくしのところに来て、祝福と祈禱を乞いました。わたくしは聖書によって彼らを教え、神の御言葉によって彼らの心を癒やしてやりました。そのころわたくしの敵だった人たちも、その場でわたくしと仲直りしました。ああ！ いつわたくしはこのはかない浮世を去るのでしょうか？ 聖書には、《すべての人、汝らをはめなば、汝らわざわいな<sup>2)</sup>》と書かれております。死に至るまでいかに生くべきか、まったくわたくしはわかっておりません。善行は何ひとつしておりませんに、神はわたくしを称讃なさいました！ 神だけがこれを知っておられます、——すべては神の御意によるのです。

さて、ここに、絞首刑にされて今は故人となったフォードルが、わたくしの子供たちをつれて、こっそり会いに来ました。彼はわたくしに助言を求めました、《今まで通りシャツ一枚で暮らしたものでしょうか、それとも服を着たものでしょうか？ 異端者どもはわたくしを探しまわり、わたくしを殺そうとしています。わたくしはリャザーンの大主教の邸に監禁されておりました。あのイラリオーン<sup>3)</sup>はひどくわたくしを苦しめました、——鞭で打たない日はめったになく、悪魔の新しい機密をわたくしに強制し、鎖をかけて閉じこめていました。わたくしは精も魂もつきはてました。ある夜、わたくしは泣きながらお祈りをし、——主よ！ あなたがわたくしを救ってくださらなければ、わたくしは彼らに汚されて破滅してしまいます。そうしたらあなたはわたくしをどうなさるおつもりですか？ ——と申しました》。彼はおいおい泣きながら話しました。《ところが神父様、鎖が突然がらがら音をたててわたくしの体から崩れ落ち、扉はかんぬきがはずれてひとりでに開いたのです。わたくしは神の御前にひれ伏しましてから、外へ出ました。門のところに来てみますと、——門も開いています！

252ウ わたくしは大道を通り、まっすぐモスクワに向かいました！ 夜が白みかけるころ、——騎馬の追っ手がやってきます！ わたくしのそばを三騎で駆け抜けました、——しかし、彼らはわたくしに気づきませんでした。わたくしはキリストを心に頼み、先へ進んでゆきました。まもなく彼らは戻ってきて、さかんにわたくしの悪口を言いました、——ずらかりやがったな、ちくしょうめが、どこで奴を

1) cm. ルカ伝、XV, 18。

2) ルカ伝、VI, 26。

3) イラリオーン (1673年6月6日死)。旧教徒の猛烈な迫害者。1657年にリャザーンの大主教となり、1669年6月13日府主教に昇進した。

## 司祭長アヴァクム自伝

つかまえてやろうか？——しかし、今度もわたくしに気づかずに通り過ぎました。こうして今、わたくしはあなたのところに相談に来たのです。もう一度あそこへ苦しみに行ったものでしょうか、それとも服を着てモスクワで暮らしたものでしょうか？」——罪人でありますわたくしは、彼に服を身につけるよう、〔B: ひそかに人中で暮らすよう(43オ)〕命じました。しかし、彼は異端者どもの手から逃れられませんでしたが、——彼らはメゼーンで彼を絞首刑にしました。<sup>1)</sup>彼とルカー・ラヴレーンチェ 253オ ヴィチに永遠の瞑福がありますように！ 愛するわたくしの教子たち、彼らはキリストのために苦しんだのです！ 彼らのために神に栄光がありますように！

このフォードルはまことに精進堅固でございました、昼は痴愚の行をつとめ、夜は夜もすがら泣いて祈禱しておりました。わたくしもりっぱな人をたくさん存じておりますが、このような苦行者は見たことがありません！ 彼はモスクワで半年ほどわたくしのところにおりました、——わたくしはまだ健康がすぐれませんでした、——わたくしたちは二人で奥の部屋におりました。彼はせいぜい一・二時間横になるだけで、それから起きて千回の礼拝をいたします、そうして、床に坐るか、時には立ったまままで、三時間ほど泣くのです。一方、わたくしは寝たきりで——ときには眠り、ときには病気で苦しんでおりました。彼はぞんぶん泣いてから、わたくしのそばに来て、「ねえ司祭長、あんたはいつまで寝ているつもりなんですか、考えてもごらんなさい、——あんたは僧侶なんですよ！ 恥ずかしくないんですか？」と申すのです。わたくしは体が思うようになりません、彼はわたくしを起こそうとして、「さあ、立ちなさい、神父さん、何とかして起きるんですよ！」と申します。そうしてわたくしの体を揺すぶります。彼はわたくしに坐ったまま祈禱を唱えさせ、自分はわたくしに代わって礼拝をするのです。彼こそわたくしの心の友でした！ この愛すべき友がひどい過労のために病気になったことがございます、あるとき彼の体から三アルシンのさなだ虫が出ました、またあるときは五アルシンののが出てきました。彼は体が弱っておりましたが、腸の長さを測っていました、その様子はまったくおかしくもあり、悲しくもありました！ ウースチュグ<sup>2)</sup>で、五年の間、彼はシャツ一枚で歩きまわり、254オ たえずはだして寒気にさらされておりました。わたくしは自分の目でそれを見たのです。わたくしがシベリヤから帰る途中、ここで彼はわたくしの教子になりました。教会の高棧敷で、——彼は祈禱のためによくここへやって来ましたが、——「神父さん、寒いところから暖いところへ休みに来ますのは、なかなか楽じゃありません」と申しました、——そして、まるでキャバツのように足を煉瓦にごつんごつんぶつけるのです！ しかし、明るる朝には痛みがとれているのです。そのころ彼は僧房内に新版の詩篇を持っておりました、——彼は新しいことをまだよく知っていませんでした、わたくしは新しい書物について詳しく彼に話してやりました。彼は詩篇を引っ掴むと、すぐさま暖炉の中にほうりこみ、一切の改革を呪いました。キリストに対する彼の信仰は、まことに熱烈でございました！ 何 254ウ で多言を要しましょう？——彼の信仰は、はじめからおわりまで少しも変わりませんでした！ 彼の精進ぶりは、罪深いわたくしなどとはわけが違い、口先だけのものではありませんでした。だからこそ、彼はりっぱにみまかったのです。〔B: 彼がわたくしに話したところによりますと、彼の父はノーヴゴロドで収納係りをつとめ、たいへん金持で、名を同じくフォードルと申しました。彼はメゼーンの生まれで、妻や叔父や親戚がみんなメゼーンにおりました。神の思召しによって、彼はメゼーンの親類縁者のもとで背教者どもに絞首刑にされました。わたくしは、痴愚の行者になりますと神に約束いたしました、しかし、この誓いを破り、そのまま海路メゼーンから町へ船出しました、ところがわたくしたちの船は嵐におそわれました。どうして海に落ちたのか憶えがありません、しかし、両の足が輪差に引っかかりました、それで頭は水の中に、足を宙に浮かせて、長いことぶら下がっておりました。

1) cm. 260 オ。

2) ヴェリーキイ・ウースチュグ。——スーホナ河左岸に位し、シベリヤ往還の要地(ヴォーログダ州)。

そのとき例の誓いをふと思い出しました、もし神が溺れるのを助けてくださったら、約束をゆめたがうまいと思いました。よくわかりませんが、誰か強い方が——水の中からわたくしを甲板に引き上げてくださいました。そのときからわたくしは放浪の旅をはじめたのです。神の御加護によりまして、彼は故郷に帰りましてからも、禁欲を守って一生を過ごしました。彼はしばしば欲望との闘いに直面しましたが、神はいつも彼を守ってくださいました。彼のために神に栄光がありますように！ 彼はキリストの信仰のために死んだのです！ 結構なことです、彼は自分の精進の大業を成し遂げました。しかし、わたくしたちはどうして港に行きつくのでしょうか？ わたくしたちはまだはるか沖にいます、岸は見えません、友の後を追ってちゃんと港に行きつくためには、一生懸命漕がなければなりません。神父よ、眠り過ぎないようにいたしましょう、悪魔がわたくしたちの牢のまわりを人もなげにうろついています、奴はわたくしたちをものにしがっているのです、しかし、キリストは強くいらせられます、わたくしたちを見捨てたりなさいません。わたくしは悪魔を怖れていません、わたくしが怖れておりますのは、創り主であり、造物主であり、神であられる我が主でございます。悪魔なぞ——何が珍らしいものか？ 奴を怖れることなんかありません！ わたくしたちは神を恐れ、その掟を守ってゆけばよいのです、そうすれば、キリストと一緒につつがなく港に行きつけるのです。(43ウー44ウ) 愛すべきアフナー<sup>1)</sup>シイもりっばな人でした、——彼もやはりわたくしの教子で、修道僧の名をアヴラーミと申しました。彼はモスクワで背教者どものために火で焼かれました、そして、おいしいパンとして聖三位一体の神に捧げられました。修道僧になる前から、彼はシャツ一枚で冬も夏もはだしで放浪しておりました。ただ彼は、フォードルにくらべると性質が少々おとなしく、精進ぶりもやや及びませんでした。彼は泣くのが非常に好きで、歩いているときでも泣いていました。

255オ 誰と話をしましても、——彼の声は、流れる涙のように物静かでなめらかでした。フォードルは、こと神に関してはたいへん熱心で、心魂をくだいておりました、彼は嘘偽の教を粉砕し摘発するためにいつも骨身をけずっておりました。彼らのことはほっておきましょう！ 彼らは、生きていたときと同じように、我らが主イエス・キリストのために死んだのです。

わたくしは自分の苦難につきましてあなたに話の続きをいたしましょう。わたくしはパフヌーチイ僧院からモスクワに連行され、僧院付属の宿坊に入れられました、そして、何度もチュードフ僧院に引きたてられました、〔B: 高僧どもとわたくしは犬の咬み合いさながらに激論をたたかわせました。〕<sup>3)</sup> (45オ) それから、全教会の総主教たちの前に引き出されました、<sup>4)</sup> そこには我が国のお偉い坊主どもも、顔をそろえて狐のように坐っていました、——わたくしは聖書を引いて総主教たちと大いに議論しました。神がわたくしの罪深い口をひらきたまい、<sup>5)</sup> キリストが彼らをはるかかきめられました！ 彼らはわたくしに向かって最後の言葉を吐きました、《なぜお前は強情をはるのか？ すべてのわれわれのキリスト教会——セルビアの民も、アルバニアの民も、ルーマニアの民も、ローマの民も、ポーランドの民も——みな三本の指で十字を切っている、強情をはって五本の指で十字を切っているのはお前ひとりだ！——とんでもないことだ！》そこで、キリストの御名においてわたくしはこう答えてやり

255ウ

1) アヴァクムの忠実な教子で、初期分離派の有力活動家の一人。1670年2月6日に捕えられ、破門された。1672年の春、モスクワで火刑に処された。

2) 1667年4月30日。この宿坊は、パフヌーチイ僧院に付属し、パソリスカヤ街（現ウラジミロフ街、5）にあった。

3) アヴァクムがチュードフ僧院に引きたてられたのは、1667年5月3日と11日。チュードフ僧院長ヨアキムとヤロスラーヴリのスパースキイ僧院長セルゲイがアヴァクムの説得に当たった。

4) 総主教たち——アンチオキヤのマカーリイ、アレクサンドリヤのパイーシイ——は1666年11月2日にモスクワに到着した。同年12月1日から翌年にかけて全教会の宗教会議が開かれた。この会議でニーコンは非難され、ヨアサフが新たに総主教となった。アヴァクムが召喚されたのは1667年6月17日。

5) CM. 詩篇、L, 16。

ました、《全教会の諸先生方よ！ ローマはとうの昔に倒れ、立ち上がれずに横たわっています<sup>1)</sup>。ポーランド人はローマと共に滅び、永久にキリスト教徒の敵になりました。またお前さんたちの正教も、トルコのマホメットの圧迫を受けて不純なものになりました、——しかし、何も驚くにはあたりません、あんた方は腑抜けになったんですから。これからはわたくしたちの国に教わりにいらっしやい、ありがたいことに、こちらは独立自主の国ですからね。我がロシアでは、背教者ニーコンが現われる前は、信心深い公やツァーリたちのもとで、正教は常に清純無垢であり、教会は平穏無事でございました。256オ  
た。狼のニーコンが悪魔と一緒に五本の指で十字を切らせるようにしました、しかし、我が国のりっぱな聖職者たちは、五本の指で十字を切り、同じく五本の指で祝福し、わたくしたちの聖なる教父たち——アンチオキヤのメレチウス、キルスの聖テオドレトス司祭、ダマスクスのベテロ、マクシム・グレーク<sup>3)</sup>——の伝統に従っておりました。さらにはまた、イワン四世の御世にモスクワで開かれました全体宗教会議は、十字ならびに祝福の指の組み方を定め、メレチウスその他の昔の聖者たちが教えられた通りにせよと命じております。このときイワン四世治下のこの会議に、ロシアの聖者では、256ウ  
十字刺繍着用者<sup>5)</sup>で、奇蹟をあらわされたカザンのグーリイとワルソノーフィイ<sup>6)</sup>、ソロヴェーーツキイの僧院長フィリップ<sup>7)</sup>が列席なさいました。わたくしがこう申しますと、総主教たちは考えこんでしまいました。しかし、わたくしたちの高僧どもは狼の仔のように跳び上がり、吠えたり、自分たちの聖者に毒舌を吐き、《われわれの聖者たちは、馬鹿で何も解らなやない、まったく学のない連中だった、——どうして信用できるものか？ 読み書きも知らなかったのだ！》と言いました。ああ、聖なる神よ！ どうしてあなたは御自分の聖者たちにこんな辱しめを受けさせたのですか？ 哀れな男、このわたくしは悲しうございました、しかし、どうすることもできません。わたくしは彼らを罵りました、力の限り罵りました、そして、《わたくしは潔白だ、お前たちの前で足についた埃を払い落としてや<sup>8)</sup>、聖書にも、一人なりとも神の御意<sup>9)</sup>を行わん者は、神を信ぜぬあまたのやからよりまされり！ と書かれています》と最後の言葉を申してやりました。すると、彼らはいっそうはげしくわたくしに食ってかかり、《掴まえろ、奴を引っ掴まえろ！ われわれみんなを侮辱しやがった！》とわめきました、そして、わたくしを突いたり打ったりしはじめました。総主教たちまでがわたくしに襲いかかってきました。四十人ほどいたでしょうか、——悪魔の大軍が集ったのです！ イワン・ウアーロフ<sup>12)</sup>がわた

1) 以下に、モスクワは《第三のローマ》の思想が明確にうちだされている（この思想の最初の表明は、1561年のワシーリイ3世宛て僧フィロフェイの書簡）。

2) トルコによる1453年のコンスタンチノーブル占領を指す。

3) メレチウス（381死）——アンチオキヤの主教。

テオドレトス（457死）——5世紀の東方教会の傑出した神学者。

ベテロ——12世紀後半に活躍したダマスクスの博学な修道僧。

マクシム・グレーク（1556死）——1518年ロシアに来たギリシヤの博学な修道僧。

4) 1551年のいわゆる《百箇条宗教会議》。その第31条には、2本の指で十字を切るべしと定められている。

5) 高位の僧のマントと僧帽には大きな十字の印が刺繍されていた。

6) イワン雷帝のカザン征服後、ここに新たに正教監督区がもうけられ、グーリイ（1500—1563）が初代の大主教となった。僧院長ワルソノーフィイ（1495—1576）はグーリイの最もよい補佐役をつとめた。兩人とも1595年に聖列に加えられている。

7) CM. 201 ウの註。

8) CM. 使徒行伝、XVIII, 6。

9) 集会書、XVI, 3。

10) CM. ルカ伝、XXIII, 18。

11) この会議に出ていた総主教は3名（バイーシイ、マカーリイ、ヨアサフ）、会議の参加者は全部で40名以上（42—47名）いた。

12) 書記イワン・ウヴァーロヴィチ・カリーチンは、ニーコンの友人で、彼の信任が厚かった。

くしを掴まえて曳きずりまわしました。わたくしは、「やめろ、打つのはよせ！」と叫びました。彼らはみんな脇へ跳びのきました。わたくしは通訳の僧院長に、「この総主教たちに言ってやりなさい」  
 257ウ —使徒パウロは、——《かくの如き大祭司こそ我らに相<sup>よさわ</sup>応しき者なれ、即ち聖にして汚れなく》云云と書かれております、と、ころであんたたちは、人をさんざんなぐった後で、どのように礼拝式を執り行なうのですか？》と申しました。すると、彼らは腰をおろしました。わたくしは戸口に下がって、ごろりと横になりました、そして、「皆さん坐っていらっしやい、わたくしはちょっと横になりますよ」と申しました。彼らは笑って、「この司祭長はたわけ者だ！ 総主教方に敬意を示そうともしない！」と言いました。わたくしは、「我らはキリストのために愚かなり、汝らは尊く我らは卑し、汝らは強く我らは弱し！」<sup>2)</sup>と申しました。それから、高僧どもはまたわたくしのところにきて、ハレルヤについてわたくしと論争をはじめました。キリストはわたくしに味方してくださいました、——わ  
 258オ たくしは、この本の初めに引用しましたディオニシウス・アレオパギータの説によって、<sup>3)</sup>彼らのローマかぶれの異端邪説をあばきたてました。チェードフ僧院の衣食住係りエフフィーミイは、「あなたの方が正しい、——あなたとこれ以上議論することはありません」と申しました。それから、鎖をかけるために、彼らはわたくしを連れだしました。

さて、ツァーリの命で一人の士官と銃兵たちが派遣されてきました。彼らはわたくしを雀が丘に連れてゆきました。<sup>4)</sup>そこには——司祭のラザリーと修道僧のエピファーネイ神父も引き立てられてきました。愛すべきこの人たちも、髪を切り落とされ、村の百姓のように罵倒されたのです！ 心ある人ならば、彼らを見て泣かぬわけにはゆかないでしょう。彼らは苦しむがよい！ 何で彼らのことを悲しむことがありましょ？ キリストは彼らよりすぐれておられました、それなのに、わたくしたちの愛するこのお方は、奴らの遠い祖先アンナスとカヤパのために同じ苦しみをなめられたのです。今  
 258ウ の奴らに驚くことなんかありません、奴らはお手本を見習っているのです！ わたくしたちは、彼らのことを、哀れな者たちのことを悲しんでやらなければなりません。ああ、哀れなニーコンの徒よ！ お前たちは邪悪でかたくなな心のために滅びるであろう。

その後、雀が丘からアンドレーエフスキ僧院の宿坊へ、次いで郊外のサーヴァ村に移されました。銃兵の一隊が、まるで強盗でも監視するように、わたくしたちについてまわり、用便しにゆくときまでついてくるのです。このときのことを思い出すと、——おかしいやら悲しいやらでございます、——何と悪魔が彼らの心を曇らしたことでしょう！ それから、ウグレシヤのニコラ僧院に連れてゆかれました。<sup>5)</sup>ツァーリは、祝福を乞わせるために、隊長のユーレイ・ルトヒンをわたくしのところに派遣されました、わたくしたちはいろいろとたくさん語り合いました。

259オ それから、わたくしたちは再びモスクワのニコラ僧院の宿坊に連れ戻されました。<sup>10)</sup>彼らは正教信仰

1) ヘブル書、VII, 26。

2) コリント前書、IV, 10。

3) cm. 193 ウー195 オ。

4) 1667年6月17日。雀が丘——現在モスクワ大学のあるレーニン丘。

5) ラザリー——ロマノヴォ・ヴォリソグレーブスク（現ヤロスラーヴリ州、トッターエフ市）の司祭。1653年アヴァクムと知り合った。ニーコンに反対し、1661年7月14日トボーリスクに流され、更にブストゼールスクに追放された。1666年、裁判のためにモスクワの宗教会議に召喚された。同年11月審問を受け、1667年7月17日に破門された。1682年4月14日、アヴァクムたちと共にブストゼールスクで焚刑に処された。

6) キリストを裁いたユダヤの司祭長たち。

7) 1667年6月30日。アンドレーエフスキ僧院は、雀が丘の麓にあった（1648年、ルティーンチエフの建立）。

8) 1667年7月20日。

9) 1667年7月22日。

10) 1667年8月5日。次いで10日にチェードフ僧院に移された。

## 司祭長アヴァクム自伝

の告白書をわたくしたちから取りました。その後、ツァーリは御側付きのアルテモーンとデメンチェイ<sup>1)</sup>を何度もわたくしのところに派遣されました、彼らはツァーリの次のような御言葉をわたくしに伝えました、「司祭長よ、わたくしは神にも比すべき清純潔白なあなたの生活を知っています。妃や子供たちと一緒にあなたの祝福をお願いします、——わたくしたちのことを祈ってください！」使いの者は平身低頭して、かように申しました。わたくしは日頃ツァーリの身を案じて泣いていました、わたくしは彼が可哀想でならなかったのです。彼はまた、「どうかわたくしの言うことを聞いてくれ、——せめて多少なりと全教会の総主教たちと妥協してくれまいか！」とも申されました。わたくしは、「たとえ神の思召で死のうとも、背教者どもと妥協などいたしません！ あなたはわたくしのツァーリ<sup>2)</sup> 259ウでございませぬ、しかし、彼らはあなたに何かかわりがあるのですか？ 彼らは自分たちの皇帝を失いました、今度こちらへやって来ましたが、あなたを呑みこむためなのです！ わたくしは、神があなたをわたくしに返してくださるまでは、天に差し伸べたわたくしの手を下ろしはいたしません」と申しました。かようなツァーリのことづてが何度もまいりました、何やかやいろいろの話がございました。「あなたがどこにおられようと、お祈りの中でわれわれのことを忘れないでくれ！」というのが、最後の御言葉でした。罪人でありませぬわたくしは、今でも、できる限り、彼のために神に祈っております。〔B: たとえわたくしを苦しめられても、彼はやはりわたくしのツァーリです。彼がわたくしたちに本当にやさしくしてくださった時もあったのです。ベストの前、悪党のニーコンがまだ出てこないころ、ツァーリがカザン寺院においでになったことがございます、わたくしたちはツァーリの御手に接吻いたしました、彼はわたくしたちに卵をわけてくださいました<sup>3)</sup>。わたくしの息子のイソンはまだ幼くて、わたくしのそばに居合わせませんでした。ツァーリは彼のことをよく存じておられて、わたくしの弟にこの子を探しに行かせました、そして、御自分は、弟が通りで子供を見つけてくるまで、立ったまま長いこと待っておられました。ツァーリは接吻させようと彼に手を差し伸べられました、ところが、子供はお馬鹿さんで、分別がございませぬ、お坊さんでないことがわかったものですから、接吻しようとしません。ツァーリは御自分で子供の唇に手をもってゆかれ、彼に卵を二つ賜わり、頭をなでてくださいました。わたくしたちはこのことも忘れぬようにしなければなりません、わたくしたちのこの苦難はツァーリのせいではございませぬ、しかし、何の因果か、神はわたくしたちの苛責を悪魔に許しておられるのです、これは、今わたくしたちが試練を受けることによって、永遠の試練を逃れるためなのです。すべてのことについて神に栄光がありますように。(48ウ)〕

それから、仲間たちは懲罰を受けました、わたくしはこれを免れ、プストゼーリエに流されました。わたくしはプストゼーリエから二通の手紙をツァーリに送りました、はじめに出したのはそう長くは<sup>4)</sup> 260オなく、後の方がもっと長い手紙でした。わたくしは彼にいろいろなことを申し上げました。この手紙に、神が半の中<sup>5)</sup>でわたくしにお示しなされたある<sup>6)</sup> 徴<sup>7)</sup>のことも、彼に伝えてやりました。これについてはそ

1) アルタモーン・セルゲーヴィチ・マトヴェーエフ (1625—1682)。

デメンチェイ・ミニイチ・バシマコフ (1618—1705)。

2) トルコの侵入によるビザンチン帝国の滅亡をさす (1453年のコンスタンチノーブル陥落)。

3) 復活祭には、ツァーリが教会で卵を分配し、施しをする習慣があった。ここで語られている出来事は、1653年の復活祭 (この年は4月10日) のことと考えられる。ニーコンは既に総主教になっていたが、このころはまだ精力的な活動はしていなかった。

4) 当時8歳。

5) アヴァクム、ニキーフォロフ、ラザーリ、エピファーニイの流刑に関する勅書は、1667年8月26日に署名された。翌日、ラザーリとエピファーニイは《舌切り》の刑罰に処された。流刑者たちは8月30日にモスクワを出て、12月12日にプストゼールスクに着いた。

プストゼーリエの砦は、1499年、北極海に注ぐベチョーラ河の河口に建設された (現アルハンゲリスク州、ネネツ民族区)。

6) アレクセイ帝宛ての第4 (1668年)、第5 (1669年) の請願書。

の手紙を読めばおわかりになります。さらにまた、わたくしと仲間たちの名において補祭の書き記しました書巻を、正教信者への贈物としてモスクワに送りました<sup>1)</sup>、これが《正教徒の回答》と題する本で、背教者どもの異端邪説に対する反駁でございます。その中には教会の教理に関する真実が書かれております。それからまた、ツァーリと総主教に宛てた二通の手紙が、司祭ラザリーによって送られました。これらすべてのお返しに、わたくしたちは贈物を受け取りました、——メゼーンのわたくし  
 260ウ の家で、わたくしの二人の教子、前にお話した痴愚の行者フョードルとルカー・ラヴレンチェヴィチ、この二人のキリストの僕が絞首刑にされたのです。モスクワの住人ルカーは、やもめの母親の一人息子で、二十五歳ほどの若い靴職人でした。彼はわたくしの子供たちと一緒に死ぬためにメゼーンに来たのです。わたくしの家で大虐殺が行われましたとき、ピラトが《どん百姓めが、お前はどのように十字を切るのだ?》と彼に尋ねました。彼は、つつましくしかも賢明に、《わたくしは、わたくしのざんげ聴聞僧アヴァクム司祭長と同じように信仰し、同じように指を組んで十字を切ります》と答えました。ピラトは彼を牢にぶちこませ、その後で首にわなをかけ、横桁に吊りました。彼はこ  
 261オ の地上から天へ昇りました。彼らはその上彼に何ができましよう? 彼は若いに似合わず、老人のようにふるまいました、だからちゃんと主の御もとに行ったのです。たとえ老人でも、これほどの智慧を持っているのでしょうか! この同じときに、わたくしの二人の生みの息子、イワンとプロコーピイをも絞首刑にせよとの命令がきておりました。しかし、彼らは、哀れな息子たちは、へまをやらかし、勝利の冠を得ることに気づきませんでした、彼らは死を恐れて、自己の非を認めました。こうして彼らは、母親と一緒に、生きてまま三人とも土牢に入れられました。ここに死なき死がお前たちにきたのだ! 悪魔が何かほかのことを考え出す前に、牢の中で悔い改めるがよい。死は恐ろしい——それに何の不思議があろう! かってキリストの親しい友ペテロも、いつわって彼を知らないと申しました、それから外に出て、泣きまじりました、そして、その涙によって赦されました<sup>4)</sup>。ですから、子供た  
 261ウ ちのことは何も驚くに当たりません、彼らに意気地がなかったのはわたくしが悪いのです。いいですとも、どうぞそうでありますように! キリストは、わたくしたちすべての救いと赦しを掌中に握っておられます。

その後、例の副隊長イワン・エラーギン<sup>5)</sup>がメゼーンから到着し、プストゼーリエのわたくしたちのところに来ていました。彼はわたくしたちから供述書を取りました。それには、某年某月、次に父も同じく——我らは聖者たちの教会の伝統を堅く守り、パレスチナの総主教パイシーならばにそのともがらの異端の会議を呪咀す、と書かれております。ここには、そのほかたくさんのことが書かれており、異端の張本人ニーコンも少しはその分け前にあずかっております。それから、わたくしたちは刑場に引き出され、判決の指令が読みあげられました。わたくしは刑罰を課されないで、牢に連れ戻  
 262オ されました。この指令には、アヴァクムを木枠を組んだ土牢に入れ、水とパンのみを与えよ、とありました。わたくしはこれに対して唾を吐きかけ、食を絶って死のうと思いましたが、そして、八日かそれ以上ものあいだ絶食しましたが、仲間たちは再び食事を取ることをわたくしに命じました。

それから、彼らは司祭のラザリーを引き出し、喉もとからそっくり舌を切り取りました、出血はほ

1) これは、1669年9月1日以前にメゼーンに送られた。補祭はフョードル。

2) ラザリーが手紙を書いたのは1668年の2月。しかし、これがツァーリに報告されたのは2年以上たった1670年4月15日であった。

3) キリストの処刑を許可したローマのユダヤ総督。ここではイワン・エラーギン (CM. 下記の註5) を指す。

4) CM. マタイ伝、XXVI, 75。

5) イワン・コンドラーチェヴィチ・エラーギン——1661年3月から1663年までメゼーンの知事。その後モスクワの親衛隊副隊長をつとめた。彼は1670年の春にプストゼールスクに着き、同年4月14日にラザリー、エピファニー、フョードルに刑罰を加えた。

## 司祭長アヴァクム自伝

んのわずかで、それもすぐ止まりました。ところが、舌がないのに、彼はまた口をききはじめました。次に右の手を仕置き台にのせられ、手首のところから切り落とされました。切断された手は地面に横たわり、ひとりでに伝統通りの正しい形に指を組みました、そして、長いあいだそのまま人々の前にころがっておりました。この可哀想な手は、死んだ後にもキリストの<sup>しるし</sup>印を忠実に守ったのです。わたくし自身もこれには驚嘆いたしました、生なきものが生あるものを咎めているのです！翌々日、わたくしは彼の口の中に手をつっこみ、触って撫でてみました、すっかりつるつるしていません——舌は 262ウありませんが、痛みも感じません。神の助けによって、すくなおってしまったのです。彼は前にモスクワで舌を切られました、そのときにはいくらか切り残しがありましたが、今度は付け根からそっくり切り取られました。あれから二年間、ちゃんと舌があるかのように、彼ははっきり話しておりました。二年たちました今、別の奇蹟が起きました、三日のうちに彼の口の中に完全な舌が生えたのです、ただ先の方がほんの少し丸っこいだけでした。彼は再び口を開き、たえず神を讃めたたえ、背教者どもを非難しました。

それから、彼らはソローフキの隠者で苦業戒律修道士のエビフアーニイ神父を引き出し、同じく舌をそっくり切り取り、手の指を四本切り落としました。はじめのうち彼は鼻声で話しておりました、その後彼は聖母にお祈りしました、すると聖さん覆いの上に、二枚の舌が、モスクワの舌とこの土地 263ウの舌が、彼に指し示されました。彼は一つを取って自分の口に入れました、それ以来彼はきれいなはっきり話しはじめ、完全な舌が口の中に現われました。驚嘆すべきは神の御業、筆舌に尽くしがたきは主の思召してございます！——神は刑罰の執行をお許しになり、それから再び傷を癒やされ、御慈悲をかけ給うのです！何で多言を要しましょうか？神は古くから奇蹟をあらわしたまい、無から生命をお創りになられています。まことに、最後の審判の日に、神は人間の肉体をことごとく一瞬にして甦らせたもうであります。いったい誰がこれについて判断できましょうか？それは神にほかなりません、神は新しきものを創り、古きものを新しくなされます。すべてについて神に栄光がありますように！

それから、彼らは補祭のフォードルを引き出しました。彼も舌をそっくり切り取られましたが、ほんの一部分だけ口の中に残りました、喉もとがはすかいに切られたからです。〔B：必ずしも憐れみを 263ウ示したわけではなく、手がいうことをきかなかったのです、震えおののいてナイフが手から落ちました。〕(53オ) このときは、その箇所<sup>1)</sup>で癒着しましたが、後で古い切り口から再び舌が生え、唇の外まで出るようになりました、ただ先の方が少し丸っこくなっていました。彼の手も、掌を横に切断されました。何もかも、神の助けによって、すっかりなおりました、——そして、前よりもはっきりきれいに話をしております。

それから、彼らはわたくしたちを上で覆いました、——上に埋もれた木の柵、そのそばにまた別の木の柵、さらにそれら全体を取り巻く四つの錠のついた共通の柵、番兵たち<sup>1)</sup>が<sup>1)</sup>口で牢を守って<sup>1)</sup>いました。囚われの身のわたくしたちは、ここでもどこの牢屋でも、ソロモンが母のバテシバを見つめながら讃め歌いました雅歌を、神の御子、キリストの御前で詠唱しております、——ああ、素晴らしきかな、麗わしきお方よ！ああ、素晴らしきかな、愛するお方よ！あなたの眼は炎のように燃え、あ 264ウあなたの歯は乳よりも白い、あなたの輝かしいかんばせは陽の光にまさり、すべてこれ貞昼日のように美しく輝きわたる<sup>2)</sup>(教会の讚美)。

それから、ピラトはわたくしたちのもとを去り、メゼーンで仕事を片づけ、モスクワに戻りました。モスクワでは、わたくしたちの残りの同志たちが、火に<sup>あぶ</sup>焙られ、<sup>3)</sup>焼かれました。イサイヤが<sup>3)</sup>焼き殺さ

1) 使徒行伝、XII, 6。

2) 雅歌、IV章の最初の二句の言い換え。

3) cm. 249 オの註。

264ウ れました、次にアヴラー<sup>1)</sup>ミイが焼き殺されました、その他の教会の熱烈な擁護者たちが数限りなく殺  
 されました、神はその数をおかぞえになられるでしょう。驚きにたえませんが、奴らは物の道理を知  
 ろうとしません、火と鞭と絞首台で信仰を確立しようとしているのです！ こういうことを教えたの  
 はどの使徒たちでしょう？ わたくしはちっとも知りません。わたくしのキリストは、わたくしども  
 の使徒たちに、火と鞭と絞首台によって信仰に導くために、このように教えよとはお命じになりませ  
 んでした。主は使徒たちに、全世界を巡りて、凡ての造られし者に福音をのべ伝えよ。信じてバプテ  
 スマを受くる者は救わるべし、然れど信ぜぬ者は、罪に定めらるべし、と申されたのです。いいです  
 か、読者よ、キリストがお呼びになるのは自由意志で求めてくる者です、使徒たちに従わぬ者を火あ  
 ぶりにし絞首台にかけよとは命じられておりません。タタールの神マホメットは、その書物の中に、  
 「我らの伝統と掟に従わぬやからは、その首を剣にて切り落とすべし」と書いています。わたくしたち  
 265オ のキリストは、御自分の弟子たちに、一度もこのように命じられたことはありません。あの教師ども  
 が悪魔の手先であることは明白です。奴らは、信仰に引き入れるために、人々を殺し、死の手に渡し  
 ています、この信仰にしてこの所業ありです。福音書には、よき樹は悪しき果を結ぶこと能わず、悪  
 しき樹はよき果を結ぶこと能わず<sup>3)</sup>、と書かれています、樹はすべてその果実で見分けがつくものです。  
 何で多言を要しましょうか？ もし戦わなければ、栄冠は授けられないでしょう。栄冠を欲する者は  
 ベルジャクんだりまで行く必要はありません、ここにいてもわたくしたちのバビロンがあるのですか  
 265ウ ら<sup>4)</sup>。さあ、まことの信者よ、キリストの御名を唱え、モスクワの真ん中に立ち、聖父たちから受け継  
 いだ通り、五本の指で我らが救い主キリストの十字の印<sup>5)</sup>を切りなさい、そうすればここにいてもあな  
 たに天国が現われているのです！ 神はあなたを祝福なさいましょう、正しい指の組み方のために受  
 難の苦しみを受けなさい、せんさくは無用です！ このことのために、わたくしはあなたと一緒に死  
 ぬ覚悟しております。わたくしはまったく愚かな学のない人間ですが、しかし、聖父たちから伝えられ  
 た一切の教会の伝統が神聖無垢なものであることを知っております。わたくしはそれを受け入れた通  
 りに、死ぬまでこれを守り通します。わたくしは、われわれより前に定められた古い地界<sup>6)</sup>を移しはし  
 ません、それが永遠にそのままありますように！ 異端者よ、キリストの聖体と十字架にいたずら  
 をするな、それだけではない、祭壇覆いには手も触れるな。彼らは悪魔とぐるになって、経典をはじ  
 266オ めとして一切を改変しようと考えました、——教会と聖餅の十字の形を変えました、内陣での司祭の  
 祈禱を廃止し、連禱の詞句を変え、洗礼に際しては悪魔に祈ることをはっきり命じています、——奴  
 らにも、悪魔にも、面と向かって唾を吐きかけてやりたい、——洗礼盤をめぐるにも、悪魔は太陽の運  
 行と逆の方向に彼らを導き、教会の献堂式にも同じように太陽の運行と逆に行進させ、結婚式の祝福  
 の際にもやはり太陽の運行と逆の方向に導いています<sup>7)</sup>、——彼らは公然とすべてを反対にやっていま  
 す、——奴らは洗礼の際にも悪魔を否認しません。仕方がないじゃありませんか？——奴らは悪魔の  
 子です、自分の父を否認したがるはずはありません！ 何で多言を要しましょう？ ああ、まことの  
 信者よ！ 何もかもひっくりかえってしまいました。地獄の犬ニーコンは言った通りに実行しました。

1) см. 254 Уの註。

2) マルコ伝、XVI, 15-16。

3) マタイ伝、VII, 18。

4) см. ダニエル書、第 III 章。

5) см. 箴言、XXII, 28。

6) 改革以前に一般に行なわれていた教会の屋根と聖餅上の 8 枝架十字が 4 枝架十字に改められた。

7) 改革以前は、いわゆる « ПОСОЛОНЬ », すなわち太陽の運行通りに東から西へ廻る習慣が守られていた。

## 司祭長アヴァクム自伝

《活字にしる、アルセン<sup>1)</sup>、何でもいいから本を出すんだ、ただ前のと違ってさえいれはいいんだ！》彼は言われた通りにしました。もうこれ以上変えることはできません。このことのためにみんなが滅びなければなりません。極悪人どもはその悪だくみもろとも呪われるがよい、彼らのために苦難を受けます人々には永遠の瞑福がありますように！

さて、わたくしはすべてのまことの信者にゆるしを乞います、と申しますのは、この伝記につきまして、わたくしが語ってはならないことがいくらかあったように思われますから。しかし、わたくしは使徒行伝とパウロの手紙を読んだことがございます、——使徒たちは、神が彼らによって御業を現わし給うたとき、栄光を我らに帰するなかれ、我らが神に帰し給え、と自らについて語っておられます。ところが、わたくしはとるにもたらぬ人間でございます。前にも言いましたが、重ねて申します、《わたくしは罪深い人間です、放蕩者で強欲漢です、泥棒で人殺しです、収税吏と罪人の仲間です、誰にとりましても呪われた偽善者です》。ですから、わたくしをゆるしてください、そして、わたくしのため<sup>267オ</sup>に祈ってください。わたくしも、読んだり聞いたりして下さるあなたたちのために祈らなければなりません。わたくしはこうする以外に生きようすべがございません。ですから、自分のしていることを人々に話すのです、どうか人々がわたくしのために祈ってくれますように！ 最後の審判の日に、すべての人々がわたくしのなした行ないを——あるいは善い行ないを、あるいは悪い行ないを——識るでありましょう。しかし、わたくしは言葉の点では無学であります、知識の点ではそうではありません、わたくしは弁論術や修辞学や哲学は知っておりませんが、しかし、使徒が《我れ言葉につたなけれども、知識にはしからず》<sup>3)</sup>と申しておりますように、わたくしはキリストの知恵を身につけております<sup>4)</sup>。

おゆるしてください、——自分の愚かさにつきまして、あなたにもっとお話したいと存じます。実際、わたくしは愚かなまねをしまして、自分の神父の言いつけにそむいたことがございます、そのためにわたくしの一家が神罰をこうむりました。どうしてそのようなことになりましたのか、どうぞ<sup>267ウ</sup>お聴きになってください。わたくしがまだ平の司祭<sup>5)</sup>でありましたとき、ツアーリのざんげ聴問僧ステファン・ヴォニファーチエヴィチ司祭長が、祝福のしるしに府主教フィリップの聖像とシリアの聖エフレムの書<sup>6)</sup>をわたくしにくだされ、これを読んで自分の為ともし、人々の為とせよとさされました。罪人でありますわたくしは、神父の祝福と言いつけをないがしろにし、従兄弟にひどくせがまれて、この本を馬と交換いたしました。わたくしの家にはエフフィーミと申す弟がおりました、彼はたいへん読み書きに堪能で、教会のために大いに精励いたしておりました。彼は後に上の皇女<sup>7)</sup>様の聖歌読誦僧として宮中に召し抱えられましたが、ベストのときに妻と一緒に亡くなりました。このエフフィーミが、その馬に水を飲ませるやら、かいばをやるやら、すっかりこれに夢中になり、しばしば勤行を怠っておりました。神は、わたくしと弟の不正、わたくしたちが道ならぬふるまいを<sup>268オ</sup>しておりますのを御覧になりました、——わたくしは本を取り換えて神父の言いつけにそむき、弟は

- 1) アルセーニイ・グレーク——イェルサレムの総主教パイシイと共に1649年にモスクワに来た。ニコノの信任が厚く、聖書の改訂にたずさわった。
- 2) CM. 285オ。
- 3) コリント後書、XI, 6。
- 4) アヴァクムの《自伝》は、正確に言えば一応ここで完結している。以下に続く部分は、彼が補遺として付け加えた彼自身の数々の《奇蹟》の物語りである。
- 5) 310年頃ニシピスに生まれた。シリア教会における最大の神学者、説教家、詩人で、《聖霊の立琴》なる名をもって呼ばれた。彼の著作は1647年にモスクワで二度出版されている（2月1日、8月29日）。
- 6) アレクセイ帝の姉イリーナ・ミハーイロヴナ（1627—1679）。アヴァクム、モローゾフたちの庇護者であった。
- 7) 1654年、20歳くらいの年にベストで死んだ。

勤行をおろそかにして馬に熱中しておりました、——主はかようにわたくしどもを罰せられました、——悪鬼どもが夜となく昼となくこの馬をいじめにかかりました、馬はたえず汗にまみれ、へとへとに弱り、半死半生のありさまになりました。わたくしは、どんな落度があつて悪鬼がわたくしたちにこんなにひどい仕打ちをするのか、ほとんど合点がゆきませんでした。日曜日の夜食の後、私的な勤行でしたが、夜半祈禱の席上、弟のエフフィー・ミイが詩篇の《汚れなき者》の章を唱えました、彼は《我を見そなわし、我をあわれみ給え!》<sup>2)</sup>と声高らかに叫びました。そのとき、彼は本を手から落と

268ウ し、ぱったり床に倒れました、彼は悪鬼どもに打ちのめされたのです、——悪鬼どもがむごく苦しめましたので、彼は異様な声で叫んだりわめいたりしはじめました。わたくしの家には、そのほかに二人の実の弟——クジマーとゲラーシム——がおりました、二人はエフフィー・ミイより年上でしたが、彼を取り押さえることができませんでした。三十人ほどおりました内輪の者が、総がかりで彼を押さえにかかり、泣き叫び、涙ながらに神にうたえました、《主よ、憐れみ給え！ わたくしどもはあなたに対してあやまちをおかしました、あなたの慈悲深い御心を怒らせました、罪人でありますわたくしどもをお恕ください！ わたくしどもの聖者たちの祈りによって、この若者を憐れんでください！》しかし、彼はいっそうはげしく怒り狂い、わめきたて、身を震わせ、のたうちまわります。このときわたくしは、神の御加護によって、この悪鬼の大騒ぎに心を乱しませんでした。勤行をすませ

269オ ましたから、涙ながらにあらためてキリストと聖母に祈りはじめました、《わたくしの聖母様、いとも聖なる神の御母よ！ お教えください、どんな罪をおかしたのでこのような罰がわたくしにく

269ウ りましたかを、それがわかりましたなら、あなたの御子とあなたの前にざんげをいたし、今後二度とそのようなことはいたしません！》それから、泣きながら、祈禱書と聖水を取りに教子のシメオンを教会につかわしました、——彼はエフフィー・ミイと同じくらいの若者で、十四歳でございました、このシメオンとエフフィー・ミイは大の仲よしで、経典や勤行によって互に励ましあい、喜びをわかち、二人ながら精進、齋戒、祈禱に精励しておりました。このシメオンは、自分の友を案じて泣き、教会へ行って、祈禱書と聖水を取ってきました。わたくしはシメオンの手をかりて、悪鬼につかれた人に大バシリウスの祈禱を唱えはじめました。シメオンはわたくしのために香炉とローソクの仕度を整え、聖

270オ 水を差しました。ほかの者たちは悪鬼につかれた人を押さえていました。さて、お祈りの中で、<sup>3)</sup>《啞にして耳しいなる靈よ、主の御名により我なんじに命ず、この人より出でよ、重ねて入るなかれ、神のみが見おろし給う人なき荒れ地に行け》というくだりにきましたが、悪鬼はいっこうに言うことを聴かず、弟から出てゆきません。わたくしは同じくだりをもう一度くりかえしました、それでも悪鬼は依然として言うことを聴かず、いっそうはげしく弟を苦しめます。ああ、何と悲しいことでしょう！ どう申したらよいでしょう？ わたくしは恥ずかしくて、話す勇気がありません、しかし、エピファニー神父の命令に従って、お話することになります。事の次第は次の通りです、——わたくしは香炉を手にし、聖像と悪鬼につかれた者に香を焚き、それから長椅子の上にはげたり倒れ伏し、長いこと慟哭いたしました。それから、起き上がって、例の大バシリウスの言葉を悪鬼に向かって大声

270オ で叫びました、——《この人より出でよ！》悪鬼は弟の体を輪のように丸め、身をひきつらせて外に飛び出し、<sup>5)</sup>窓の上に坐りました。弟は死んだようになっていました。わたくしは彼に聖水をふりかけました。彼は正気に返り、窓に坐っている悪鬼を指さしました、彼は舌を縛られていたのものが言えなかったのです。わたくしは窓に聖水をふりかけました、悪鬼は挽臼の置き場になっている室の隅に飛びおりました。弟はそこにいる悪鬼を指さします。わたくしはそこにも聖水をまきました、悪鬼

1) 詩篇、CXVIII, 129-136 (第17章)。

2) 詩篇、CXVIII, 132。

3) 悪魔祓いの祈禱。

4) CM. マルコ伝、IX, 25。使徒行伝、XVI, 18。

5) CM. マルコ伝、IX, 26。

## 司祭長アヴァクム自伝

はそこからベチカの上に移りました。弟はそこも指さします。わたくしはそこにも聖水をふりかけました。弟はベチカの下を指さし、自分で十字を切りました。わたくしは悪鬼の後を追わずに、主の御名において弟に聖水を飲ませました。彼は心の底から嘆息をもらして、わたくしにこう申しました、  
《ありがとうございます、神父様、あなたは悪鬼の王子と二人の公からわたくしを奪い返してください 270ウ  
ました。あなたの御親切に対し、わたくしの兄のアヴァクムがあなたに厚く御礼申しあげるでござ  
いましょう。また、教会に祈禱書と聖水を取りに行き、悪鬼どもとの闘いであなたの手助けをした  
少年にも、感謝いたします。彼はわたくしの友だちのシメオンとそっくりでした。彼らはスンドヴィ  
ク川のほとりにわたくしを連れだして、ぶんなぐり、《お前が俺たちの手に引き渡されたのは、お前の  
兄のアヴァクムが本を馬と取り換え、お前がその馬を可愛がっているからだ》と言いました。です  
から、わたくしは兄に話さなければなりません、本を取り戻し、それと引き換えに従兄弟に金をやるよ  
うにと》。そこで、わたくし彼に申しました、《ねえ、お前、お前の兄のアヴァクムはこのわたしだ  
よ》。すると、彼はわたくしに答えました、《あなたがわたくしの兄さんなものですか？ あなたはわ  
たくしの神父様ですよ、あなたがわたくしを王子と公たちから奪い返して下さったんです、わたくし 271オ  
の兄は今ロバチーツイにおります、——彼はあなたに厚く御礼申し上げますことでしょう》。わたくし  
は彼にもう一度聖水を与えました。彼はわたくしから鉢をひったくり、むさぼるように飲み干します、  
——彼には水がとてもおいしかったのです！——水はなくなりました、わたくしは鉢を軽くそそい  
で、彼に飲ませようとした、しかし、彼はもう飲みませんでした。冬の夜、わたくしは夜っぴて  
彼の世話をやきました。しばらく彼と一緒に横になりましてから、朝拝の読経をあげに教会へ参りま  
した。わたくしの留守に、悪鬼が再び彼に襲いかかりましたが、前より手きびしくありませんでした。  
教会から戻って、わたくしが彼に聖油を注ぎますと、悪鬼どもは再び出てゆき、彼は正気に返りまし  
た。しかし、彼は悪鬼どもに打ちひしがれて弱っておりました、ベチカの上にもちらちら目を走らせて  
は怖がっています、——わたくしがちょっと留守にすると、悪鬼どもが彼に襲いかかってきます。わ 271ウ  
たくしは、自分のおかした罪のために、本を取り戻してその代金を払うまで、三週間ほどのあいだ、  
犬と闘うように悪鬼どもと渡り合いました。わたくしは友人の僧院長イラリオン<sup>2)</sup>を訪ねました。彼  
は弟のために聖餅の一片を裂いてくれました。その当時は彼はまっとうな生き方をしておりました、  
——ところが今ではリャザンの大主教となり、キリスト教徒の迫害者になりました。また、わたくし  
はほかの聖職者たちにもお願いしました、彼らは罪人でありますわたくしたちのために神に祈って  
くれました、こうしてわたくしの弟は悪鬼どもから救われました。神父の戒めにそむくのは、これほど  
悪いことなのです！ 神の戒めにそむいたら、いったいどうなるでしょう？ ああ、炎と苦しみがあ  
るだけです！ どうして時を過ごしてよいやら、わたくしにはわかりません！ わたくしは愚昧と偽 272オ  
善につつまれ、嘘偽におおわれ、隣人に対する憎悪と自尊心にくるまれ、自分ではひとかどの者だと  
信じたが、すべての人の非をならして、我が身を滅ぼしています、わたくしは糞であり、膿であり、  
呪われた人間です、——まぎれもない糞です！ わたくしはどこもかも——魂も体も悪臭を放って  
います。小屋の中で犬や豚と一緒にいるのがわたくしにはふさわしいのです、——犬や豚もわたくしの  
魂と同じように鼻もちならぬ悪臭を放っているのですから。豚や犬が臭いのは生まれつきです、と  
ころが、わたくしときたら、自分のおかした罪のために、くたばって町の通りに投げ棄てられた犬のよ  
うに、悪臭紛々としています。わたくしをこの土牢に埋めてくれた高僧たちに感謝の意を表します、  
わたくしはよからぬふるまいをして悪臭を発してはおりましても、とにかくほかの人たちをたぶらか  
したりしません。ええ、それでよいのです！

1) ヴォルガ右岸の支流で、グリゴロヴォ村の近くを流れる小さな川。

2) CM. 252 オの註。

272ウ また、モスクワの銃兵でわたくしの番兵のキリール<sup>1)</sup>が、悪鬼にとりつかれてわたくしの牢にたずねてきました。わたくしは彼の頭を刈り、体を洗い、着物を取り替えてやりました、——風がうようよしていました。わたくしは彼と閉じこもり、二人で一緒に暮らしていましたが、三番目のお方としてキリストと聖母がわたくしどもについていてくださいました。この愛すべき男は、よく大便小便をたれ流していましたが、わたくしがきれいに拭いてやっておりました。彼は飲物や食物をくれとせがみましたが、祝福なしには手をつけようとはしません。勤行のあいだ彼はちゃんと立っていません、——悪鬼が彼に眠気をもよおさせるのです。わたくしは珠数でびしゃりと叩きます、すると、彼は立ったままわたくしのうしろでお祈りと礼拝をはじめます。勤行を終えますと、彼はまた騒ぎだします。わたくしのいる前でも、彼はよく騒いだりふざけたりしました。ちょっとじゃまをしに神父の牢屋を訪ねに行くようなときは、わたくしは彼を長椅子に寝かせ、起きてはならぬと言いつけて、彼を祝福してやります、わたくしが神父のところにおりますあいだは、彼は神に<sup>いまし</sup>縛めをかけられ、横になって、起き上がりません、——寝たまま騒ぎたてているのです。彼の枕もとには、聖像と本、パンとクロスなどが置いてあります、でもわたくしがいけないときは、なにひとつ手を触れません。わたくしが戻ってくると、彼は起き上がります、いまましいことに、悪鬼が彼にふざけたまねをさせるのです。わたくしが大声で叫ぶと、彼はおとなしく坐ります。わたくしが食事の仕度をしておりますと、食物をねだって食事前に盗み食いしようとします。ところがいざ食べる段になって、わたくしが

273ウ 《我らの父<sup>2)</sup>よ》を唱え、祝福しますと、今度は食物に口をつけません、——祝福してないのをくれと言います。そこで、わたくしは口の中に押しこんでやります、すると、彼は泣いて呑みこむのです。わたくしが魚を食べさせたりしますと、悪鬼が彼の中で荒れ狂い、「お前は俺を弱らせやがったな！」と彼の中から声を出します<sup>3)</sup>。わたくしは主の御前に涙を流し、断食によって彼を取りひしぎ、キリストによっておとなしくさせます。それから、わたくしは彼に聖油を注ぎ、悪鬼による苦しみをやわらげてやりました。彼は一と月あまりわたくしと一緒に暮らしました。死ぬ前に彼は本心に立ち返りました。わたくしは彼のざんげを聴き、聖さんを授けてやりました、この愛すべき男も間もなく亡くなりました。わたくしは棺と<sup>3)</sup>経帷子<sup>きょうたひら</sup>をあがない、教会のかたわらに彼を葬らせました、また僧侶たちには死後四十日間の供養料を与えました。死者は一昼夜わたくしのそばに横たわっておりました。夜中

274ウ にわたくしは起き上がり、神に祈りをささげ、死者を祝福し、彼に接吻をして、再び彼のかたわらで眠りにつきました。彼はわたくしの愛すべき友でした！ このことのために神に栄光がありますように！ 今日彼は彼、明日は我が身も死ぬるのです。

また、モスクワで、フィリップと申す悪鬼につかれた男がわたくしの家におりました、——わたくしがシベリヤから戻ってからのことでございます。彼は室の隅に鎖で壁につながれておりました、と申しますのは、彼の中にいる悪鬼がとても獰猛で残忍だったからでございます、彼は身をもがき、暴れ狂っておりました、召し使っている者たちも彼を静めることができませんでした。罪人でありますわたくしが十字架と聖水を手にして近づきますと、彼はおとなしくなり、死んだもののようにキリストの十字架の前に倒れ伏し、少しもわたくしに手出しをしようとしません。聖者たちの祈禱によって

274ウ 神の力が彼から悪鬼を追い払ったのです。しかし、彼はまだ正気ではありませんでした。痴愚の行者フョードルが彼の看護につけられました、——このフョードルは、キリストの信仰のために背教者どもによってメゼーンで絞首刑にされました、——彼はフィリップに詩篇を読んで聞かせ、彼にイエス

- 1) 10名のモスクワの銃兵が囚人たちをブストゼールスクに護送し、そこで監視の任についていた。キリールはその中の一人。
- 2) いわゆる《主の祈り》(マタイ伝、VI, 9-13)。
- 3) 魚はキリストのシンボルと考えられた。
- 4) **сорокоуст** ——教会における故人追悼の40日間の祈禱のみならず、そのために必要な物(ローソク、抹香など)をも云う。

## 司祭長アヴァクム自伝

の祈りを教えてやりました。わたくし自身は、昼間は家を留守にしまして、夜だけフィリップの面倒を見てやっておりました。暫くしましてから、わたくしはフォードル・ルティーンシェフの邸からたいへん悲しんで帰宅いたしました、と申しますのは、彼のところで信仰や掟について異端者どもと大論争をしてきたからです、ところが、このときわたくしの家でひと悶着起こっておりました、——司祭長夫人がやもめの召使いフェチーニヤと口論していました、——悪魔がつまらぬことで二人にけんかをさせたのです。わたくしは戻ったとたんに、悲しみの余り二人をなぐりつけ、さんざん罵りました。わたくしは神と彼らに対して罪をおかしました。すると、悪鬼がフィリップの中で暴れだ  
275オ  
し、猛り狂って鎖を引きちぎろうともがき、異様な声で叫びはじめました。家じゅうの者がことごとく恐怖にとらわれ、それこそたいへんな騒ぎが持ち上がりました。わたくしは罪のつぐないもしいないで、彼を静めるためにそばに行きました、しかし、彼は以前とは違っていました。彼はわたくしを掴まえ、打つやら叩くやら、まるでくもの巣のようにやたらとわたくしを苛さいなみました、そして、「お前は俺の手に落ちたぞ！」と言うのです。わたくしはただ祈禱だけを唱えておりました、しかし、実行をともしなわぬ祈禱にききめがあるはずはありません。家の者たちはわたくしを彼から引き離すことができず。わたくしは彼のなすがままにさせました。わたくしは自分が罪をおかしたことに気がつきました、ですからわたくしを勝手になぐらせたっていいのです。しかし、——神の靈験は何とあらたかなことでしょう！——なぐられても、ちっとも痛くありません。それから、彼はわたくしを突き  
275ウ  
離し、「お前なんか怖いもんか！」と申します。このときわたくしはたいへん悲しくなりました、「悪魔が、——と自分に言い聞かせました、——このわたくしをとりこにしたのだな！」わたくしはちょっと横になりました、そして、良心をよびもどしました。わたくしは起きて妻を探し、涙ながらにゆるしを乞いました、彼女に低くおじぎをし、「ナスターシャ・マルコーヴナ、わたくしは悪いことをしました、——罪深いわたくしをゆるしてください！」と申しました。彼女もわたくしにおじぎをしました。それからフェチーニヤにも同じようにゆるしを乞いました。それから、わたくしは室のまん中にうち伏し、皆の者にわたくしの呪われた背中を五つずつ鞭打てと命じました。そこには二十人ばかりおりました、——妻も、子供たちも、誰もかれも、泣く泣くわたくしを鞭打ちました。わたくしは、  
276オ  
「もし鞭打たない者があるならば、その者は天国でわたくしとなんのかかわりもなくなるぞ！」と申し  
ました。彼らは、仕方なしなし、鞭をふり、泣いております、わたくしは打たれる度にお祈りを唱えました。みんなが打ち終えましたとき、わたくしは起き上がって彼らにゆるしを乞いました。悪鬼はかなわぬと観念して、再びフィリップから出てゆきました。わたくしは十字架で彼を祝福してやりました、彼はちゃんと元通りになりました。その後、神の御加護により、我らが主イエス・キリストのおかげで、彼は本復いたしました。このお方に栄光がありますように。

わたくしがシベリヤにおりまして——まだかの地へおもむく途上——トボースクに住まっておりますとき、フォードルと申す悪鬼につかれた男が、わたくしのもとに連れてこられました。彼にとりついた悪鬼は残忍でした。彼はキリスト御復活の日に、祝祭の日をないがしろにし、その妻とみだらなまじわりを結びました、  
4)  
——彼の妻がそう申しました、——そして、悪鬼にとりつかれたのです。わたくしは二た月ほど彼を自分の家にあずかり、彼のために一生懸命神にお願いしたり、教会に連れ  
276ウ  
ていったりしました、それから、彼に聖油を注いでやりました、神は御慈悲をかけてくださいました、——彼は元気になり、正気に返りました。礼拝式のおりに、彼は聖歌隊席でわたくしと一緒に聖歌を

1) 《神の御子、主イエス・キリストよ、罪人なる我を憐み給え》という短い祈禱。アトス僧院の沈黙派の僧たちによって、15世紀にロシアに伝えられた。

2) 《Наказал еси человека, и истаял еси, яко паучину душу его》(詩篇、XXXVIII, 12) の正確な意義を離れた表現。

3) см. ロハネ伝、XIII, 8.

4) 教会の掟として、祭日及び日曜前夜は禁欲すべきことが命じられていた。

- 歌いました、奉獻の儀のときに彼はわたくしを怒らせました。そのとき、わたくしは聖歌隊席で彼を打ち、教会の西側室の壁に彼を鎖でつなぐよう、寺男に命じました。ところが、彼は留金の輪を引きちぎり、前にもまして<sup>1)</sup>猛り狂い、礼拝式の間に正知事の邸に行ってしまいました、そして、そこで櫃をぶちこわし、公爵夫人の衣裳を着込み、人々を追い散らそうとしました。公爵は立腹されました、人々が大勢で彼を牢に引き立てました。彼は牢内で不幸な囚人たちをことごとく打ちのめし、ペチカをぶちこわしました。公爵は彼を村の妻子のもとへ追いつ返すよう命じました。彼は村々を渡り歩き、
- 277オ ひどい悪事を重ねていました。人々はみな彼を避けておりました。知事たちは腹を立て、わたくしに彼を引き渡してくれませんか。わたくしは主の御前でいつも彼のために泣いておりました。そのうちにモスクワから書状がまいりました、——それはわたくしをトボーリスクから大河レナへ追放せよとの命令でした。<sup>2)</sup> 聖ペテロの日、わたくしが船に乗りましたとき、フォードルがまったく正気でわたくしのところにやって来ました、船の上は公衆の面前で、わたくしの足もとに低く頭をたれ、彼はこう申しました、——「神父様、あなたがわたくしになさってくださった御親切に対して、心から御礼を申しあげます。おとついのことわたくしは荒野を走っておりました、するとあなたがわたくしの前に現われ、十字架で祝福してくださいました、それで悪鬼どもはわたくしから逃げだしてしまいました、わたくしは御礼を申しにあなたのもとにまいりました、あらためてあなたの祝福をお願いいたします」。
- 277ウ わたくしは彼を見つめながら涙を流しました、そして、神の偉大さに歓喜いたしました、と申しますのは、主はわたくしたちすべての身を案ぜられ、気づかわれておられるからです、——主は彼を癒やしたまい、わたくしを喜ばせてくださいました！ わたくしは彼に教えを説き、祝福を与え、妻子のもとへ帰してやりました。さて、わたくしは、これから先も悪鬼から彼をお守りくださいと、やさしい神の御子、キリストに彼のことを祈り、流謫の地へ船出しました。帰り道に彼のことを尋ねましたところ、人が申すには、「あなたがお発ちになってから三年ほどして亡くなりました、彼は妻子と共にいかにもキリスト教徒にふさわしく暮らしておりました」とのことです。それは結構なことでございます。このことのために神に栄光がありますように！
- わたくしの神父ならびにキリストの僕<sup>しもべ</sup>であるあなたよ、わたくしをおゆるしてください、——わたくしにこの自伝を語らせたのはあなたがたでございます。しかし、おしゃべりをしましたついでに、もう一つあなたがたにお話をいたしましょう。弟が悪魔どもに苦しめられました土地で<sup>4)</sup>、わたくしがまだ<sup>5)</sup>平の司祭でございましたころ、わたくしの家に若いやもめがおりました、——なにぶん古いことで、彼女の名前は失念いたしました！ いや、思い出しました、オフィーミヤでございます、——彼女はこまめによく動き、料理をし、何をやらせても上手でした。ある晩わたくしたちが勤行にかかろうとしましたとき、悪鬼が彼女を床に打ち倒しました、彼女は化石したように全身がこわばり、息も絶えたように見えました、——室の真ん中で手足を伸ばし、死んだように横たわっています。わたくしは、  
 278ウ 「おお、もろ人の讚めまつる . . .」<sup>6)</sup>を唱えながら、香をくゆらし、それから彼女の頭に十字架を置き、同時にバシリウスの祈禱を唱えました。すると十字架を置いた彼女の頭が自由を取り戻して、女は口をききました、しかし、手足や胴体は依然として生気がなく、石のようになっています。わたくしは十字架で片方の手を撫でました、するとその手が自由になりました、もう一方の手も撫でてやりますと、その手も自由になりました。わたくしが腹を撫でてやると、女は坐りました。足はまだ石のようです。わたくしは十字架で足を撫でる決心がなかなかつきません、——わたくしは考えに考えま

1) トボーリスクの正知事ヴァシーリイ・ヒルコフ (CM. 239 ウー240 オ)。

2) 同上ヒルコフ公爵の妻イリーナ・グリゴリーエヴナ。

3) CM. 210 ウ。

4) ロパチーツイ村を指す (CM. 267 ウ)。

5) 聖母称讃歌中の結びの短頌歌。

6) 腰から下は不浄と見なされていた。

## 司祭長アヴァクム自伝

した、——それから両方の足を撫でてやりました、こうして女はすっかり自由の身になりました。彼女は立ち上がり、神にお祈りをささげ、わたくしに低くおじぎをいたしました。悪鬼とも何とも正体のはっきりしない変な憑きものが彼女の中において、長いあいだいたずらをしていました。わたくしが聖油を注いでやりますと、こいつは完全に出ていってしまいました。彼女は神の御加護によって本復いたしました。また別なときのございですが、二人ながらヴァシーリイと申す悪鬼につかれた男たちが、わたくしの家に鎖でつながれておりました、——彼らについては語るも奇妙なことながら、279オこの男たちは自分のたれた糞を食べておりました。

神父よ、あなたにもう一つお話ししたものでしょうか？ 少々恥ずかしい気がしますが、こういうことがございました。トボーリスクにおりましたとき、わたくしの教子でアンナと申す娘が、わたくしの家におりました。彼女は公私の勤行に精励これ努め、現世のもろもろの美をうとんじておりました。悪魔は彼女の徳行をそねみ、彼女の心に最初の主人エリザールに対する同情の念を芽生えさせました。彼女はカルムィク族の捕虜の中から連れてこられ、彼のもとで育てられたのです。彼女は操正しく純潔を守ってきました、そして、満ちあふれるほど美事な実を結んだとき、悪魔が彼女をかつ<sup>さら</sup> 279ウました、——彼女はわたくしの家を出て最初の主人に嫁ぎたいと願ひ、いつも泣いて暮らすようになりました。彼女をこらしめるために、神は悪魔を彼女のもとに送りました、と申しますのは、彼女がわたくしの言うことに少しも耳をかさず、礼拝に精を出さなくなったからでございます。わたくしたちが勤行の祈禱にとりかかりますと、彼女はすぐ立ち上がり、腕を組み、そのまま突っ立っております。神は彼女の反抗を御覧になり、彼女のもとに悪魔をつかわされました、——勤行中に、彼女は立ったまま狂気に取りつかれるのでした。哀れな人間でありますわたくしは、彼女が可哀想でした、わたくしは十字架で彼女を祝福し、聖水を注いでやります、すると悪魔は彼女から逃げてゆきます。こうしたことが何度もございました。しかし、彼女は相変らず自分の無分別と反抗をあらためません。280オ善のためには抜け目なくいらせられる神は、ほかの手段で彼女を罰せられました、——彼女は勤行中に居眠りをはじめました、それから、長椅子の上にはぼったり倒れて眠りこんでしまいました、そして、三日三晩のあいだ目をさまさずに眠り続けました。わたくしは眠っている彼女に時々香を焚いてやるだけに止めました、彼女はかすかに息をしていました。わたくしは彼女が死ぬのではないかと思惟しました。彼女は四日目に正気に返りました。彼女は坐って、泣いております。食物をやっても、食べません。わたくしは聖歌詠唱のお勤めをすませ、祝福を与えて家人たちを下がらせました、それから、灯りのない暗闇の中で礼拝をはじめました。彼女はお祈りを唱えながらそっとわたくしに近づき、わたくしの足もとに倒れ伏しました。わたくしは彼女のそばを離れ、机の前に坐りました。彼女はまた机の方に近寄り、「聞いてください、神父様、わたくしはあなたにお話せよと命じられております」と泣きながら言いました。わたくしは彼女に耳をかしました。「わたくしが勤行中に居眠りして、ぼったり倒れましたとき、二人の天使がやって来て、わたくしをかかえ<sup>1)</sup>起こし、狭い道を通してわたくしを連れてゆきました。左手に、泣き声やすすり泣きや悲しげな声が聞こえました。それから、彼らはすばらしく美しい明るい場所にわたくしを連れてゆき、たくさんの美しい住居や室を見せてくれました。一つの室が一番きれいで、ほかのどの室にもましてえも言われぬ美しさに輝き、とても広うございます。彼らはその中にわたくしを案内しました、そこにはテーブルが並べられ、その上に白い卓布がかかり、御馳走を盛った皿が並んでいます。一つのテーブルのはしに一本の茂った樹が揺れそよ 281オぎ、ありとある美しい色で飾られています、わたくしはその樹にさえざる小鳥たちの声を聞きました、わたくしは今それがどんなに感動的で、どんなに素晴らしかったか、言いあらわすことができません！ 彼らはちょっとの間わたくしをそこにおいてから、再び室から連れ出し、「この室は誰ののか知っていますか？」と申しました。わたくしは、「存じません、わたくしをそこに通してください

1) 天国への入口の暗示 (см. Матей伝, VII, 13-14)。



## 司祭長アヴァクム自伝

した。わたくしが会堂正面の入口の間に着きましたとき、そこに小さな机がございました、わたくしが近づきますと、悪魔の仕業によりまして机がその場で飛び上がりました。わたくしは少しも動ぜず、聖像に向かってお祈りを唱えながら、片手で机に十字を切りました、それから進みよって、机を元の場所に据えました、するとこの机はいたずらをやめました。本堂に入りますと、ここでも悪魔が別ないたずらをしました、——本堂内の長椅子の上に死者が棺の中に横たわっていました、それが悪魔の仕業によりまして、上の蓋が開き、絳帷子が動きだしました、わたくしをおどそらがためなのです。神に祈りながら、わたくしが片手で死者に十字を切りますと、すべてが元通りになりました。さて、内陣に足を入れますと、祭服や法衣があちらこちらと飛びまわっております、わたくしをおどそると 284 年しているのです。わたくしはお祈りを唱え、聖壇に接吻しまして、片手で祭服を祝福し、そばに寄って手を触れました、すると、それらはいつも懸かっている場所におさまりました。それから、祈禱書を手にして、教会を出ました。わたくしたちに対する悪魔のたくらみはかようなものです！ でもこんな話はたくさんです。神の恩寵によりまして、十字架と聖油の力が悪魔につかれた人や病人たちに霊験をあらわさないはずがありませんか！ しかし、わたくしたちは次のことがらを心に留めておかなければなりません、——神が栄光を帰し給うのは、わたくしたちのためではありません、わたくしたちに対してではなく、御自身の御名に対してでございます<sup>1)</sup>。わたくしは塵あくたのようにつまらない人間です、キリストがおられなければ、わたくしに何ができましょうか？ 我が身のことを嘆き悲しむことこそ、わたくしのなすべきことでございます。ユダは奇蹟をあらわした人でした、しかし金銭を愛したために悪魔の手に落ちました。悪魔自身も天国におりました、しかし、高慢であったがために追い落とされました。アダムは楽園におりました、しかし、美食のたたりで追放され、五千 284 年五百年の地獄入りを宣告されました。こうしてみますと、自ら立てりと思ふ者は倒れぬように心せよ、ということがはっきりわかります。キリストの御足にすがり、聖母とすべての聖者たちにお祈りなされるがよい、そうすれば万事うまくゆくでしょう

〔B: 神父よ、あなたにもう一つお話をいたしましょう。ダウーリヤでわたくしがアファナーシイ・パシコーフと一緒にイグレン湖のほとりにおったときのことでございます。わたくしたちはひどく腹をすかせておりました、誰も魚をとることができません、時には食べる物が何一つございませぬ、わたくしたちは飢え死にしそうな有様でした。わたくしは神に祈りをささげ、二つの網を取って、流れに投げ入れました。明るる朝来てみますと、神はわたくしに六尾の鯉と二尾のかますを下さっておりました、——人々はみな驚嘆しました、と申しますのは、誰一人として一尾もとることができなかったからです。明るる日も神はわたくしに十尾ほど魚を下さいました。パシコーフは早速このことをかぎつけまして、おそろしくやつかみました。彼はその場所からわたくしを追い出し、自分の網をそこにかけてさせました。彼はわたくしを馬鹿にして、悪態をつき、牛や山羊の通る浅瀬の方に行けと命じました。水はくるぶしまでしかありません、——魚なんかいるもんですか？ 蛙だっていやしません！ わたくしはたいへん悲しみました、しかし、しばらく考えましてから、こう申しました、《慈悲深くあらせられます主よ、魚を与えてくれるのは水ではありません、——あなたの思召しによって、あなたがわたくしたちのためにすべてをおはからいになられるのです。この水のない場所でわたくしに魚をお与えください、あの愚か者をやりこめてください、不信心のやからに——かれらの神はいづくにありや——などと言わせないために、あなたの聖なる御名を讃めたたえてください》。こうお祈りしましてから、わたくしは網を取り、子供たちと水の中を歩きまわって、網をかけました。可哀想な子供たちは、わたくしをなじって、こう申しました、《おとうさん、網をくさらせて何になりまし

1) cm. 詩篇、CXIII, 9.

2) コリント前書、X, 12。

3) 詩篇、CXIII, 10。

よう？ そうじゃありませんか、水がないんですよ、魚なんかいるもんですか？」しかし、わたくしは彼らの言葉に耳をかさず、キリストを固く信じて、自分の思った通りにしました。明るる朝、子供たちを網のところにやろうとしました。彼らはこう答えました、「おとうさん、行ったら何になりますよ？ 網の中にどんな魚がいるもんですか？ わたくしたちを祝福してください、いっそのことわたくしたちは薪を取りに行ってきます」。聖霊がわたくしを力づけてくださいました、わたくしは網の中に魚を期待しておりました。わたくしは上の子のイワンに腹を立てて、彼だけ一人薪を取りにやりました、それから下の子を連れて、網のところに出かけました。わたくしはそのことについて一生懸命キリストにお願いしました。ついてみて、びっくり仰天し、大喜びしました、——神が網にぎっしり魚を詰めこんで下さっておりました。網は丸くなって横たわり、中に魚が入っておりました。息子のプロコーピイは、「おとうさん、魚が、魚が！」と叫びました。わたくしは彼に答えました、「せがれや、待ちなさい、そんなふうにははいけない、まず第一に神に感謝をささげ、それから水の中に入るとしよう」。さて、わたくしたちはお祈りを唱え、われらが神キリストを讃めたたえながら、魚を岸に曳きあげました、それから同じ場所に再び網をしかけ、やっとの思いで魚を家まで曳っぱってきました。明るる朝やって来ますと、前と同じくらい魚がかかっています、その次の日もやはり同じくらい魚がかかっていました。あの時は本当に不思議で涙がこぼれる思いでした。前のわたくしたちの場所では、神はバシコーフに一尾も魚を下さいませんでした。彼は羨望のとりこになり、又しても夜中に人をつかわし、わたくしの網をずたずたに引き裂かせました。まったく馬鹿はどうしようもありません！ わたくしたちは破れた網を掻き集め、こっそりつくろって、別な場所で魚をとっては、彼に知られないように、魚を日々の糧にしておりました。わたくしたちは梁<sup>やな</sup>をしかけました。そこでも神は魚を与えてくださいました、しかし、悪魔が彼をそそのかしました、彼はひそかに梁を引き抜くよう命じました。わたくしたちは、キリストの御為に苦しみを忍びながら、再び梁の修理をいたしました。こうしたことが何度となくございました。われらが神に、今の時も、絶えることなく、とこしえに栄光がありますように！

貧しき者の忍従は最後まで減びることはありません。

神父よ、耳をおかしてください。わたくしはシャクシャ<sup>1)</sup>の湖を目ざして、魚とりに行っている息子たちのもとへ赴く途中でした、——家から十五露里ほどの所で、息子たちはそこで人々と一緒に魚をしていたのです、——それは、氷が音を立てて割れ、神がわたくしに水を飲ませてくださった日のこと<sup>2)</sup>でございます。わたくしは子供たちのところで大きな桶に魚を積み、キリスト降誕祭の後で、幼な子たちのためにそれを家へ曳いてゆきました。さて、道の中ほどにまいりましたころ、地面の上をじかに曳いてゆきますので、わたくしはへとへとになりました、と申しますのは、このあたりでは寒気ばかりがことのほか厳しく、雪のないことがよくあるのです<sup>3)</sup>。火もなければ、何もありません、夜がやってきました、わたくしは力が尽きはて、汗まみれになっていました、足もいうことをききません。家までは八露里ほどあります、魚をうっちゃって、そのまま行ってしまったものでしょうか、——そうしたら、狐どもがむさぼり食って、家の者たちがひもじい思いをすることになります。困ったことになりましたが、曳っぱることができません。僅かばかりの道のりを曳っぱって見ましたが、足が震えてきます、それから、曳網をかけたまま、酔っぱらいのように、うつ伏せに道のまん中に倒れました。すっかりごえぎって、起き上がりました、それから、前と同じくらい進んでから、また倒れました。わたくしはこうして何度も必死の努力をしました、もう真夜中近くになっていました。濡れた上衣を脱ぎすて、濡れたシャツの上に乾いたのを着こみ、薄い琥珀織の白い外套を羽織って、

1) イルゲン湖の近くにある湖（チタの北西50露里）。

2) cm. 240 オ—241 オ。

3) 240オにも同様の描写が見られる。

## 司祭長アヴァクム自伝

とある樹の上によじのぼりました、——わたくしは眠りこみました、そして、樹から落ちました。目がさめてみますと、——何もかも凍りついています、足にはいた滑り止め付きの雪靴が凍っています、外套は薄っぺらで、腹はすっかり冷えきっていました。ああ、アヴァクムは、この哀れなみなし子は、閃く火花のように消えてゆき、実を結ばない樹のように伐り倒されるのです、<sup>1)</sup>——死がやって来たのです。わたくしは空を仰ぎ、きらめく星くずを眺め、そこにまします主を思い浮かべました、しかし、わたくしは十字を切ることもできません、すっかりごえきっていたのです。わたくしは横になったまま考えておりました、《キリストよ、まことの光よ、もしあなたがこの不幸な思いがけない今の難儀からわたくしをお助けくださらないならば、わたくしはもうどうすることもできません、蛆虫のように死んでゆきます》。すると、わたくしの心は温まりました、わたくしは早速また櫓に飛びつきました、まったく無我夢中です、首に曳綱をひっかけて、再び曳っぱりはじめました。しかし、もう力がありません、家まではまだ四露里もあります、——仕方なしなし、何もかもほうりだし、身一つで歩いてゆきました、一露里ほど足を引きずっていきましたが、またぶっ倒れてしまいました。もうどうすることもできません。ちょっと横になってから、もっと先へ進もうと思いましたが、しかし、足はごえきっています、起き上がることができません、ナイフがないので、雪靴を足から切り離す物がないのです。膝と手を使って一露里ほど這って進みました。膝はごえきってしまいました、動かすことができません、それでまた横になりました。もう家はそう遠くありません、でも行きつくことができないのです、尻でそろそろにじり寄ってゆきました、——やっとのことで自分のあばら屋に這いつきました。戸口に横たわりましたが、口はきけないし、戸もあけることができません。朝方になって家人が起きてきました、司祭長夫人は事の次第を知り、死人のようになっているわたくしを家の中に引き入れました。わたくしはひどくのどがかわいておりました、——彼女は着物を脱がせて、わたくしに水を飲ませました。可哀想な彼女には家の中に二つの不幸が重なりました、わたくしと牝牛が病にたおれたのです、——わたくしたちの財産といたらこれきりでした、——この牝牛が氷の下の水の中に落ちました、それで怪我をして、家の中に横たわり、死にかけておりました。この牝牛は二十五ルーブルの<sup>2)</sup>備でわたくしたちの手に入り、子供たちに牛乳を与えておりました。イリーナ・ミハイロヴナ皇女が祭服と儀式用品一式をモスクワからトボーリスクのわたくしに送って下さいました、バショーフは勤行の必需品としてそれらを取り、その代わりにこの牝牛をわたくしにくれたのです。この牝牛は一・二年の間わたくしたちを子供ともども養ってくれました。わたくしたちは松の皮や草と一緒によくこの牛乳をすすったものです、それで腹がもたれずにすみました。可哀想な妻は、子供たちと一緒に、泣く泣く牝牛を斬り殺しました、そして、牛から流れ出た血を一人のコサックに報酬として与えました、この男は魚を積んだわたくしの櫓を家に曳っぱりしてきました。(65オー68オ)

さあ、神父よ、あなたはわたくしの下手なおしゃべりを十分に聞いて下さいました。主の御名によって、今度はわたくしがあなたに命じます、あなたもあのキリストの僕に<sup>3)</sup>書いてやりなさい、<sup>4)</sup>聖母が御手の中で悪魔をもみ潰し、あなたに引き渡して下さった<sup>5)</sup>次第を、また蟻どもがあなたの隠しどころを<sup>6)</sup>咬みまわった<sup>6)</sup>次第を、さらにまた悪魔が薪を燃やし、あなたの僧庵の表がわが焼けてしまったのに、中はまったく無事であったこと、そして、あなたが天に向かって大声で叫んだ<sup>7)</sup>話を、さらにはまた、

1) см. Лука, XIII, 6-9.

2) ミハイール・フョードロヴィチ帝の皇女、アレクセイ帝の姉にあたる(1627—1679)。

3) см. 232 オの註。

4) エピファニーイはアヴァクムの命令に従い、自分の伝記を書いた。アヴァクムは以下にこの伝記に書かれている話を三つあげている。テキスト—— А. Н. Робинсон, Жизнеописание Аввакума и Эпифания, АН СССР, Москва, 1963, стр. 179-202.

5) 同書, стр. 186.

6) 同書, стр. 186-187.

7) 同書, стр. 186.

キリストと聖母を讃めたたえんがために、あなたの心に浮かぶその他のことどもを。わたくしの言うことをききなさい、もしあなたが書かなかつたら、わたくしは本当に怒ります。あなたはわたくしの話  
 285オ を喜んで聞いてくださいました、何も恥ずかしがることなんかありません、——ほんの少しでも話してください！ 使徒行伝の36節<sup>1)</sup>と42節<sup>2)</sup>によりますと、使徒パウロとバルナバは、エルサレムにおける集会で、全会衆を前にして、彼等により神が異邦人のうちにいかに多くの<sup>しるし</sup>徴と不思議を為し給うたかを語りました、そして、キリストの御名があがめられたのです。また、信者となりしもの多く来たり、  
 285ウ ざんげして自らの行いを告げたのです。こうした例は使徒の手紙と行伝の中にたくさんあります。話さない、恐れてはなりません、ただ良心にだけは忠実でありなさい、自分の栄光を求めるためではなく、キリストと聖母の栄光のために語りなさい。その話でキリストの僕を喜ばせましょう。わたくしたちが死に、彼がわたくしたちの書いたものを読んだら、彼は神の御前でわたくしたちのことを話すでしょう。わたくしたちはわたくしたちで、読んだり聞いたりしてくれた人々のために神にお祈りいたしましょう。彼らは、あちらのキリストの御そばで、とこしえにわたくしたちの間になり、わたくしたちは彼らの仲間になるでしょう。アーメン。

---

1) 使徒行伝、XV, 12。

2) 使徒行伝、XIX, 17。

3) 使徒行伝、XIX, 18。